

四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

津内・東井坪遺跡
中森遺跡
林浴遺跡
林下所遺跡
林下所・木太今村上所遺跡
林下所・六条乾遺跡
六条上川西遺跡
六条西村遺跡

2004年3月

高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市に所在する津内・東井坪遺跡、中森遺跡、林浴遺跡、林下所遺跡、林下所・木太今村上所遺跡、林下所・六条乾遺跡、六条上川西遺跡、六条西村遺跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して感謝したい。
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 讃岐文化遺産研究会
- 4 四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財調査は、文化振興課文化財専門員山本英之・山元敏裕・大鶴和則・小川賛が行い、末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。整理作業は小川が行い、同課文化財専門員川畠が補佐した。
- 5 報告書掲載の遺物写真撮影は、杉本和樹氏（西大寺フォト）の協力を得た。
- 6 本書の執筆は、第1・2章を川畠が、第3章No10を末光が担当し、それ以外を小川が行った。編集も小川が行った。
- 7 本文の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松南部」「白峰山」及び高松市都市計画図2千5百分の1「鬼無2」「御城1」「木太2」「林」を一部改変して使用した。
- 8 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 9 本報告書の高度値は海抜高を表し、方位は座標北または磁北を示す。
- 10 本書用いる遺構の略さは次のとおりである。
SB：掘立柱建物 SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 SR：旧河道 SX：性格不明遺構
- 11 土壌及び土器観察の色調表現は、新版 標準土色帖（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

目 次

| | |
|-----------------|----|
| 例言・目次 | 1 |
| 第1章 調査の経緯と経過 | 2 |
| 第1節 調査の経緯 | 2 |
| 第2節 調査の経過 | 2 |
| 第2章 地理的環境・歴史的環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 6 |
| 第2節 歴史的環境 | 6 |
| 第3章 調査の成果 | 11 |
| 第4章 まとめ | 79 |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

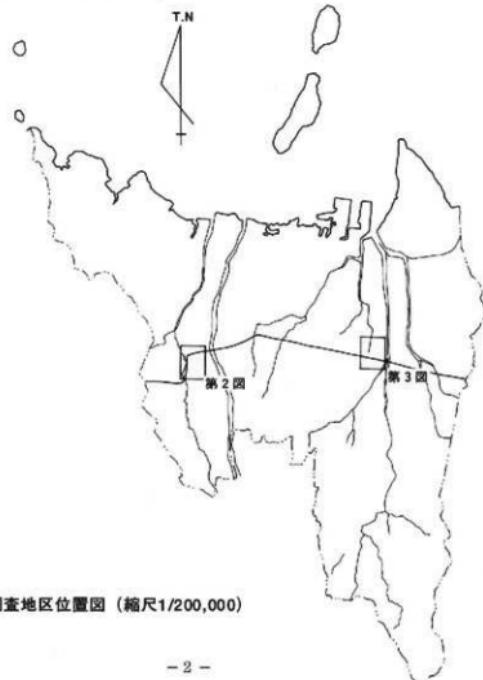
四国横断自動車道開通特別用地対策事業は、高松市域を東西に横断する四国横断自動車道建設に伴って、周辺地域の道路整備等を目的に実施されたものである。当事業は香川県独自のもので、県費補助のもと市町及び土地改良区などの公共団体又は公共的団体が事業主体となり、市町道路整備や水路改修、地区集会所建設などを事業内容としている。この事業実施にあたって、事業主体である高松市都市開発部高速交通対策課（現在、高速交通対策室）と高松市教育委員会は、平成8年度に協議を行った。その結果、埋蔵文化財包蔵地および隣接する地域においては、事前の確認調査および立会調査を実施し、必要に応じて発掘調査を実施することで合意に達した。

第2節 調査の経過

この事業に伴う調査は、平成8年度から開始し、平成15年度の事業終了まで随時行った。このため、調査後の整理作業は、平成14年度から開始し、平成15年度の事業終了と同時に報告書を刊行することになった。

この事業の一つの特徴として、秋の稲刈前後に用地売買の契約がなされ、早い場合では稲刈直後に工事を開始するという状況が多く見られた。そのため、稲刈直後に確認調査を実施して埋蔵文化財が確認された場合、高速交通対策室より文化財保護法第57条の3に基づく通知が香川県教育委員会に提出され、発掘調査の指示が県教委よりあると同時に、発掘調査を実施しなければならないという懲しさが挙げられる。

さて、調査の概要については、第1表のとおりである。合計22地点を調査し、調査回数は28回に及び、調査面積は約4,500m²を測る。確認調査を15回実施し、そのうち6回が発掘調査に至った。さらに、工事中の立会調査は7回実施した。地区別では、高松市域の西部にあたる檀紙・中間町周辺が9地点、高松市域の中心部にあたる六条・林町周辺が13地点であった。



第1図 調査地区位置図（縮尺1/200,000）

| 地区 | No. | 調査年度 | 遺跡名(路線名) | 所在地 | 北緯 東経 | 調査面積 (m ²) | 調査期間 | 遺跡の内容 | 調査状況 |
|---------|-----|--------|-----------------------------|------------|-----------------------------|---------------------------|--------------------------|--|------|
| 檜紙・中間地区 | 1 | 平成8年度 | (中間町45号線) | 中間町 | 34° 17' 38" 133° 59' 46" | 72 | 平8.6.4～ 平8.6.6 | 少量の遺物は出土したが、遺構等の埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 2 | 平成8年度 | (檜紙町66号線) | 檜紙町 | 34° 17' 36" 133° 59' 47" | 92 | 平8.10.17 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 3 | 平成9年度 | (中間町45号線) | 中間町 | 34° 17' 38" 133° 59' 50" | 40 | 平9.9.4 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 4 | 平成12年度 | (中間町48号線) | 中間町 | 34° 17' 34" 133° 59' 49" | 50 | 平13.1.15～ 平13.1.16 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 5 | 平成13年度 | 津内・東井坪遺跡 (檜紙町55号線) | 御庭・ 中間町 | 34° 17' 42" 133° 59' 46" | 65 | 平13.10.29～ 平13.10.30 | 平安時代の溝、近世以前の道路状 態構を確認した。 | 確認調査 |
| | | | | | | 225 | 平13.12.10～ 平13.12.20 | | 事前調査 |
| | 6 | 平成13年度 | (檜紙町27号線西) | 檜紙町 | 34° 18' 10" 133° 00' 17" | 10 | 平13.10.23～ 平13.10.25 | 時期不明の溝を確認した。 | 確認調査 |
| | 7 | 平成13年度 | 中森遺跡 (檜紙町27号線東) | 檜紙町 | 34° 18' 11" 133° 00' 08" | 57 | 平12.11.26～ 平12.11.29 | 中世の溝及び集石遺構を確認した。 | 確認調査 |
| | 8 | 平成14年度 | (中間町15号線) | 中間町 | 34° 17' 33" 133° 59' 40" | 60 | 平14.10.25 | 時期不明の溝を確認した。 | 確認調査 |
| | 22 | 平成11年度 | (成合粒紙線) | 檜紙町 | 34° 17' 44" 133° 59' 58" | 150 | 平12.3.30～ 平12.4.20 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 工事立会 |
| 六条・林地区 | 9 | 平成8年度 | 林木こ通跡 (林町61号線) | 林町 | 34° 18' 15" 134° 04' 32" | 107 | 平9.2.28～ 平9.3.3 | 古代～中世の条里界線の溝を確認 するとともに、須恵器片が出土した。 | 工事立会 |
| | 10 | 平成8年度 | 林下所遺跡 (林町60号線) | 林町 | 34° 18' 17" 134° 04' 42" | 372 | 平9.2.26～ 平9.3.31 | 近世以前の条里界線・井戸とともに、 時期不明の噴礫を確認した。 | 工事立会 |
| | 11 | 平成10年度 | 林下所遺跡 (林下所墓地) | 林町 | 34° 18' 07" 134° 04' 38" | 73 | 平10.4.20～ 平10.4.22 | 弥生時代と想定される溝状遺構を確 認した。 | 確認調査 |
| | | | | | | 632 | 平10.6.15～ 平10.7.21 | | 事前調査 |
| | 12 | 平成10年度 | 林下所遺跡 (林町8号線) | 林町 | 34° 18' 07" 134° 04' 50" | 400 | 平10.11.26～ 平10.11.30 | 弥生時代の溝と近世の土坑を確認し た。 | 工事立会 |
| | 13 | 平成11年度 | 林下所遺跡 (林町65号線) | 林町 | 34° 18' 14" 134° 04' 48" | 97 | 平11.11.8～ 平11.11.9 | 弥生時代～平安時代の構造遺構及 び掘立柱建物を確認した。 | 確認調査 |
| | | | | | | 308 | 平11.12.3～ 平11.12.22 | | 事前調査 |
| | 14 | 平成10年度 | 林下所遺跡 (林町60号線) | 林町 | 34° 18' 15" 134° 04' 53" | 200 | 平11.1.27 | 占墳時代の須恵器がまとまって出土 した。 | 工事立会 |
| | 15 | 平成14年度 | 林下所・木太今村 上所遺跡 (林町8号線) | 林町 木太町 | 34° 18' 29" 134° 04' 52" | 120 | 平14.10.29～ 平14.10.31 | 弥生時代の井戸・土坑、占墳時代後 期～終末期の掘立柱建物・溝等を確 認した。 | 確認調査 |
| | | | | | | 600 | 平14.11.25～ 平14.12.27 | | 事前調査 |
| | 16 | 平成15年度 | (林町65号線) | 林町 | 34° 18' 09" 134° 04' 49" | 73 | 平15. 5.27～ 平15. 5.28 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 17 | 平成14年度 | 林下所・六条乾 連跡 (林町70号線) | 林町 六条町 | 34° 18' 13" 134° 04' 56" | 100 | 平14.10.28～ 平14.10.29 | 平安時代の条里地割に沿った溝を確 認した。 | 確認調査 |
| | | | | | | 80 | 平15. 1. 8～ 平15. 1. 22 | | 事前調査 |
| | 18 | 平成10年度 | (六条町36号線) | 六条町 | 34° 18' 01" 134° 05' 17" | 65 | 平10.10.20～ 平10.10.22 | 埋蔵文化財は確認されなかった。 | 確認調査 |
| | 19 | 平成12年度 | 六条上川西遺跡 (六条町38号線) | 六条町 | 34° 17' 53" 134° 05' 09" | 158 | 平12.10.24～ 平12.10.31 | 弥生時代の土坑及び性格不明遺構 を確認した。 | 確認調査 |
| | 20 | 平成13年度 | (六条町38号線) | 六条町 | 34° 18' 06" 134° 04' 59" | 110 | 平13.10.12～ 平13.10.15 | 時期不明の溝を確認した。 | 確認調査 |
| | 21 | 平成15年度 | 六条西村遺跡 (林町23号線) | 六条町 | 34° 17' 53" 134° 04' 34" | 90 | 平15. 5.29～ 平15. 5.30 | 弥生時代～古代の溝を多段確認し た。 | 確認調査 |
| | | | | | | 100 | 平15. 7.22～ 平15. 7.31 | | 事前調査 |

第1表 調査一覧表



第2図 調査地点位置図（複紙・中間町周辺、縮尺1/7,000）



第3図 調査地点位置図（六条・林町周辺、縮尺1/7,000）

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松平野は、瀬戸内海に北面した香川県の中央に位置し、低い山塊に囲まれている。この平野は、西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれており、東西20km、南北16kmの規模をもつ。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため侵食開拓から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ピュート）となっている。西側の五色台は、平坦な頂部をよく残しており、尾島もまた同様に開拓から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれらより開拓が進んでおり、紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は、これら侵食が進んだあと、沖積世に入ってから堆積されて形成されたもので、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。今回の調査地も、扇状地に立地している。

第2節 歴史的環境

【高松平野西部】

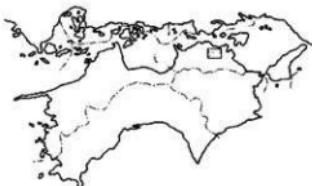
高松平野西部で、もっとも古い人類の歴史が刻まれているのが、中間・西井坪遺跡や香西南西打遣跡、中森遺跡である。中間・西井坪遺跡では、旧石器時代後期に属する石器群が見つかるとともに、鹿児島湾北半にあたる姶良カルデラが大噴火して降ったAT火山灰の堆積層も確認されている。次の縄文時代では、鬼無藤井遺跡で川跡から晩期の上器群が出土している。

耕作が始まる弥生時代では、まず鬼無藤井遺跡において前期の環濠集落が出現する。この集落は、二重の環濠を巡らし、最大径約70mの規模をもつ。弥生時代中期の遺跡は未確認で空白を生じるが、御殿貯水池遺跡が中期末まで遡る可能性がある。後期になると、西打遣跡で堅穴住居や掘立柱建物跡を、中間・西井坪遺跡では掘立柱建物跡や土器棺墓が確認されている。同じ後期に属する御殿池遺跡は、遺構は不明だが、溜池浚渫時に上器がまとめて出土している。

古墳時代になると、高松平野でも古墳の築造が顕著になる。石清尾山塊では、前期初頭の鶴尾神社4号墳を皮切りに前方後円墳や双方中円墳といった横石塚が出現する。横石塚は、尾根頂部や山頂に累々と築造され、全長100m近くを測るものも現れるが、中期中頃には、その築造は終焉するようである。一方、平野西部では、中間・西井坪遺跡で前方後円墳を含む前期古墳の周辺が3基確認されている。中期になると平野西部で最大規模をもつ全長60.5mの前方後円墳・今岡古墳が築造される。ほぼ同時期、中間・西井坪遺跡では埴輪や陶棺を製作・焼成していたことが知られており、ここで製作された陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期初頭になると、それまで山塊や丘陵部のみだった古墳の築造が平野にも見られるようになる。相作（あいさこ）牛塚古墳は、後期初頭に築造された古墳で、挂甲（けいこう）や金銅装の馬具を随葬していた。中森古墳は、昭和46年11月に消滅したもので、かつて南北約4m、東西約5m、高さ約1.2mを測る不整円形の墳丘（第8図）が残っていた。その墳頂部に埋葬施設の底面が残っていたと伝え、墳丘除去時に須恵器（第9図）が出土している。

古墳時代後期後半では、平野縁辺部の丘陵において横穴式石室を主体部とした群集墳の築造が盛んになる。先の石清尾山塊でも横穴式石室墳が見られるほか、山塊南の淨願寺山山頂付近では小規模な横穴式石室墳が密集している。一方、平野縁辺に位置する平木古墳群や古宮古墳周辺では、大形の横穴式石室墳が点在している。また、古墳の所在は知られていないが、方室山東麓からは須恵器（第7図）が一括で出土しており、古墳の存在が想定される。

古墳時代に属する集落は、兀塚遺跡で後期末と推定される掘立柱建物跡群が確認されているだけで、墳墓



第4図 高松市位置図

と比べて不明な部分が多い。飯田町東青木遺跡も、同じ後期末のもので、溝が確認されている。

古墳の築造が終了し、代わって豪族たちは寺院建築を行うようになる。平野中央部では坂田庵寺、平野北西部で勝賀庵寺が知られており、両寺とも川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土しており、白鳳期(飛鳥時代後半)の創建年代が推定されている。

奈良～平安時代にかけては、正箱遺跡・薬王寺遺跡が知られる。6時期に分かれるが、計50棟以上の掘立柱建物跡が見つかり、中には面積が40m²を超える大形のものがある。さらに、区画溝や掘立柱建物跡の中には矢里地割と方位が符合するものがあり、南海道に接する当該地域では、早くから条里地割の敷設が進んでいたことがわかる。

鎌倉～室町時代でも、条里地割に符合した溝跡が、香山西南西打遣跡や西打遣跡で数多く広範囲に検出されており、条里地割がこの頃には普遍的であったと考えられる。さらに、西打遣跡では東西54m南北40mの範囲で、区画溝に囲まれた鎌倉時代に属する屋敷地が発掘されており、莊園を基盤とした領主層の成長がうかがえる。力を蓄えた領主たちは、武装して武士化し、やがて戦国時代を強力な武士団として活躍していく。中森遺跡においても、この時期の屋敷地が発掘されている。

香川郡を拠点として、讃岐各地や備讃瀬戸に支配権を握ったのが、香西氏である。香西氏は、承久の乱で戦功をあげ、幕府より阿野・香川郡を与えられた氏族で、この香西氏を核として地元の領主が集結して一大勢力を築いた。この香西氏を経済的に支えたのは、『兵庫北閑入船納帳』(文安2年(1445))にも記されている香西浦であり、活発な商業活動が行われたのであろう。香西氏は、勝賀山に有事の際の城を築き、常に佐料城を居館とし、その周囲には植松城・芝山城・鬼無城跡などの出城を築いた。後には、本拠地を香西浦に近い藤尾城に移し、作山城を築いている。さらには、香西氏に従った地元の領主たちの居城が周囲に点在している。筑城城や飯田城、片山城が該当し、香川郡や阿野郡を中心に、その数は一説には40余にのぼるといふ。筑城跡および飯田城跡周辺には、今でも塚が群集している。墳輪片が出土するものもあり、相作牛塚古墳のように古墳もあると推定されるし、中世の「武将の墓」という言い伝えも残っている。

豊臣秀吉による四国攻撃以後、その家臣である生駒親正が讃岐一国を支配し、高松城を築き、江戸時代に至る。現在の市街地は、この高松城の城下町が発展したものである。やがて、藩主は生駒家から松平家に替わり、明治維新を迎える。正箱遺跡・薬王寺遺跡や鬼無藤井遺跡では、江戸時代の庶民の墓や屋敷跡が発掘されている。

【高松平野中央部】

高松平野中央部で、最古の遺跡は、縄文時代草創期の有尖頭器が表採された大池遺跡である。しばらくの空白後、晩期の遺跡が発掘されており、木製器具が出土した林・坊城遺跡や浴・長池遺跡、木器加工場であった居石遺跡等をあげることができる。

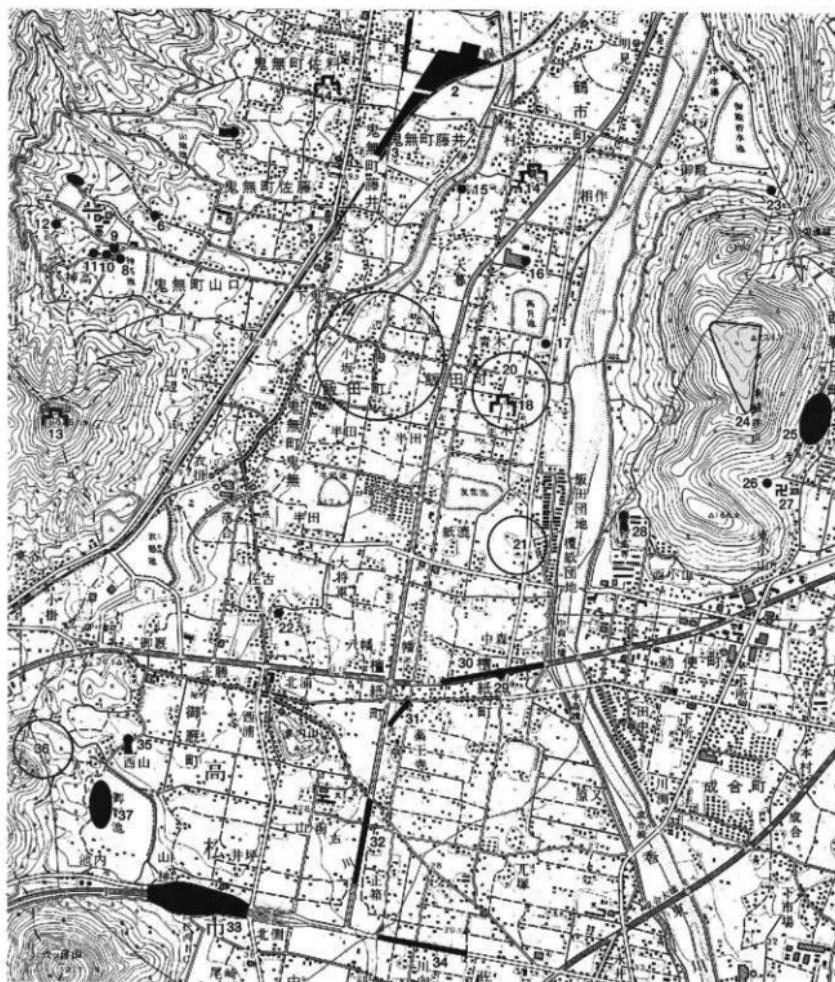
弥生時代前期に移ると、天溝・宮西遺跡、汲水遺跡で環壕集落が出現するとともに、上西原遺跡、浴・長池遺跡、さこ・長池Ⅱ遺跡で不定形小区画水山が見つかっている。これら水山は、洪水砂によって埋もれたことが明らかとなっている。中期になると、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東I遺跡、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡で住居跡、周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが、松林周辺以外は規模・密度とも総じて希薄である。なお、松林遺跡では、礫礫に土器片を供出した事例が確認されている。

弥生時代後期になると遺跡は数・規模ともに爆発的に増加し、上天神遺跡、犬溝・宮西遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廐棄土器を伴う集落が出現する。

古墳時代では、これら弥生時代後期の遺跡が前期初頭に至るまで集落が存続するが、それ以降は集落が廃絶している。そうした中、太田下・須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出しており、当該期の数少ない事例である。一方、古墳の分布状況を概観すると、石清尾山古墳群をはじめ、主に丘陵上に古墳が前期～中期にかけて築造されており、平野部における集落の動向と微妙な相違が見られる。

古代では条里遺構が注目される。各遺跡で、条里界線にあたる遺構を検出しておらず、飛鳥時代から現代に至るまで時代は様々であるが、条里地割施行が段階的に進んだことが明らかになりつつある。中でも、松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝を検出し、時期も7世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また、浴・長池Ⅱ遺跡では旧香川・山田郡界線にあたる部分に幅6mの間隔で並行する道路側溝を検出している。

中世では、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡で、旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されている。また、空港跡地遺跡では溝に囲まれた屋敷跡を確認しているほか、神内城跡や松縄城跡といった十河氏や香西氏に関わる城跡も知られている。



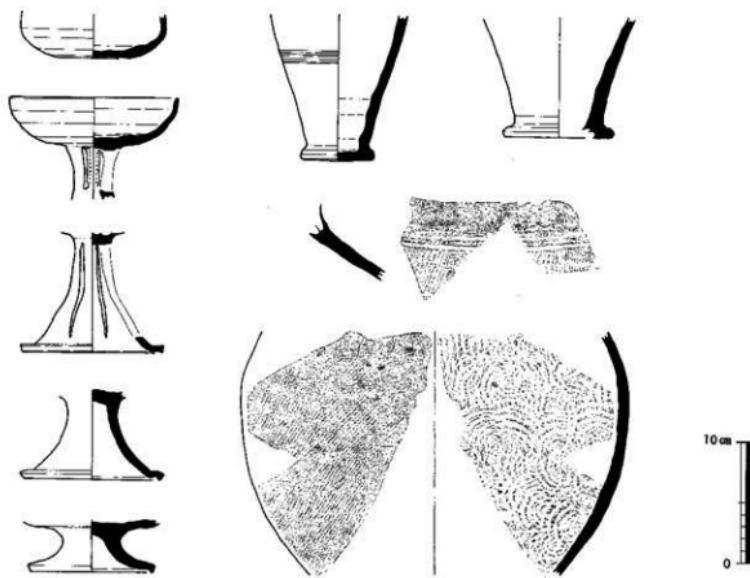
- | | | | | |
|------------|---------------|-------------|------------|-----------|
| 1 香西南西打遣跡 | 2 西打遣跡 | 3 鬼無藤井遣跡 | 4 佐科城跡 | 5 今岡古墳 |
| 6 大塚古墳 | 7 平木古墳群 | 8 神高池北西古墳 | 9 神高池西古墳 | 10 こめ塚古墳 |
| 11 古宮古墳 | 12 山野塚古墳 | 13 鬼無城跡 | 14 篠城城跡 | 15 王墓古墳 |
| 16 相作牛塚古墳 | 17 飯田町東青木遺跡 | 18 飯田城跡 | 19 半田・小坂塚群 | 20 青木塚群 |
| 21 紙すき塚群 | 22 御殿大塚古墳 | 23 御殿跡水池南遺跡 | 24 淨願寺山古墳群 | 25 南山浦古墳群 |
| 26 片山池1号窓跡 | 27 板田廣寺 | 28 がめ塚古墳 | 29 中森古墳 | 30 中森遺跡 |
| 31 八幡遺跡 | 32 正箱道路・薬王寺遺跡 | 33 中間・西井坪遺跡 | 34 凢塚遺跡 | |
| 35 御殿天神社古墳 | 36 万堂山東麓 | 37 御殿池遺跡 | | |

第5図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）

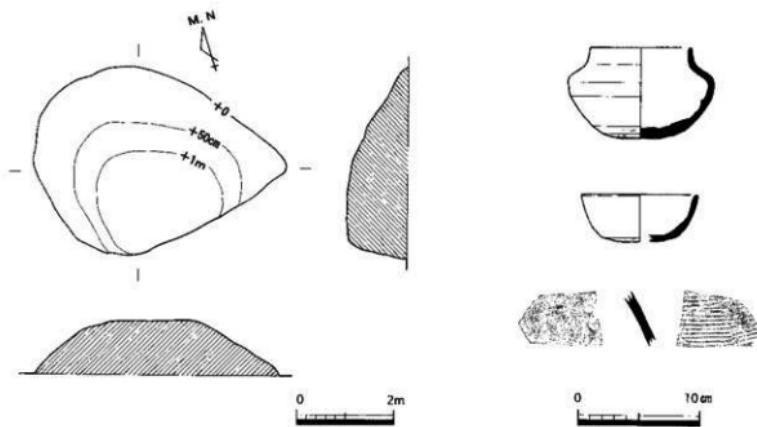


- | | | | | | |
|-----------------|-----------------|---------------------|-------------|---------------|------------|
| 1 東中筋遺跡 | 2 木太中村遺跡 | 3 白山神社古墳 | 4 向城跡 | 5 神内城跡 | 6 木太本村II遺跡 |
| 7 松籠城跡 | 8 天満・宮西遺跡 | 9 境日・下西原遺跡10 松籠下所遺跡 | 11 キモンドー遺跡 | 12 上西原遺跡 | |
| 13 大池遺跡 | 14 弘福寺領田園比定地北地区 | 15 上天神遺跡 | 16 太田下・須川遺跡 | 17 蛙股遺跡 | |
| 18 尼石遺跡 | 19 井手東II遺跡 | 20 井手東I遺跡 | 21 沓・長池II遺跡 | 22 沓・長池遺跡 | |
| 23 布・松ノ木遺跡 | 24 林・坊城遺跡 | 25 六条・上所遺跡 | 26 林下所遺跡 | 27 林下所・木太今村遺跡 | |
| 28 林下所・六条乾遺跡 | 29 六条上川西遺跡 | 30 六条西村遺跡 | 31 宗高坊城遺跡 | 32 波仏遺跡 | |
| 33 多肥魔寺 | 34 四原遺跡 | 35 日暮松林遺跡 | 36 松林遺跡 | 37 多肥松林遺跡 | 38 多肥宮尻遺跡 |
| 39 弘福寺領田園比定地南地区 | 40 宮西・一角遺跡 | 41 一角遺跡 | 42 空港跡地遺跡 | | |

第6図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）



第7図 御殿町万堂山東麓出土須恵器実測図（縮尺1/4）



第8図 中森古墳墳丘平面・断面図（縮尺1/100）

第9図 中森古墳出土須恵器実測図（縮尺1/4）

第3章 調査の成果

檀紙・中間地区

No.1 中間町45号線 (平成8年度確認調査)

1 調査概要

- a. 場所 中間町
- b. 期間 平成8年6月4日
・6日
- c. 面積 約72m²
- d. 担当者 大島和則・中西克也

2 調査内容

工事予定地において、3箇所のトレーナーを設定し、確認調査を実施している。

第1トレーナーは、西半分が現況の耕作土直下で地山と考えられる黄灰色シルト層となり、東半分では近世期の堆積層が地山との間に認められる。小規模な南北方向の溝が2条検出されているが、遺物は確認できなかった。

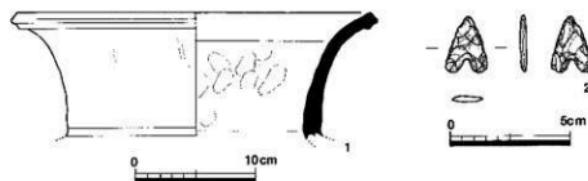
第2トレーナーでは、地山層が徐々に低くなり、東端においては急に下がる。上位には、近世期の堆積が厚く認められている。遺構は確認されていないが、遺物が若干量認められた。第3トレーナーは、地表が第2トレーナーより1.5m以上上がり、東に流れる古川の氾濫原に位置すると考えられる。現況の耕作土の下は、土壌化していないシルト質極細砂層が2層存在し、それより以下は地山層となっている。遺構は確認しておらず、出土遺物も陶器片が数点のみである。

出土遺物(第11図)は、第2トレーナーのものである。1は須恵器蓋である。2は石錐である。

以上のような結果から、工事範囲については遺構・遺物とも希薄な状況が考えられ、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



第10図 中間町45号線 平成8年度トレーナー配置図(縮尺1/4)



第11図 第2トレーナー出土遺物実測図(縮尺:土器1/4, 石器1/2)

No.2 檜紙町66号線（平成8年度確認調査）

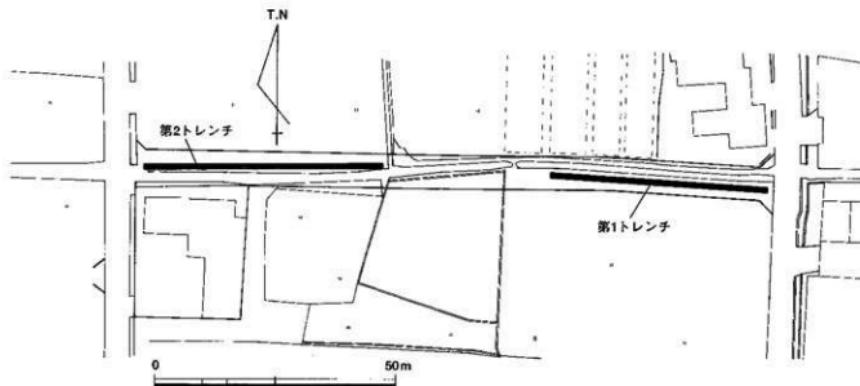
1 調査概要

- a. 場 所 檜紙町
- b. 期 間 平成8年10月17日
- c. 面 積 約92m²
- d. 担当者 大嶋和則

2 調査内容

T.事範囲のうち、東西に第1・2トレンチを設定し確認調査を実施した。第1トレンチ東半分は、表土及び黄褐色シルトの下位に礫層が認められ微高地と考えられる。第1トレンチ西半分と第2トレンチでは、礫層上位に黒褐色土層の堆積が20cm程認められ、やがて礫層は観察されなくなることから自然河道と推定される。この黒褐色土層より、土師器及び須恵器の細片が少量認められる。遺構は、近世期と推定される飾旗・ビットが若干確認された。

以上のような結果から、工事範囲については遺構・遺物とも希薄な状況が考えられ、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。また、以西の工事区間についても同様の状況が想定されることから、同措置とした。



第12図 檜紙町66号線トレンチ配置図（縮尺1/1000）

No.3 中間町45号線 (平成9年度確認調査)

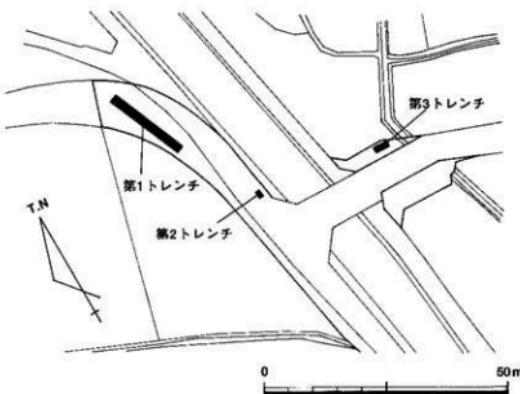
1 調査概要

- a. 場所 中間町
- b. 期間 平成9年9月4日
- c. 面積 約40m²
- d. 担当者 山元敏裕

2 調査内容

平成8年度に行われた工事部分の西延長部で、古川の氾濫原に位置する。トレーニチを3箇所設定したが、遺構は確認されなかった。遺物も唐津1点のみである。

以上のような結果から、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



第13図 中間町45号線トレーニチ配置図（縮尺1/1000）

No.4 中間町48号線 (平成12年度確認調査)

1 調査概要

- a. 場所 中間町
- b. 期間 平成13年1月15日・16日
- c. 面積 約50m²
- d. 担当者 小川賛・末光甲正

2 調査内容

工事範囲で3箇所のトレーニチを設定した。西半分では砂層及び黒褐色土の堆積が認められ古川の氾濫原に相当するものと考えられるが、東半分ではやや高地状となっていた。しかし遺構は確認されず、サヌカイト片・須恵器片がローリングを受けた状態で若干出土したのみである。以上のような結果から、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

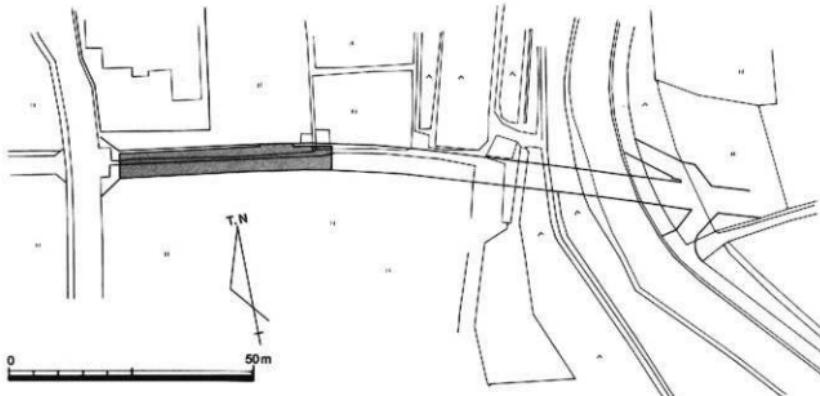


第14図 中間町48号線トレーニチ配置図（縮尺1/1000）

No.5 津内・東井坪遺跡（檍紙町55号線 平成13年度調査）

1 調査概要

- a. 場 所 御厩町・中間町
- b. 期 間 平成13年12月10日～20日
- c. 面 積 約225m²
- d. 担当者 小川賛



第15図 津内・東井坪遺跡（檍紙町55号線）調査配図図（縮尺1/1000）

2 調査内容

a. 調査の経緯（第15図）

工事は調査地の東を流れる古川の両岸に、5m幅の道路を設置し橋を渡すもので平成13年度は西岸部分が予定されていた。当区間が、新設工事であるため確認調査を行った。トレンチは工事範囲の北端に沿って東西方向に設定し、河川の断崖部付近までを確認した。結果、調査地の以西では遺構・遺物は確認されなかつたが、調査地中央部では須恵器等の遺物がまとまって出土し、調査を実施することになった。また遺跡名について、当地が「津内」及び「東井坪」の字名の地に接することから津内・東井坪遺跡とした。なお東岸部の工事については、宅地が建ち込む狭小な範囲であることや、調査地以西と同様の状況が考えられたため、確認調査は行わなかった。

b. 遺構の行方（第16図）

遺構面は2面確認された。第1面では大畦畔状の遺構が東西方向に認められ、南側に溝状遺構SD01が併走して検出された。またこの大畦畔状の遺構には、水戸と考えられるSD02・SD03が開削されている。第2面では遺存状態が悪いものの、直交する位置関係でSD04・SD05が認められた。SD04からは遺物が比較的まとまって出土している（第18図）。またトレンチ断面のみの確認となったが、第2面の下層部には調査地を蛇行する大溝（SD06）の存在が想定された。

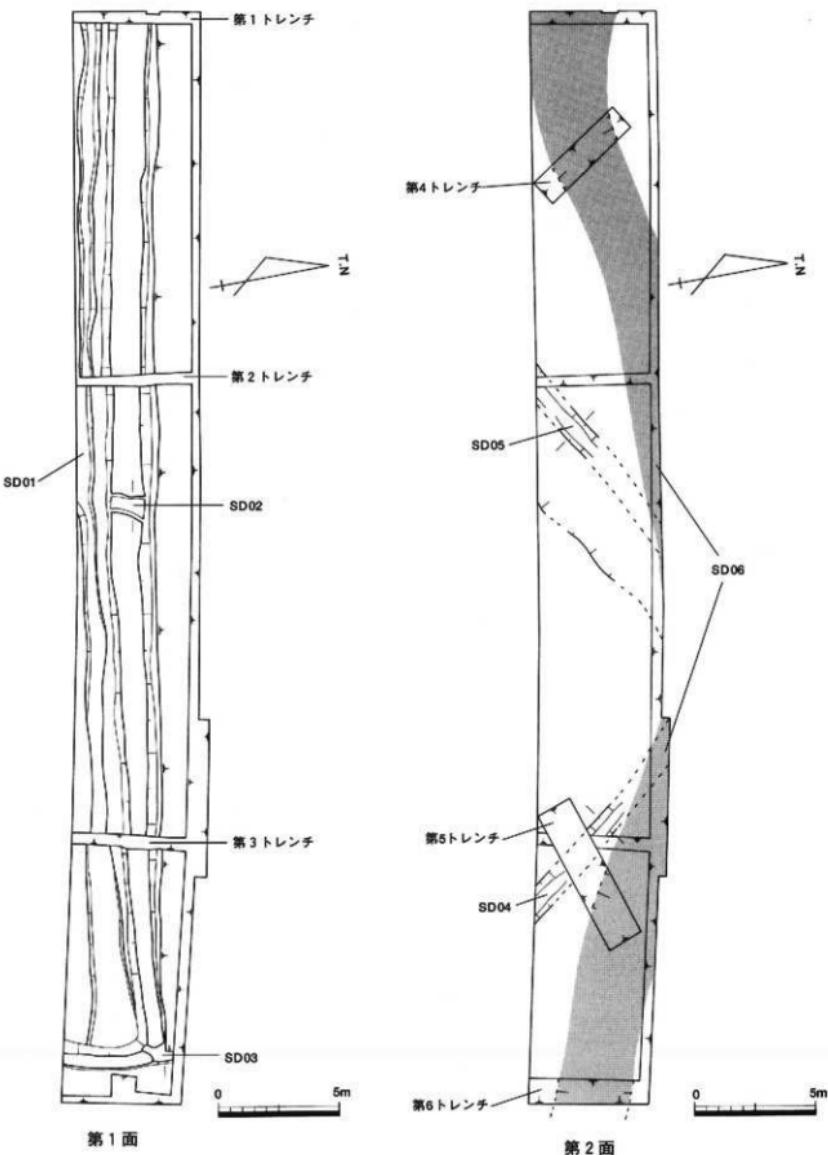
c. 基本土層（第17図）

地山は⑦層の黄色シルト質粘土層で、この下位及び東部では砂礫⑧層が認められ、東を流れる河川の自然堤防状の地形が推定される。最下位と想定される大溝（SD06）は西部で⑦・⑧層を基盤とし、堆上④層及び⑤層の上半部で遺物が集中して出土した（第19図）。さらにSD04・SD05がこれに後出して開削されている。上位の堆積層では大畦畔を覆う⑨・⑩層が近世の陶磁器片を含んで見られ、当遺構の埋没時期を示すものと考えられる。

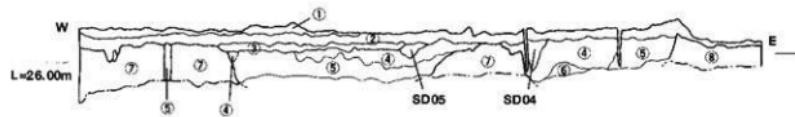
d. 遺構・遺物

大畦畔（第16・17図）

推定条里界線上に位置し、香川郡10条12・13里界に相当する。東西方向に約42m検出された。約1m幅の

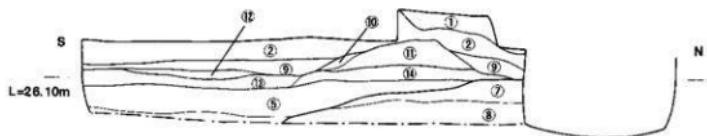


第16図 第1・2面造構配置図 (縮尺1/200)



調査地北壁土層図 (高さ: 1/40, 長さ: 1/320)

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| ①: 現耕作土 | ⑤: 7.5YR3/1 黒褐色砂混シルト (SD06) |
| ②: 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (Fe沈溜) | ⑥: 7.5YR5/1 暗灰色砂礫 |
| ③: 7.5YR6/1 暗灰色シルト質極細砂 | ⑦: 5Y7/6 黄色シルト質粘土 |
| ④: 7.5YR3/1 黑褐色シルト (SD06) | ⑧: 2.5Y6/6 刺黄褐色砂礫 |
| ⑨, ⑩: 地山 | |



第1 トレンチ西壁土層図 (1/40)

- | | |
|------------------------------|--------------------------------------|
| ①～⑧: 上図と共に | ⑪: 2.5Y8/2 灰白色砂質シルト (黒色土を塊状に含む SD01) |
| ⑨: 2.5Y7/3 浅黄色シルト質極細砂 | ⑫: 7.5YR6/1 暗灰色シルト質極細砂 |
| ⑩: 2.5Y8/1 灰白色細砂 (固くしまる, 哇畔) | ⑬: 10YR4/1 暗灰色シルト (固くしまる, 哇畔) |
| ⑪: 2.5Y8/2 灰白色砂混シルト (哇畔) | |

0 1m



第2 トレンチ西壁土層図 (1/40)

- | | |
|-----------------------------------|--|
| ①～⑩: 上図と共に | |
| ⑪: 7.5YR3/1 黑褐色シルト (地山⑩を含む, SD05) | |

0 1m



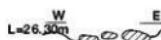
第3 トレンチ西壁土層図 (1/40)

- | | |
|----------------------------|--|
| ①～⑩: 上図と共に | |
| ⑪: 7.5YR2/1 黒色砂混シルト (SD04) | |

0 1m



SD02 断面図 (1/40)
①: 2.5Y7/3 にぶい黄色シルト質極細砂



SD03 断面図 (1/40)

0 1m

第17図 調査地土層図・トレンチ土層図・遺構断面図

規模をもち直線的にのびるが、調査地の西端部で先削りやや北へ湾曲する。大概では、N-9°-W前後の方位を示し、現況の地割と合致する。畦は0.2~0.3mの高さをもち、褐灰色シルト(⑩層)を基盤に灰白色の砂質土(⑪層)を積き固め盛土としている。調査地の西端では直交する畦畔が認められ、その交点にSD03が開削されている。水戸と考えられるSD02・03は、約22.5mの間隔で認められる。時期は近世の堆積物(②・⑨層)により埋没していることや、併走するSD01が中世期と推定されることから、中~近世の長期にわたる時期が考えられる。

SD01 (第16・17図)

調査地の南側を東西方向に走る溝である。幅0.6~0.8mの規模であるが、西側で幅広になり南北方向の畦で途切れる。検出高は26.10~26.16m、底面は26.05~26.08mを測る。埋土は黒色土を塊状に含む砂質土である。10cm程の浅い溝で、底面に高低差が見られず配水または排水溝として考えにくいが、大畦畔に併走することから大畦畔の盛土を得る目的で開削された可能性が想定される。出土遺物は小片だが、中世と考えられる土師質・須恵質土器片が認められた。

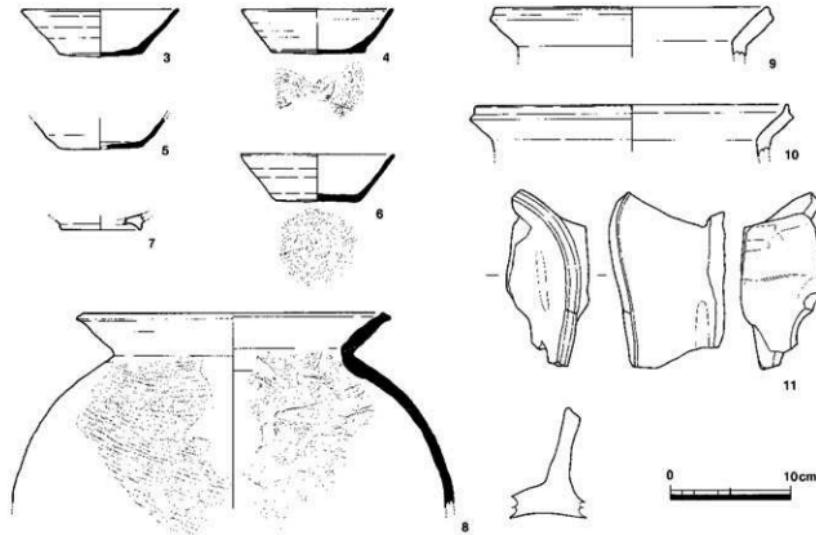
SD02・03 (第16・17図)

大畦畔上に開削された溝状遺構である。幅0.9m程の規模をもち、深度は約10cmで畦畔の下端より浅く開削されている。SD03は畦畔の交点に接する箇所が狭くなっている、底面付近には拳大的な石が集中していた。

SD04 (第16・17・20図)

第2面で確認した溝である。検出した標高は22.26m前後、底面は26.05m前後を測る。大畦畔の盛土以下で認められ、畦の下端部では削平されている。N-36°-W前後の方位を示す。埋土は黒色砂礫混じりシルトの単層で、遺物が比較的まとまって出土している。所蔵時期は、出土遺物より平安時代後半と考えられる。

出土遺物(第18図)のうち、3~6は須恵器壺で、口径は12cm前後を示す。口縁部が外反する器形で、3・4は体部が内湾し底部が外方向に突出する。7は黒色土器楕底部。8は須恵質土器蓋で、卵形の体部をもち頭部が「く」の字に折れる。口縁端部はやや外方に突出し、内面は沈線状に窪む。体部外面は平行叩き、内面はナデて仕上げている。9・10は土師器壺。11は壺の破片である。



第18図 SD04 出土遺物実測図(縮尺1/4)

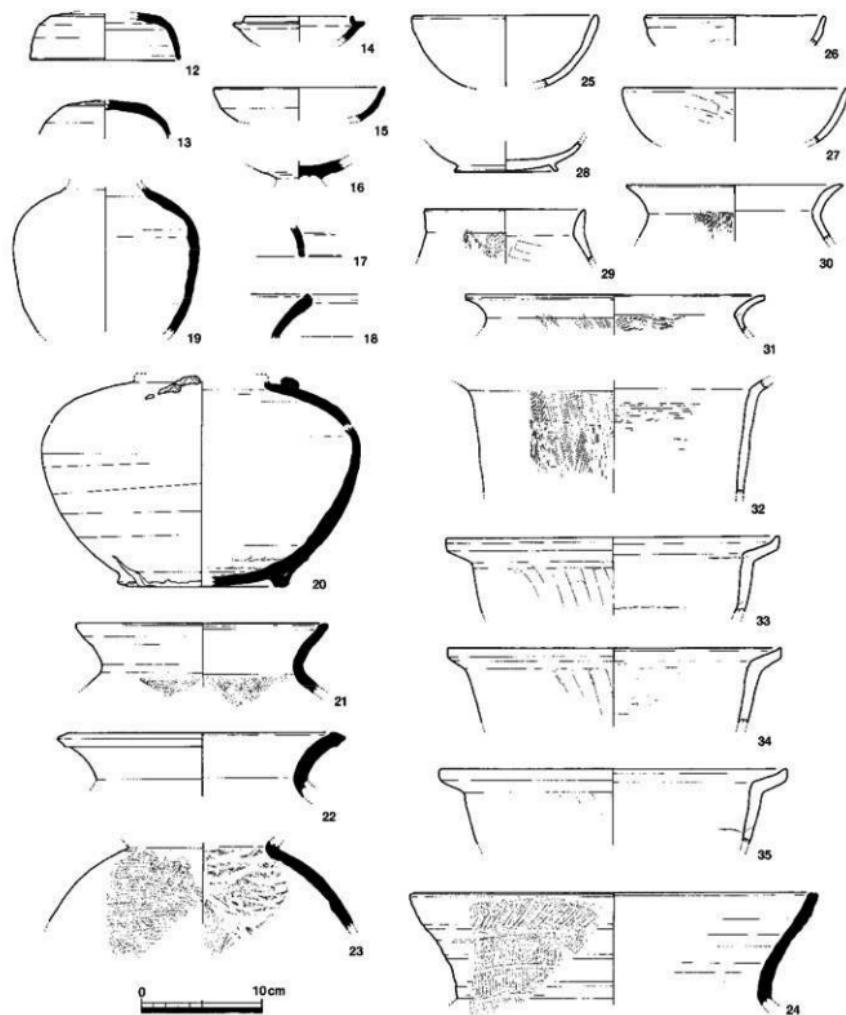
SD05 (第16・17・20図)

第2面で確認した溝である。検出した標高は22.10m、底面は25.90m前後を測る。SD01大畦畔の盛土以下

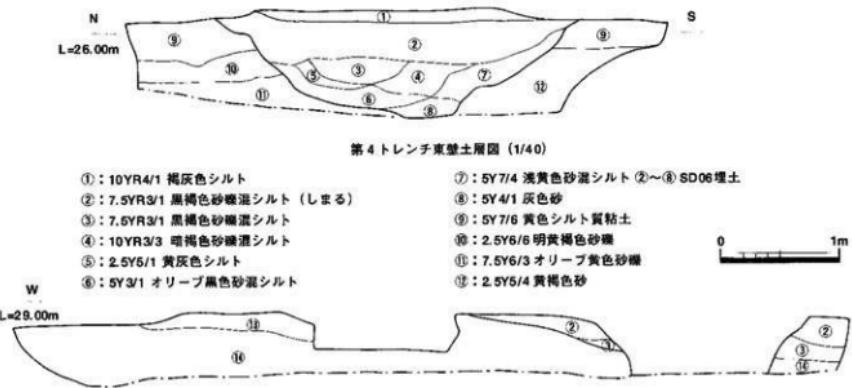
で認められた。大畦畔より北では削平され明確ではないが、SD04と直交する位置関係が推定される。埋土は黒褐色シルト～黑色砂礫混じりシルトである。出土遺物はないが、SD04とほぼ同時期の所属時期が推定される。

SD06 (第16・19・20図)

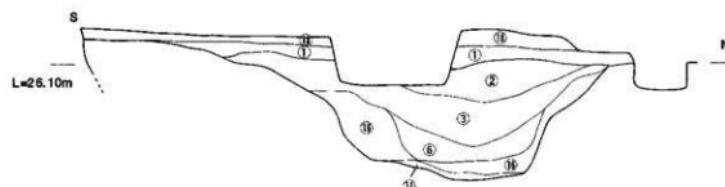
第2面の下層に存在する溝である。確認調査時には自然流路として考えられたが、第4・6トレンチの断面観察によると壁面の立ち上がりが急傾斜であり、人為的な溝の可能性が考えられる。完掘を行えなかったが、各所に設けたトレンチより、幅3m前後の規模をもち、調査地中央部において北方向へ湾曲すると推定



第19図 SD06 出土土器実測図 (縮尺1/4)



第5トレンチ東壁土層図 (1/40)



第6トレンチ西壁土層図 (1/40)



SD04 断面図 (1/40)



SD05 断面図 (1/40)

第20図 トレンチ土層図・造構断面図

される。底面の標高は第4トレンチで25.32m、第6トレンチで25.16m前後を測り、緩やかに東方向へ下るものと考えられる。埋土は基本的には上部で黒褐色シルト質土、下部で砂質土が堆積するが、細分層した埋土の状況からは再掘削が行われている可能性が考えられる。出土遺物は第4～6トレンチではほぼ皆無であったが、確認調査及び調査地の北側溝掘りの際に、調査地中央部で溝が湾曲する地点の上層部において集中して認められた。所屬時期は確認状況及び出土遺物から古墳時代終末期～平安時代後半までの時期幅をもって考えられる。

出土遺物(第19図)の大半が確認調査及び側溝掘りの際に取り上げたもので、他の遺構(SD04)のものも含む可能性がある。12～24は須恵器で、12～14は蓋及び杯、19・20は壺である。20は口縁端部を失うが、短頸壺と考えられ蓋骨器としてよく使用されるものである。頸部から肩部の外側には自然釉が付着しており、熔着痕が認められる。以下体部に回転ヘラケズリがなされ、高台部にも熔着痕がある。21～24は壺である。24の外向は、口縁部にハケ原体により列点状の刺突、頸部かけてはハケ原体による継位の施文後、横位の沈線により区画が施されている。25～35は土師器で、25～27は鉢で、29は小形の短頸壺、30～32が甌で、32は長胴のものである。28は内黒の黒色土器碗である。33～35は器高の浅い鍋形の煮沸具と考えられる。

c. まとめ

第1面では、香川郡十條12・13里界上と一致する大蛇跡を確認した。当地は現況でも中間・御厩町の境界となっているが、この境界が中世まで遡って存在する可能性がある。第2面では、SD04・SI05が存在するが条里地割と一致しない。第2面より下位では、SD06の湾曲部で遺物が集中し認められることから、調査地中央の北側を中心に何らかの遺構の所在が想定される。

No.6 檜紙町27号線西区間

(平成13年度確認調査・工事立会)

1 調査概要

- a. 場 所 檜紙町
- b. 期 間 平成13年10月23日～25日
- c. 面 積 約10m²
- d. 担当者 小川賢

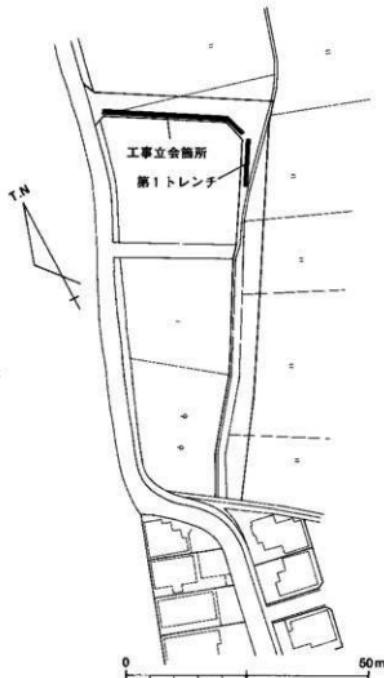
2 調査内容

当路線は、大半部が既存の道路を抜樋するものであつたが、当地周辺部は後期旧石器時代及び中・近世の埋蔵文化財包蔵地となる中森遺跡、八幡遺跡が所在することから、新規工事部分で確認調査及び工事立会を行った。

住宅が建ち込み重機の搬入が不可能であったため、確認調査は人力によりトレンチを掘削した。結果、表土除去後0.2m程で黄色粘土層に達し、その上面で小規模な溝状遺構を確認した。遺物は出土していない。この粘土層を掘削し、旧石器の確認を行ったが、遺物は認められなかつた。

隨時行った工事立会では、掘削深度が粘土層より大きく下がらず、また上面での遺構は溝状遺構を1条確認したのみである。遺物は皆無であった。

以上の結果より、工事に先立つ保護措置と判断した。



第21図 檜紙町27号線（西区間）
トレント配置図・工事立会箇所 (縮尺1/1000)

No.7 中森遺跡（檀紙町27号線東区間 平成13年度確認調査）

1 調査概要

- a. 場 所 檀紙町
b. 期 間 平成13年11月26日～29日
c. 面 積 約57m²
d. 担当者 小川賢

2 調査内容

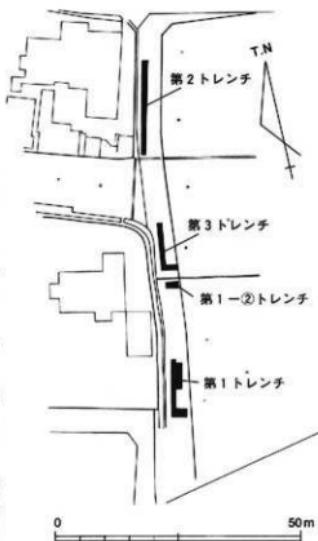
当路線については、西区間で確認調査及び工事立会を行ってきただが、東区間がほぼ新規の工事となることや南端部で中森遺跡に接することから確認調査を行った。

トレンチを3箇所設定し、遺構・遺物の確認を行った。結果、南部に設定した第1トレンチでは、現況に見られる条里地割に合致する溝を検出し、溝の最下層から中世の遺物が出土するとともに、集石を伴う遺構を確認した。

北部に設定した第2トレンチでは、条里地割に合致しない溝が数条検出されたが、遺物が皆無のため時期不明である。

中央部の第3トレンチでは、第1トレンチで確認した溝を検出したが下層部は存在せず、近世以降の陶磁器のみが認められた。また旧石器の包含層と想定される黄色粘土層を人力により掘り下げ、礫面まで確認したが遺物は出土しなかった。

以上の結果より、第1トレンチで認められた溝を除き、工事範囲については、同様の結果が想定されたため工事に先立つ保護措置は不要と判断し、第1トレンチの溝については、当確認調査で記録保存を行った。



第22図 檀紙町27号線（東区間）
トレンチ配置図（縮尺1/1000）



写真1 第2トレンチ掘削状況

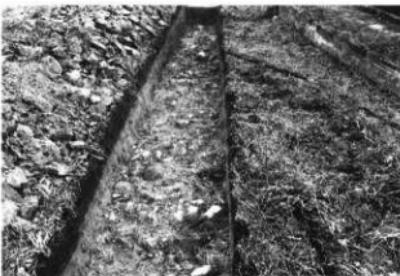
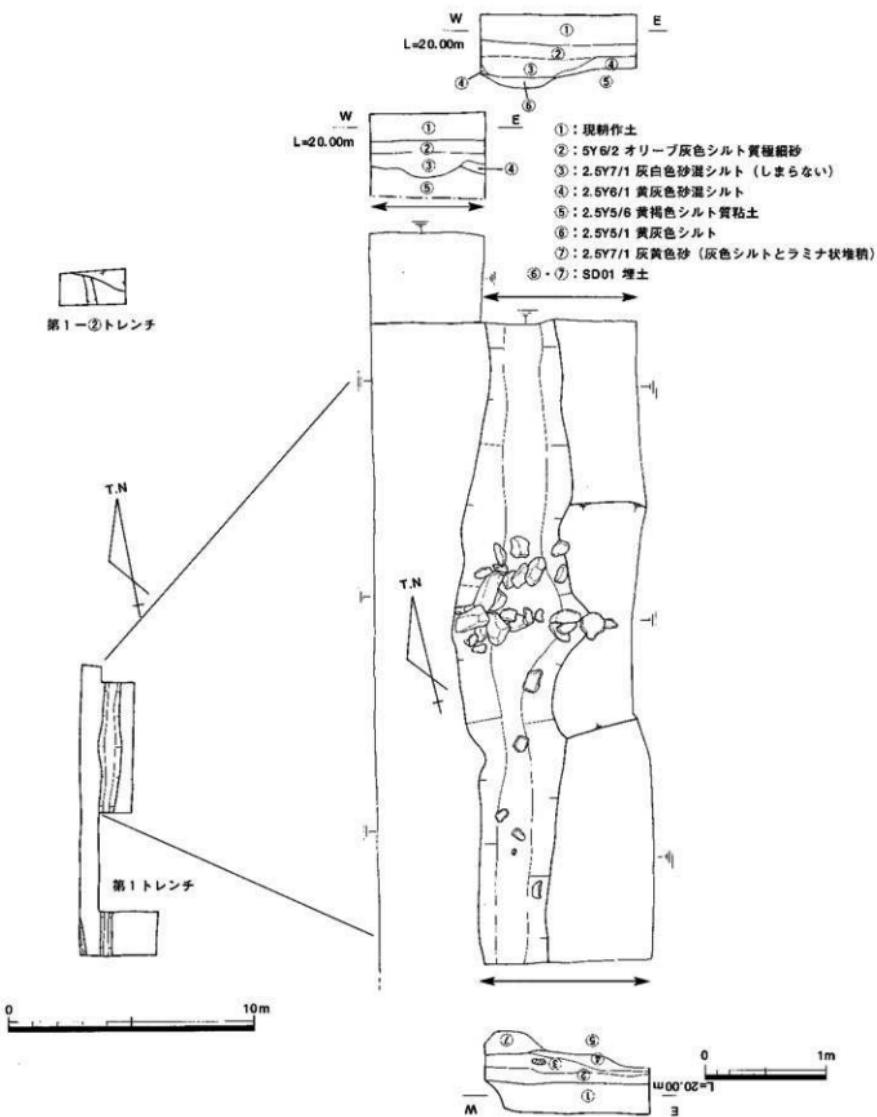


写真2 第3トレンチ掘削状況

SD01 (第23図)

第1トレンチで確認した溝である。検出した標高は19.55～19.65mで、黄褐色シルト質粘土⑤層上面で検出した。この上位面でも④層に基盤に③層の落ち込みが同位置で認められたが、明らかに近世以降の遺物を包含するため、上位の遺構面については調査対象から外している。また以北の第1-②及び第3トレンチでも延長部を確認しているが、埋土がすべて③層で充填されており下層部⑤層は認められなかった。

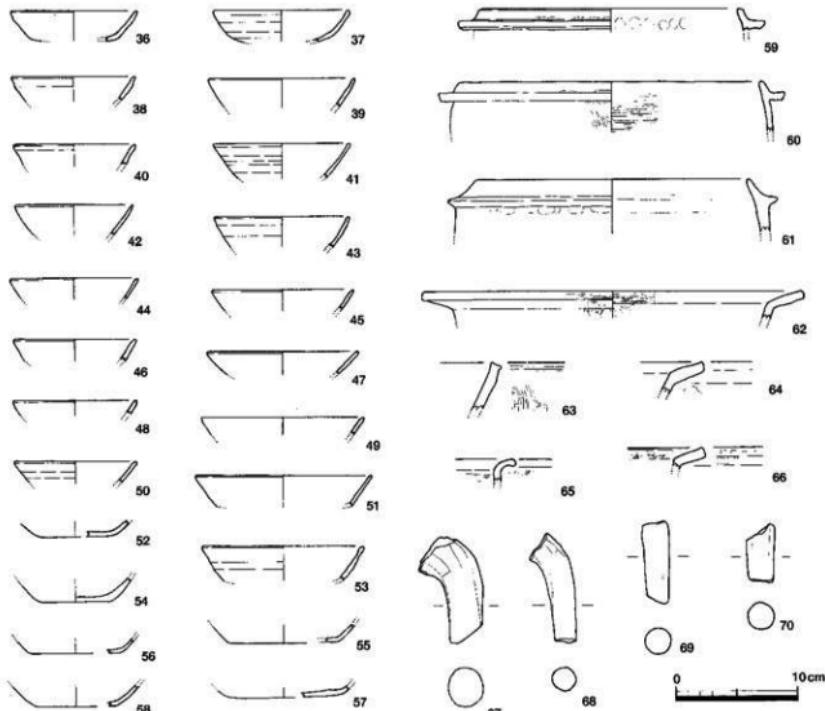
下層遺構は検出幅で約0.7～1mの規模をもち、中央に見られる集石部付近でやや幅広になる。溝の底面は19.5～19.53mの標高を測るが、中央に見られる集石部付近では19.46m前後で若干深くなっている。中央部では底面に人頭大的河原石が散在する状態であるが、配置状況をみると溝を横断して積まれていた可能性が



第23図 第1 トレンチ遺構平・断面図 (縮尺1/200・1/40)

推定される。また調査地の北及び南壁に見られる埋土は、北側でシルト、南側で砂質土のラミナで堆積物が異なっており、集石を境に水流の状態が変わっていたことが分かる。集石部の東面が③層で壊されており明確にならないが、当箇所で東へ水流を分歧していた可能性がある。集石部付近では皿、鍋といった日常雑器が集中して認められており、生活に密着した施設があったのかもしれない。所属時期は、出土遺物より中世と考えられる。

以下、出土遺物（第24図）を報告するが、土器形式・年代観は佐藤編年（佐藤2000）を参考とした。36～57は、土師質土器環である。口径が10～12cmでやや器高が高く、浅手のものが大半を占めるが、口径14cm前後の大振りのものも認められる（51・53等）。底部の調整は明瞭ではないが、小形のものは器形及び法量から环D-II～6型式に相当すると考えられる。59～61は、土師質土器足釜の口縁部である。59・60は脚部が水平方向に伸び、口縁部と共に端面が明瞭で足釜A-I型式に相当する。60は脚の下方にもハケ調整が明瞭に認められ、体部を折り曲げ鉗を作り出したと考えられる。61は脚部が垂れ気味で端部は丸く納まり、足釜B-I～II以降の型式が考えられる。62は上師質土器鍋である。口縁部が水平方向に近く外方に伸び、内外面にハケ調整が認められ、鉗A-I型式に該当する。63は瓦質土器鉢の口縁部である。口縁部端面が外方に突き出し、鉢E-I型式とみられる。64～66は土師質土器鍋の口縁部。65は足付鍋かもしれない。67～70は土師質土器煮沸具類の脚部である。以上より、中世II-4～5期（13世紀第3四半期～14世紀前葉）の時期が想定される。



第24図 SD01 出土遺物実測図 (縮尺1/4)

No.8 中間町15号線（平成14年度確認調査）

1 調査概要

- a. 場 所 中間町
- b. 期 間 平成14年10月25日
- c. 面 積 約60m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容

当路線は、古墳時代を中心とした中間・西井坪遺跡に近接するため確認調査を実施した。路線の西半分は既存の道路が存在し確認不可能のため、ほぼ新規の工事区間である東半分でトレンチを3箇所設定し確認調査を行った。

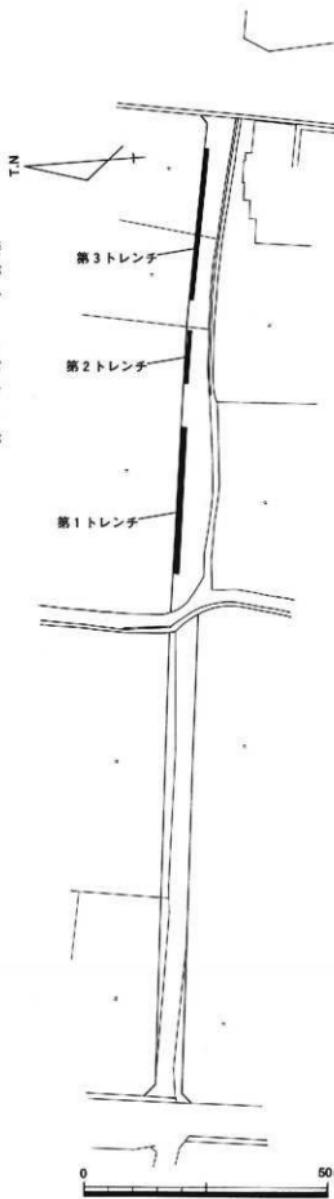
すべてのトレンチにおいて、ほぼ表土直下で地山と考えられる黄色シルト質粘土層となり、第1・2トレンチで溝及びピットが数箇所において認められた。溝は一定の規模を有するが、出土遺物は土器細片1点のみであった。出土遺物はトレンチ全体でもこれのみであり、埋蔵文化財の希薄な状況が考えられ、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



写真3 第1トレンチ南壁土層堆積状況



写真4 第2トレンチ南壁土層堆積状況



第25図 中間町15号線トレンチ配置図
(縮尺1/1000)

六条・林地区

No.9 林さこ遺跡（林町61号線 平成8年度調査）

1 調査概要

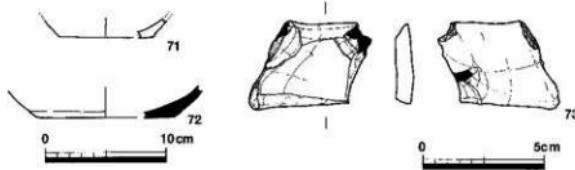
- a. 場 所 林町
- b. 期 間 平成9年2月28日～平成9年3月3日
- c. 面 積 約107m²
- d. 担当者 山本英之・末光甲正

2 調査内容

現在の里道や畦道を拡幅整備するもので、事実上調査可能な部分は現道沿いに2m程度と狭い範囲だった。

都市計画道路福岡三谷線西側にあたる市道林町61号線は、全体が微高地に位置しており、そのため粘土採取や水田の水景確保のために全体が削平されていた。この結果、確認した遺構は、西端で東西方向に伸びる条地割に沿った溝1条のみであった。この溝は、幅2.5m以上、深さ20～30cmを測り、調査区の西端から緩やかに蛇行しながら東へ伸び、西端から約20mの地点で調査区の北へ伸びている。上層に薄い乳白色細砂層、下層は灰褐色シルト層が堆積し、埋土から須恵器片が若干出土した。

出土遺物（第26図）のうち、71は、上部器底部である。72は須恵質ないし瓦質土器の底部である。73はサヌカイト片である。



第26図 SD03 出土遺物実測図（縮尺：1/4, 石器1/2）

No.10 林下所遺跡（林町60号線 平成8年度調査）

1 調査概要

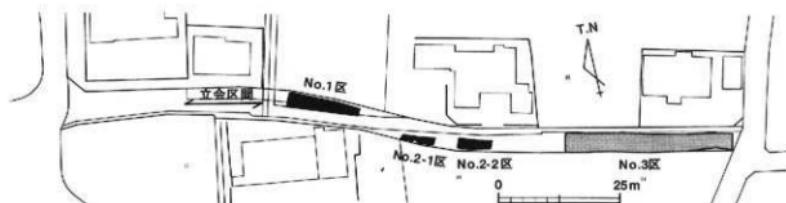
- a. 場 所 林町
- b. 期 間 平成9年2月26日～3月31日
- c. 面 積 約372m²
- d. 担当者 山本英之・末光甲正
- e. 調査原因 林町60号線工事

2 調査内容

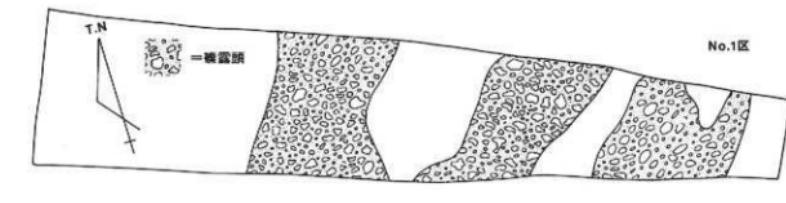
現地は、調査区東端に近来の分譲団地が接する点を除き、文化15年(1818)作成『山田郡下林村順道絵図』に描かれた近世後期に近い景観が残り、住居・農耕地の配置・境界等がほぼそのまま踏襲されている。

調査区は、高松市林町2063～2064番地の境界部分を東西方向に走行する市道林町60号線のうち約96.0m区間の現用道路敷を除いた拡幅予定部分である。道路現況は西半53.5mで幅員1.8～2.8m程度、東半42.5mで幅員1.0m程度であり、これを5.0～6.25m程度(開溝含む)に拡幅する。

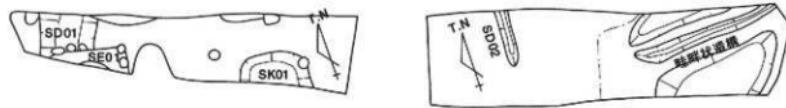
拡幅予定部分表土(甘土)除去工事に立会し、遺構が検出された部分について発掘調査を実施した。立地と工程の便宜上、調査区をNo.1～No.3区に分割・設定した。なお、『順道絵図(下林村下所免の冊)』には、2063番地は「十三番同所(立原ノ町)北之町」、2064番地は「十四番原開之町」の評名称で取載されている。



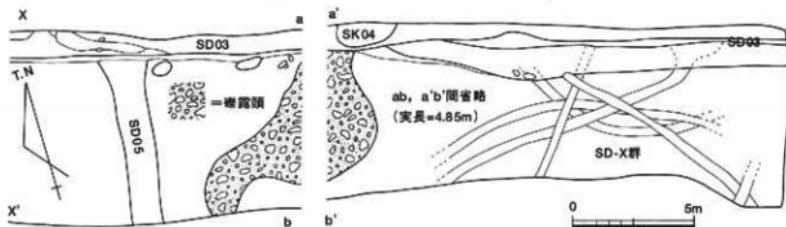
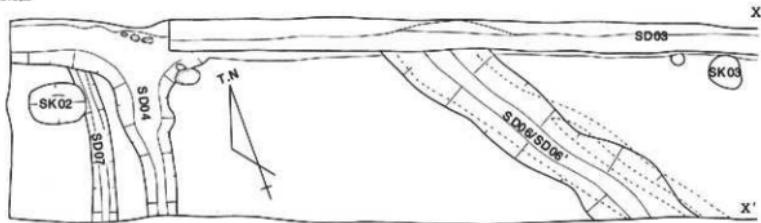
調査位置図



No.2-1区 No.2-2区



No.3区



第27図 林下所遺跡（林町60号線）平成8年度調査位置図・遺構配置図

No.1区

遺構・遺物は検出されず、現地表面下0.3~0.8mの深さに、和泉層群起源とみられる幅2~3mでSSW→NNEに併走する疊堆積（径10cm前後の大礫）の頂部が検出された。なお、この頂部はNo.2区～No.3区西端部の範囲では地表面1m以浅では検出せず、当該区間は、自然河川状の凹地をなしていたと考えられる。

No.2区

①2-1区 狹小な範囲であるが、南北方向の溝SD01、井戸SE01、水利（？）土坑SK01及びピット列が検出された。遺物は小片のみで正確な時期比定は難しいが、SD01、SK01は近世後半のものであろう。何れも農業水利関連の施設と想定される。SE01は、聴き取りにより大正14年（1925）旱害時には活用され、戦後の住宅改築時に廃棄土坑として埋め立てられたものと確認された。杉板を竹籠で桶状に組んだ径1.2m、深さ1m余の井戸開を持つ浅井戸で、内面に側板近似の形状の板材を打ち込み副木として支持している。

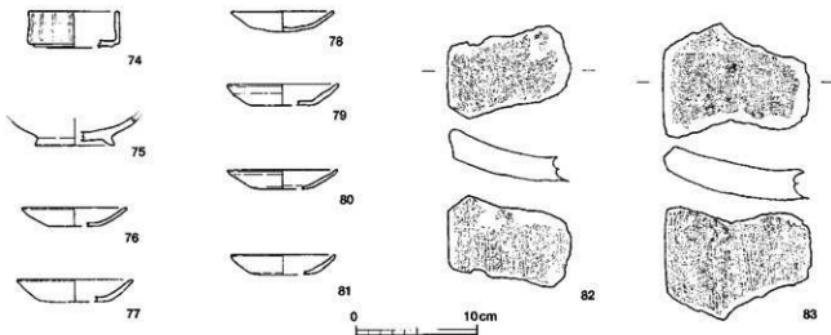
②2-2区 西半は、現地表面-0.5~0.6m付近で埋土の性状・色調等から中世頃の農耕土の可能性が窺われる面を確認した。やや高燥とみられる比較的堅緻な黄灰色砂質シルト面があり、歓たてに伴い形成されたとみられる幅15cmの溝状遺構SD02を検出した。一方東半では、東北東の方針をもつ水田畔もしくは給排水路状のやや不明瞭な遺構がみられた。上質・上色から古代以前の層位である可能性も指摘できる。

No.3区

本区は、先述『順道絵図』図示の坪界線がほぼそのまま踏襲されている可能性が高く、幅約1mの農道に接した東西方向42.5mに亘る区間である。農道南側水田（2063番地）は本区間及び西接部分が連続した1筆となっている。

農道南沿いに幅70cm（以上）の坪界線に相当する溝SD03を検出したが、更にこれに直交して南へT字状に分岐する2条の南北方向溝が接続し、2063番地水田は東西に三分されていたことが判明した。しかも、現地形図及び『順道絵図』では、条里型区画が乱れた状態での坪界区分が図示されているが、検出したSD04/SD05を南に延長して2063番地坪南東角に接続すると、本来の方格坪の形状が復元できることが確認された。出土した土師質土器小皿等からも、中世末頃まで方格の条里型坪区画が現存し、それが文化15年（1818）『順道絵図』作成に到る間に埋没し、亂れが固定化して現在に至る事が明らかとなったわけである。又、SD04、SD05の埋没後、その中間にSE→NW方向に斜行するSD06が布設されており、現状に固定する以前に不安定な状況があったことを推測させる。なお、本区東端のSD-Xは、極めて短期間に形成・消滅したと考えられる狭小溝群であるが、これは本市春日町「川南・西遺跡」E区の「溝状遺構」群に酷似の性状を示し、近世後半の所産と考えられる。

出土遺物（第28図）のうち図化したのは、下記10点である。74は染付小丸段重である。口縁端と微細な砂目がある底面外周は無釉。SD03埋没段階の埋土で出土。76～81は土師質土器小皿である。いずれも、調査区東端のSD03最下層の出土であり、溝の成立時期を示すと考えられる。82・83は布目平瓦片である。SD03でSD04との分岐点から出土した。凹面は6本/cm程度の格子状布目で、凸面は4本/cm程度の縄目平行タタキ痕をもつ。75は土師質土器底底部片である。高台は斜めに外反・擴張する。No.3区東接の次期工区包含層出土である。



第28図 林下所遺跡（林町60号線 平成8年度調査）出土遺物実測図（縮尺1/4）

No.11 林下所遺跡（林下所墓地 平成8年度調査）

1. 調査概要

- a. 場所 林町
- b. 期間 平成10年6月15日～7月21日
- c. 面積 約632m²
- d. 担当者 小川賢

2. 調査内容

a. 調査の経緯（第29図）

高松中央インター周辺整備に伴い墓地造成工事が行われた。当工事について、造成範囲が一定範囲に及ぶことや、縄文時代晩期からの埋蔵文化財包蔵地であり弥生時代の周溝墓が複数確認された林・坊城遺跡には北接するため確認調査を行うこととした。

トレチは調査対象とした範囲の西面に沿って、設定した。結果、現地表面の約0.9mで溝、ビットが検出され、また包含層より弥生土器（第31図84）が出土したため、事前調査を実施した。

b. 遺構の概要（第30図）

弥生時代前期と考えられる溝が検出されている他、調査地の北東部で、近世・近代期の埋廬及び土坑が見られた。

c. 基本土層（第30図）

①～④層までは現代の所産であり、⑤～⑧層までが近世～近代の堆積層である。⑨～⑪が自然堆積層と考えられ、この直上で遺構確認を行った。当遺構では東半部を中心に疊層（⑩層）が広範囲に認められ微高地であることが分かると共に、直上部までを近・現代の堆積が覆うことから相応の削平された状況が想定される。

d. 遺構・遺物

SD01（第31図）

調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.20～9.28m、底面は9.10～9.22mを測り北東方向へ下る。直線的にN-37°-E方向へと伸びるが、両端部は削平されている。検出幅は0.5～0.7m前後である。断面は船底形を呈し、埋土は黒褐色土の単層である。遺物は弥生時代前期と考えられる土器底部（第31図86）が出土した。所属時期は、出土遺物より弥生時代前期と考えられる。

SD02（第31図）

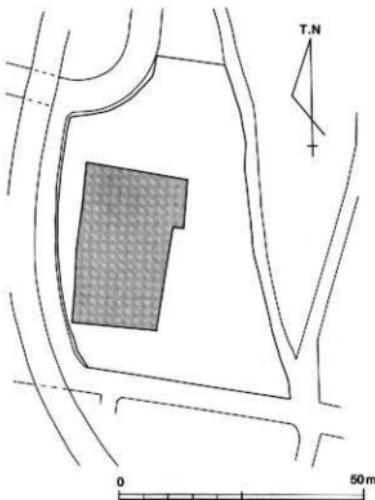
調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.20m前後、底面は9.0m前後を測る。やや蛇行気味に北東へと伸びるが、東端部で削平されている。検出幅は0.4～0.5m前後である。断面はやや深いU字形を呈し、埋土は黒褐色土の単層である。遺物は弥生時代前期と考えられる壺底部（第31図85）他、若干量認められた。所属時期は、出土遺物より弥生時代前期と考えられる。

SD03（第31図）

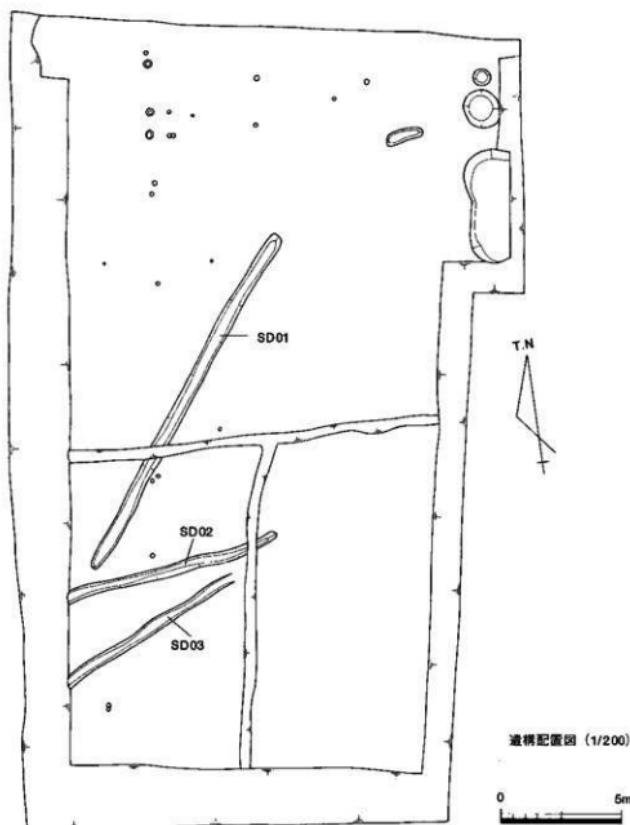
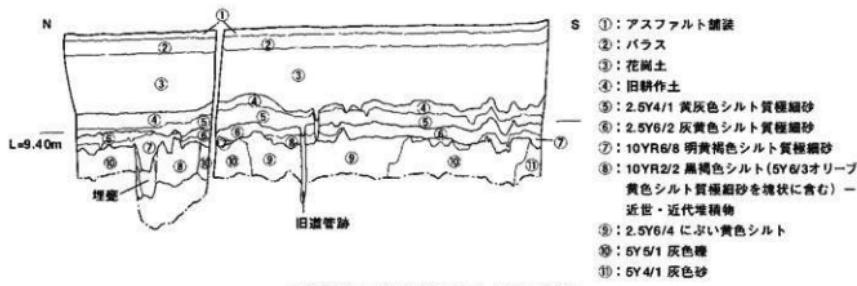
調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.25m前後、底面は9.18m前後を測る。直線的に北東へと伸びるが、東端部で削平されている。検出幅は0.3～0.5m前後である。断面はU字形を呈し、埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物はないが、埋土及び周辺部の状況から弥生時代のものと考えられる。

e. まとめ

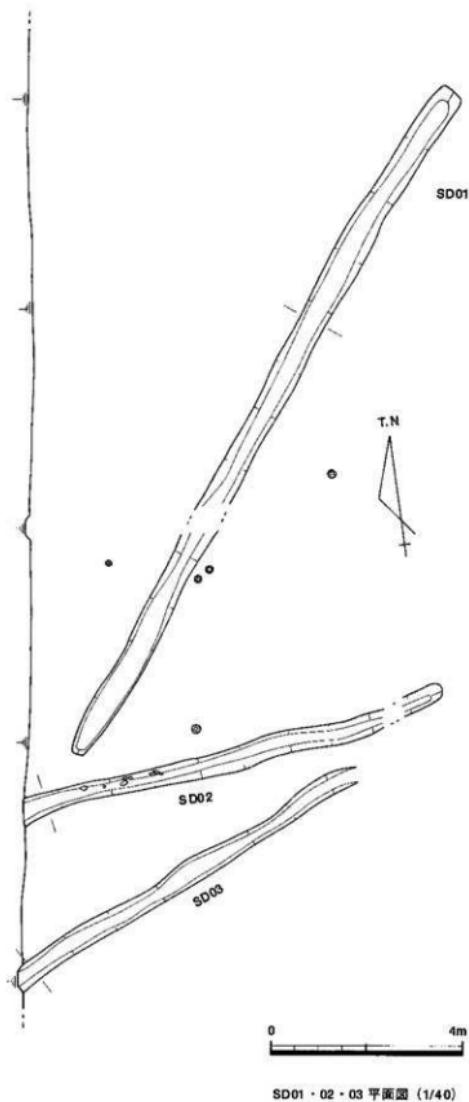
当地区は、林・坊城遺跡で認められている埋没河川の自然堤防上に位置する微高地と考えられる。調査地中央部を横断する近・現代の土管跡を境とし、かなりの削平を受けた状態であったが、弥生時代前期を中心とする遺構が当微高地に存在することが確認された。



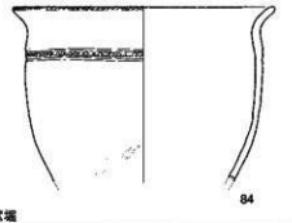
第29図 林下所遺跡（林下所墓地）調査位置図
(縮尺1/1000)



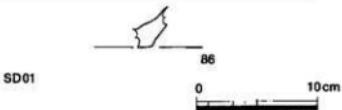
第30図 調査地土層図・造構配図



0 1m



SD02



第31図 遺構平・断面図、出土遺物実測図 (縮尺1/4)

No.12 林下所遺跡（林町8号線 平成10年度調査）

1 調査概要

- a. 場所 林町
- b. 期間 平成10年11月26日～30日
- c. 面積 約400m²
- d. 担当者 山元敏裕

2 調査内容

a. 調査の経緯（第32図）

当路線については道路拡幅工事であるが、既に埋蔵文化財包蔵地となっている林下所遺跡に近接していることから工事立会を実施した。立会当初の段階で黒色の埋土をもつ溝を確認したことから、T字範囲全域で遺構確認を行った。遺構面精査の結果、複数の溝及び土坑が検出されたことから、工事を一時中断し調査を実施することとなった。

b. 遺構の概要（第33図）

調査地の北端部で弥生時代と考えられる溝SD01及び土坑SK01を確認した。その他、広範に認められる土坑及び溝は調査結果より近世のものである。

c. 基本土層

ほぼ現況の耕作土直下で地山と想定できる黄色系粘土層となり、この上面で遺構検出を行った。

d. 遺構・遺物

近世の遺構については、特筆すべきものが認められず本報告では略した。

SD01（第33図）

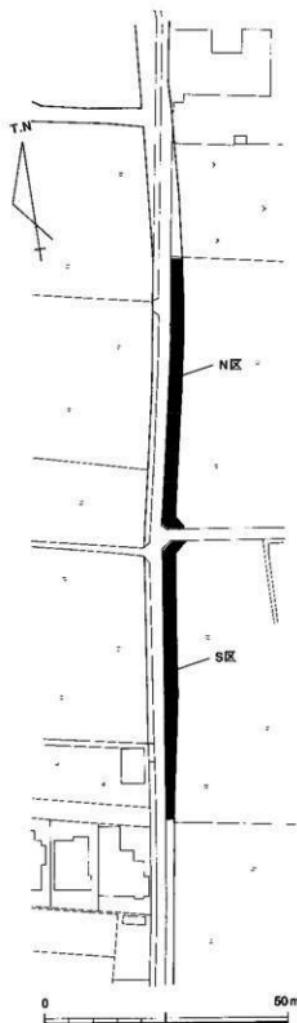
調査地（N区）北端部で確認した溝である。検出した標高は8.40m前後、底面は8.00m前後を測る。幅1.0～1.2mの規模を有し、北東方向へと伸びる。断面はU字形を呈し、埋土は3層である。遺物は細片ながら、弥生時代前期と考えられる土器片が出土している。

SK01（第33図）

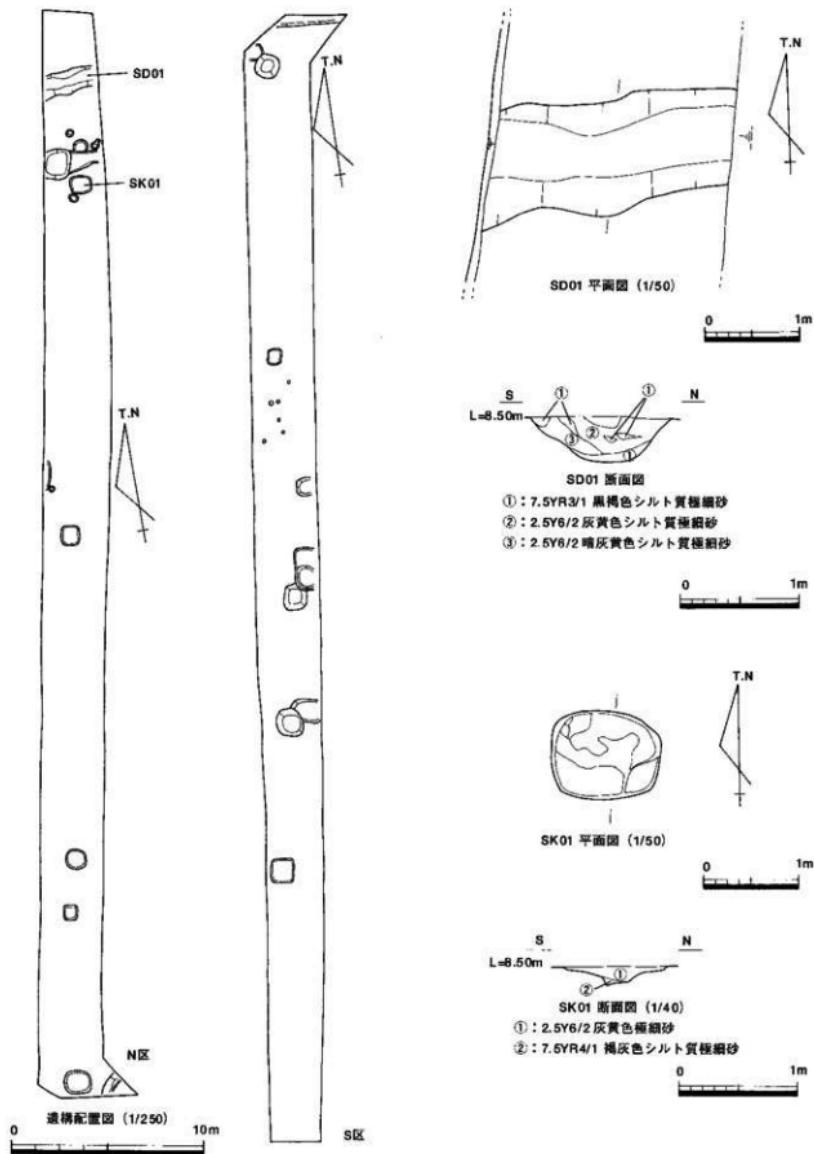
調査地（N区）北端部で確認した土坑である。検出した標高は8.38m前後を測る。平面の形状はやや丸みを帯びた方形で、長軸方向に約1.0m、短軸方向で約0.7mを測る。断面は浅い船底形を呈するが、底面に著しい凹凸面が認められる。埋土は2層である。遺物は認められなかったが、埋土はSD01と同様であることから、弥生時代前期を中心とした時期が考えられる。

e. まとめ

林下所墓地造成地区と同様に、弥生時代前期と考えられる遺構を確認することができた。溝は一定の規模をもち、同時期と想定される土坑も近接して確認されていることから、周辺部で遺構が所在する可能性が考えられる。



第32図 林下所遺跡（林下町8号線）
調査位置図（縮尺1/1000）



第33図 遺構平・断面図

No.13 林下所遺跡

(林町65号線 平成11年度調査)

1 調査概要

- a. 場 所 林町
- b. 期 間 平成11年12月3日～22日
- c. 面 積 約308m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容

a. 調査の経緯 (第34図)

調査地周辺部において、当年度までに既に3地点で調査を行っている。当路線についても、ほぼ新規となる工事であるため確認調査を実施した。この結果、溝、柱穴等の遺構を確認するとともに、弥生時代から古代にかけての遺物が認められたため、調査を実施することになった。

b. 遺構の概要 (第36図)

調査地は、現状で中央部の東西方向の畦を境に高低差があり、これにより以南をS区、以北をN区としている。S区では溝が密集し、S区の北部では、調査地を東西方向に横断する落ち込み状の包含層があり、この下位でSD03～06を検出している。一方、N区では、掘立柱建物(SB01)及び北東方向に蛇行する溝(SD07)が検出されている。

c. 基本上層 (第37・38図)

S区では、現況の耕作土である①・②層のほぼ直下で地山④・⑤層となり、間に近世期の堆積層③・④層が堆積する。北部では、弥生時代～古代の遺物を包含する落ち込み(⑨層)が認められた。N区では④・⑤層が北方向に下り、やや砂質となる⑫・⑭層が被覆する。遺構は④層及び⑧層上面で検出した。

d. 遺構・遺物

SD01 (第36図)

S区中央部を南北方向に走る溝である。検出幅は0.5m前後を測り、N-11°-E前後の方位を示す。遺構の切り合い関係で、SD02・SD03、SE01より後出する。出土遺物は、近世と推定される土師質土器の細片が認められた。

SD02 (第36図)

S区南部で確認した溝である。検出幅は約0.9mを測り、北東方向にほぼ直線的に伸びる。埋土は暗赤褐色土色の单層である。出土遺物はなく時期不明だが、埋土の特徴及び遺構の方向より弥生時代～古墳時代の時期が推定される。

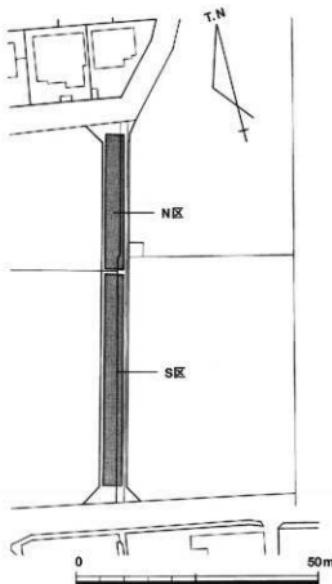
SD03 (第36図)

S区南部で確認した溝である。検出幅は約0.2mを測り、N-6°-E前後の方位を示す。S区北部では包含層の下位遺構として検出しているが、南部の上位面では東肩部が削平されている。出土遺物より古代のものと考えられる。

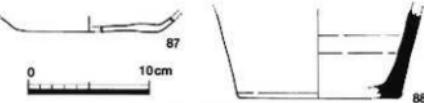
出土遺物(第35図)のうち、87は土師器环の底部。88は須恵器壺の底部である。

SD04 (第36図)

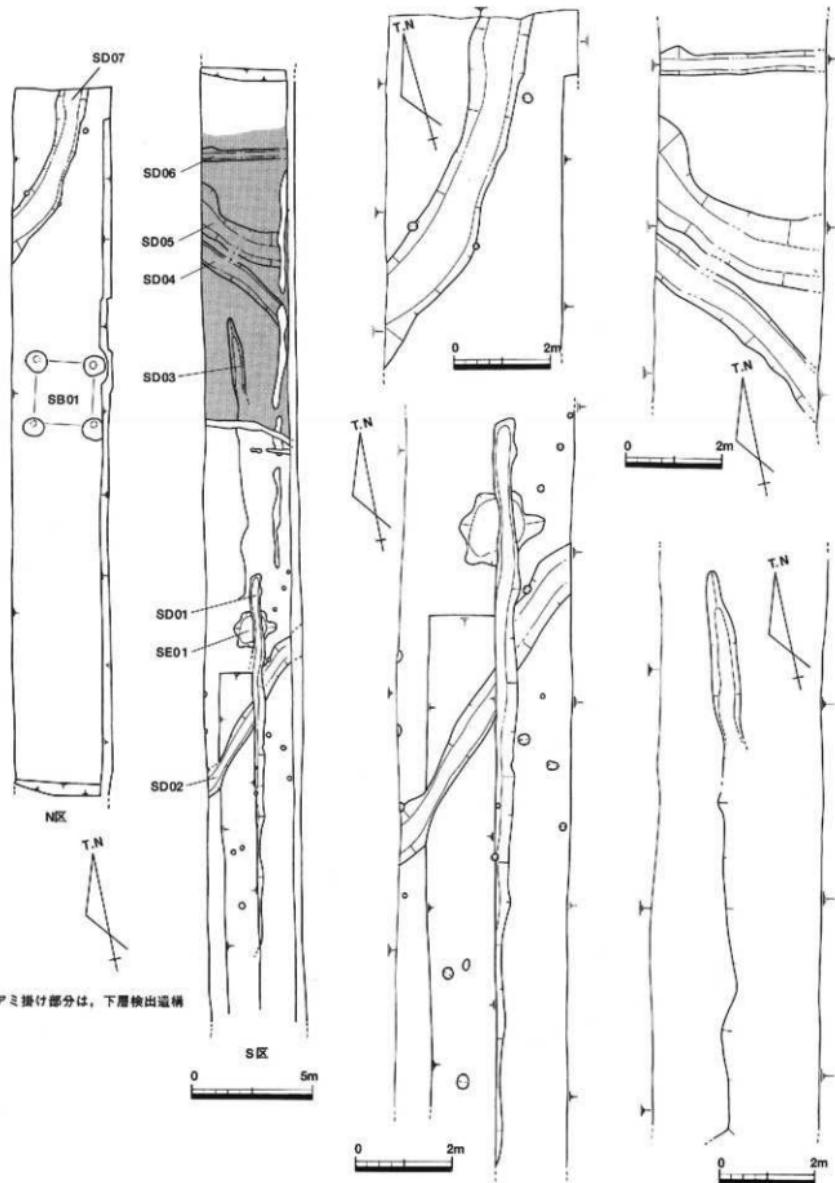
S区北部、包含層の下位で確認した溝である。検出幅は約0.7mを測り、南東方向へ走る。出土遺物がなく時期不明だが、検出状況及び遺構の示す方向よりSD05と同様の時期が推定される。



第34図 林下所遺跡 (林下町65号線)
平成11年度調査位置図 (縮尺1/1000)

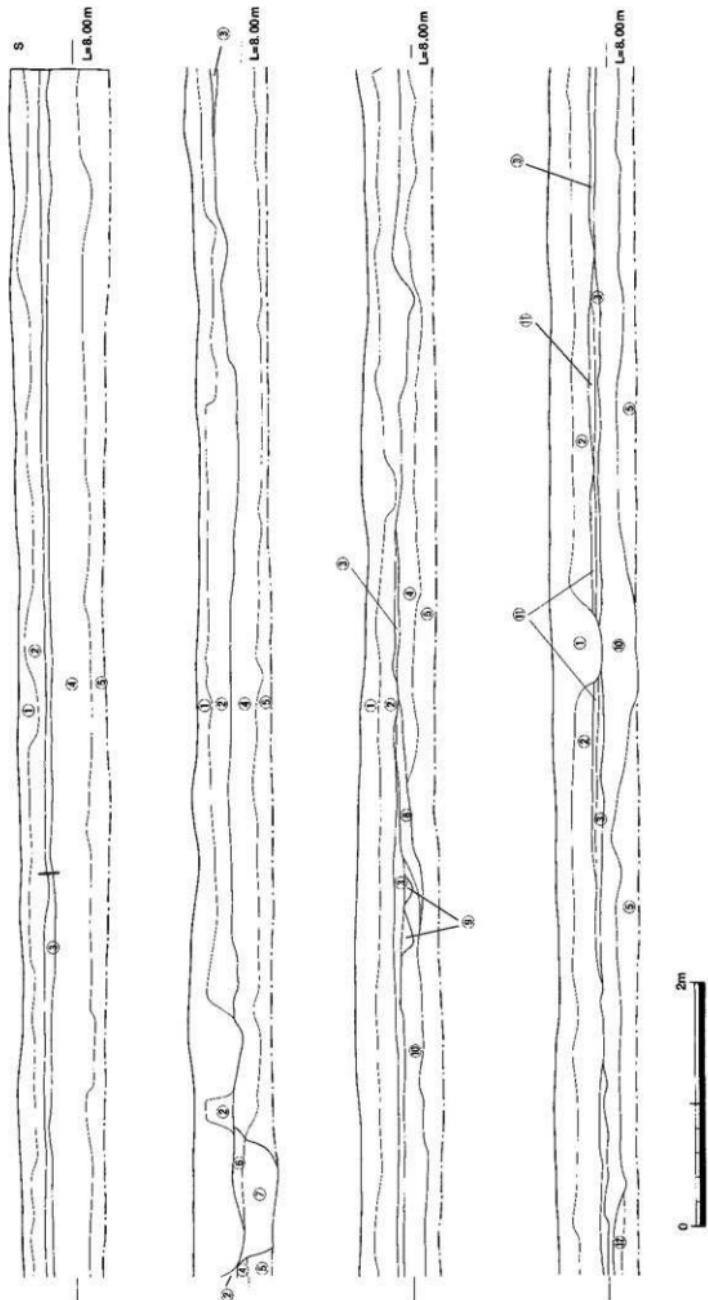


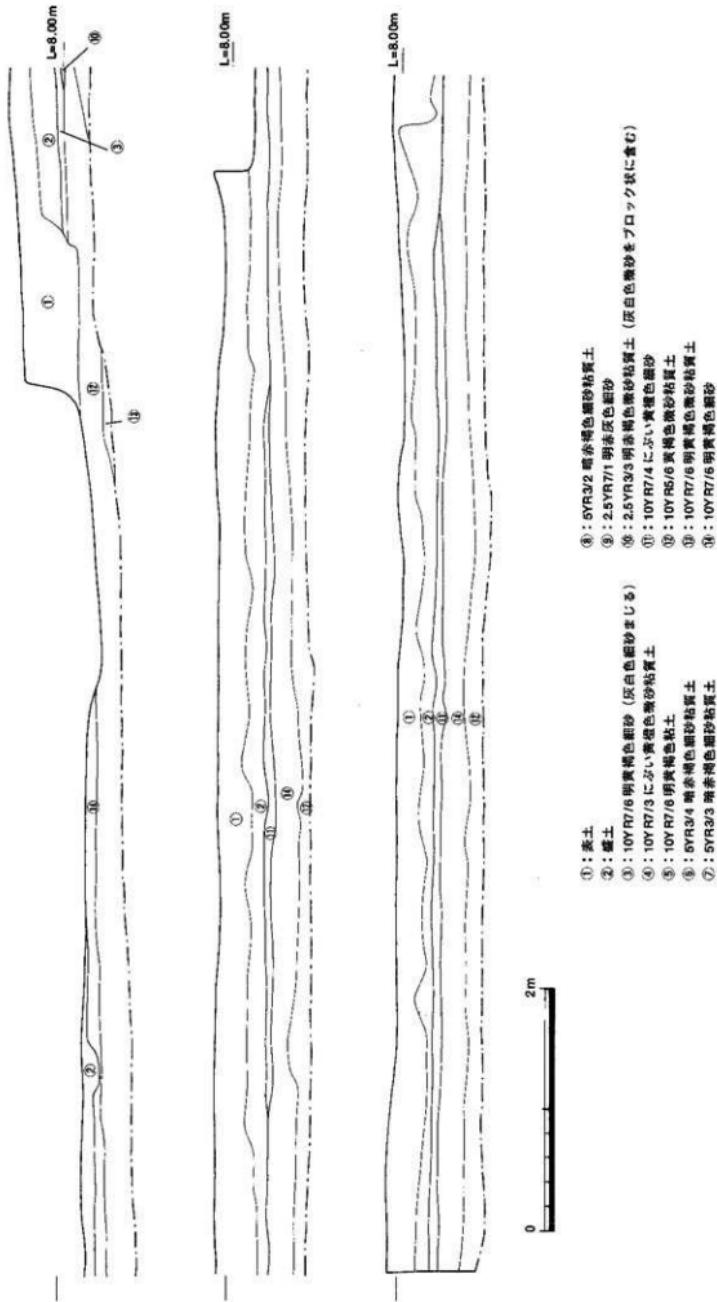
第35図 SD03 出土遺物実測図 (縮尺1/4)



第36図 遺構配置図（縮尺1/200）・遺構平面図（縮尺1/100）

第37図 調査地東壁土層図① (縮尺1/40)





第38図 開蓋地東壁土層図② (縮尺1/40)

SD05 (第36図)

S区北部、包含層の下位で確認した溝である。検出幅は1.0~1.5mを測り、南東方向へ走る。出土遺物より、弥生時代後期~古墳時代前期の時期が考えられる。

出土遺物(第39図)のうち、89は弥生土器鉢である。90は弥生土器甕底部である。93は土師器高壺である。壺部の外腹下端部に突出部が認められる。

SD06 (第36図)

S区北部、包含層の下位で確認した溝である。検出幅は0.5m前後を測り、N-97°~E前後の方位を示す。遺物が出土していないため所属時期は不明だが、SD03とほぼ直交する方位をとり、また同様の検出状況から古代のものと考えられる。

SD07 (第36図)

N区北端部で確認した溝状遺構である。検出幅は1.0~1.3mを測り、北東方向へ走る。遺構が示す方向では、古墳時代以前の時期が想定されるが、出土遺物では近世の所産と考えられる。

出土遺物(第40図)のうち、94は肥前系陶器皿である。95・96は須恵器。97は黒色土器碗である。98は陶器口縁部片で、99は備前鋏鉗である。

SE01 (第36図)

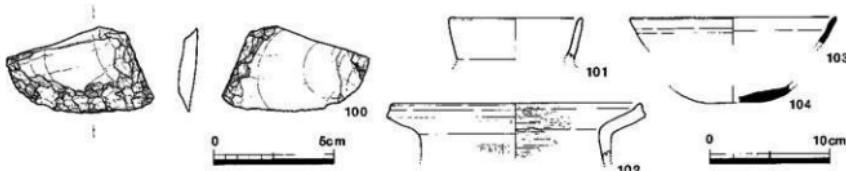
S区南部で確認された井戸である。1.5m前後の範囲で、正な不整形に検出されている。埋土は砂礫で充填されていた。出土遺物ではなく、SD01に先行することから近世以前のものと考えられる。

SB01 (第36・42図)

N区北端部で確認した掘立柱建物である。1×1間で確認しているが、調査地外となる東西方向に平行として伸びる可能性がある。柱間距離は東西方向で2.3m、南北方向で2.5mを測る。主軸は、N-107°~Eの方位を示す。また平・断面の観察では、径25cm程の柱痕が認められている。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、主軸方位が古代及び近世のものと異なり、弥生~古墳時代を中心とした時期が考えられる。

遺構外出土遺物 (第41図)

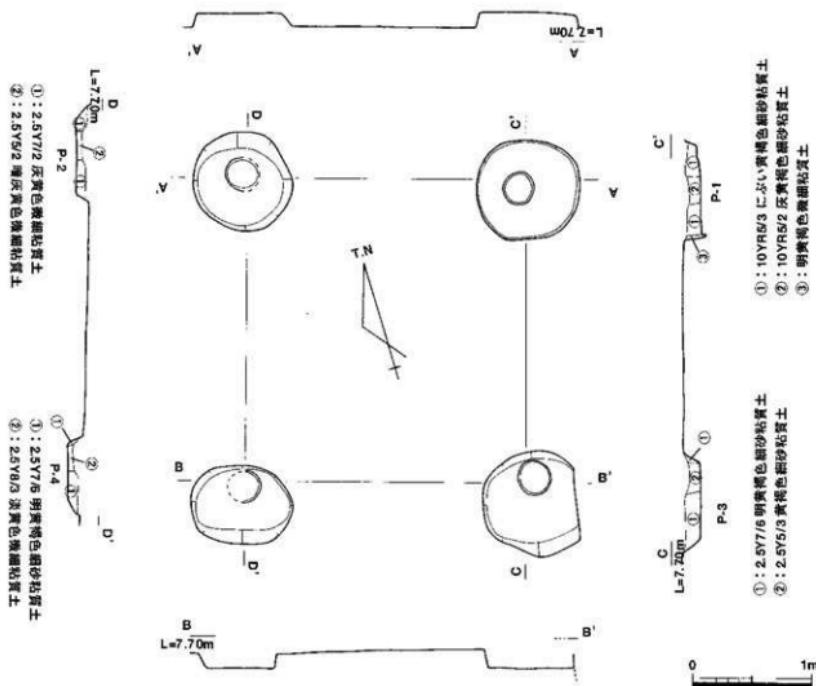
100はサムカイト製の刃器である。101は土師器壺である。102は土師器甕である。103・104は須恵器。101・102・103が⑩層より出土している。



第41図 遺構外出土遺物実測図 (縮尺1/4)

c.まとめ

弥生時代~古代にかけての遺構・遺物が確認できた。調査地の中央部を境に微高地が北方向にやや下り、その末端部に東西方向となる流路状の落ち込みが認められた。この落ち込みは当該期間において存続していたと考えられ、溝状遺構が集中している。また一定規模の柱穴をもつSB01は、平成14年度調査となつた林下所・木太今村上所遺跡との関連が想定される。



第42図 SB01 平・断面図 (縮尺1/40)

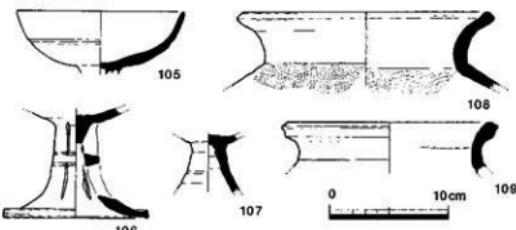
No.14 林下所遺跡 (林町60号線 平成10年度工事立会)

1 調査概要

- a. 場 所 林町
- b. 期 間 平成11年1月27日
- c. 面 積 約200m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容 (第44図)

既存の道路拡幅工事であったが、同路線は平成8年度に林下所遺跡として調査が行われているため、当年度も工事立会を実施し、土坑を確認した。遺構は搅乱で大半を消失していたが、まとまって須恵器が出土した。古墳時代終末期のものと考えられ、当該期の集落である林下所・木太今村上所遺跡に属するものと考えられる。



第43図 工事立会時出土遺物実測図 (縮尺1/4)

No.15 林下所・木太今村上所遺跡

(林町8号線 平成14年度調査)

1 調査概要

- a. 場 所 林町・木太町
- b. 期 間 平成14年11月25日
～12月27日
- c. 面 積 約600m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容

a. 調査の経緯 (第44図)

当路線はほぼ新規工事であり、林下所遺跡(林町60号線・65号線)に近接するため、確認調査を行った。その結果、溝・畦畔等の遺構を確認するとともに須恵器・土師器が出土したため、調査を実施した。

b. 遺構の概要 (第45図)

調査地は現有の畦畔・道路により3分割され、南からI～III区を設定した。I区では上層部と下層部に分かれ、上層の遺構では水田と考えられる大・小畦畔を検出している。下層の遺構としてSD01, SK01～03が認められる。II区では、1面のみで遺構を確認している。掘立柱建物SB01、これを巡るSD01・SD02等の溝や土坑SK01～03を検出した。III区は、現状の地割と合致するSD01～04があり、これに先行する遺構として掘立柱建物SB01、及びこれを巡る溝状遺構SD10～14や東西方向の溝SD05等を検出した。

主要遺構の所属時期別では、弥生時代後期(I区SK03, II区SK01)、古墳時代後期～終末期(I区SD01, III区SB01, SD05・SD07等)、古代～近世(I区畦畔, III区SD01)が認められる。また近世以後の所産として、II・III区で認められる円形状の土坑及び井戸がある。

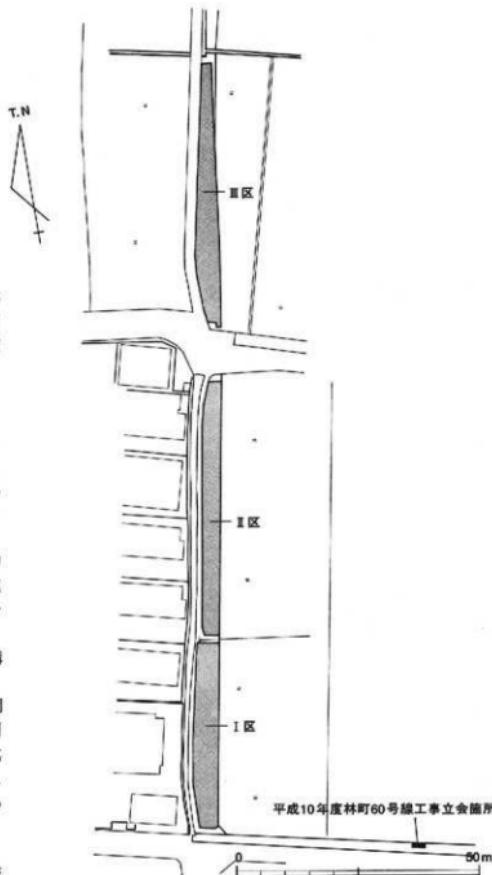
c. 基本土層 (第46図)

調査地は現況で北方向に下がる地形で、調査区毎に現有の耕作土～地山とした自然層との間で堆積状況が異なる。I区では自然層の上位に土壤化した黒褐色土①が水平堆積し、畦が検出されたため水田層と想定し、これを境に上層・下層遺構とした。II区では現況の耕作土直下が自然層となり、I区で認められた土壤層は、雨平を受けたものと考えられる。III区は南部では耕作土直下が自然層となり、中央部に黒褐色土②が堆積する流路状の落ち込みが認められ、以北が砂層となっている。確認調査でも調査地の北側に厚い砂礫層が認められており、埋没河川の存在が想定される。この流路の両岸部にSB01が位置し、流路の埋没時にSD05・SD07～09の東西方向の溝が認められる。

d. 遺構・遺物

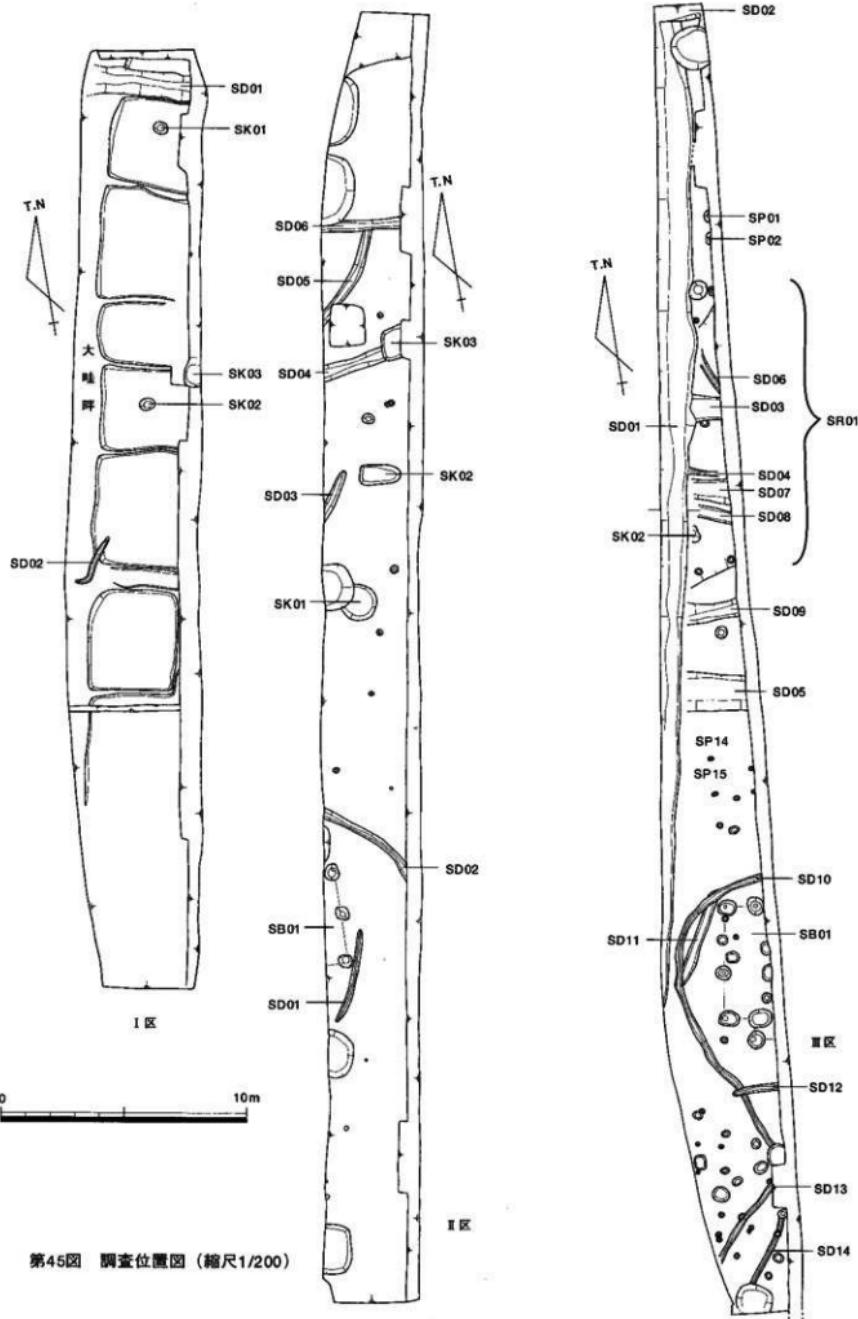
畦畔状遺構 (第53図)

I区で確認した遺構である。南北方向の大畦畔及び、東西方向の小畦畔を検出した。大畦畔はほぼ表上の直下標高7.44～7.47mで認められた。検出長は約30mで、主軸方位は現状の地割にはば合致するN-11°～Eを示す。



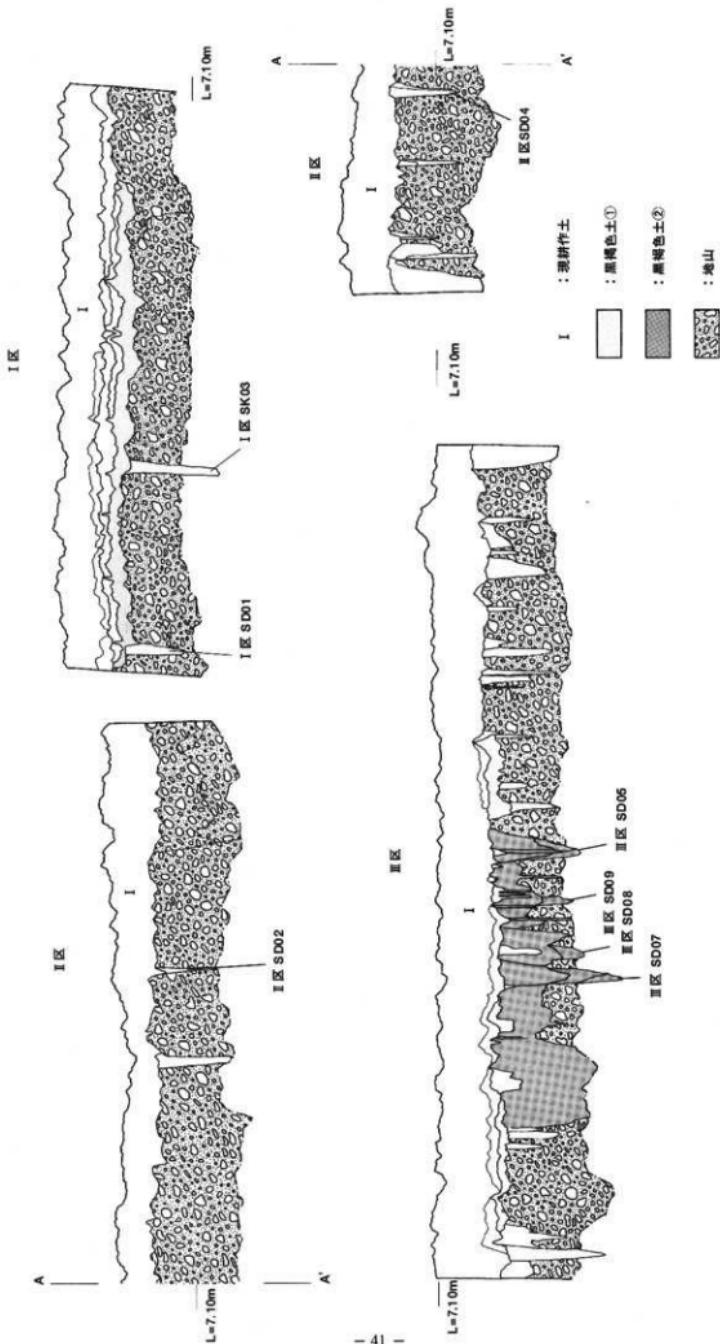
第44図 林下所・木太今村上所遺跡 (林町8号線)

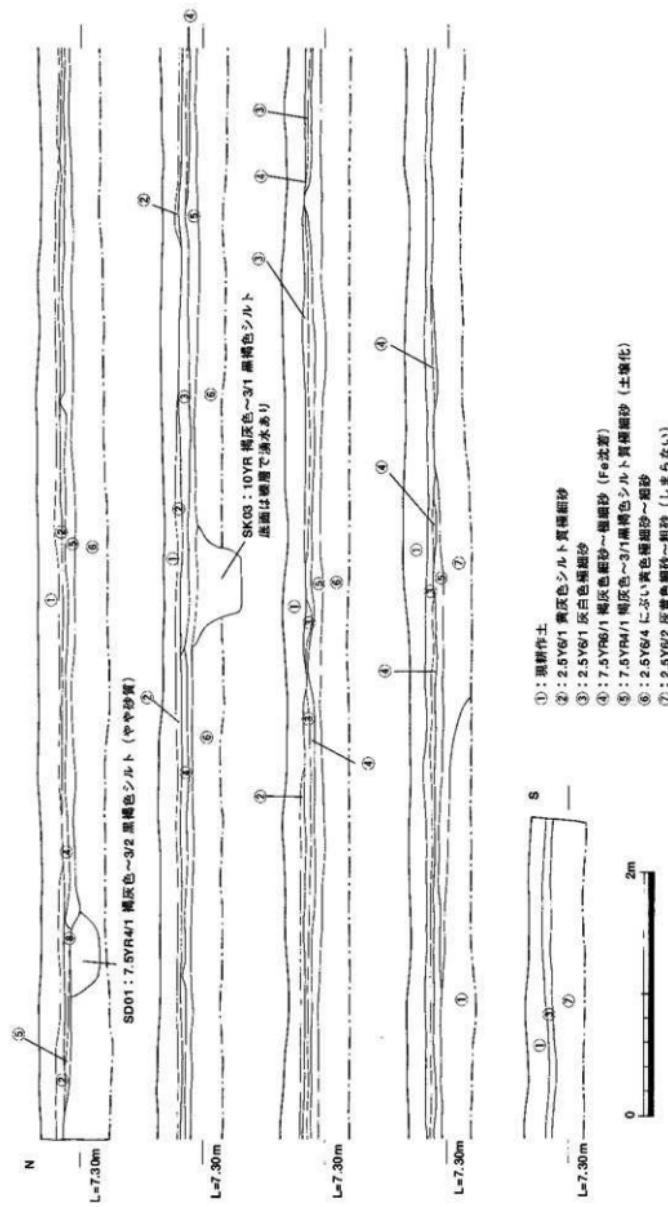
調査位置図 (縮尺1/1000)



第45図 調査位置図 (縮尺1/200)

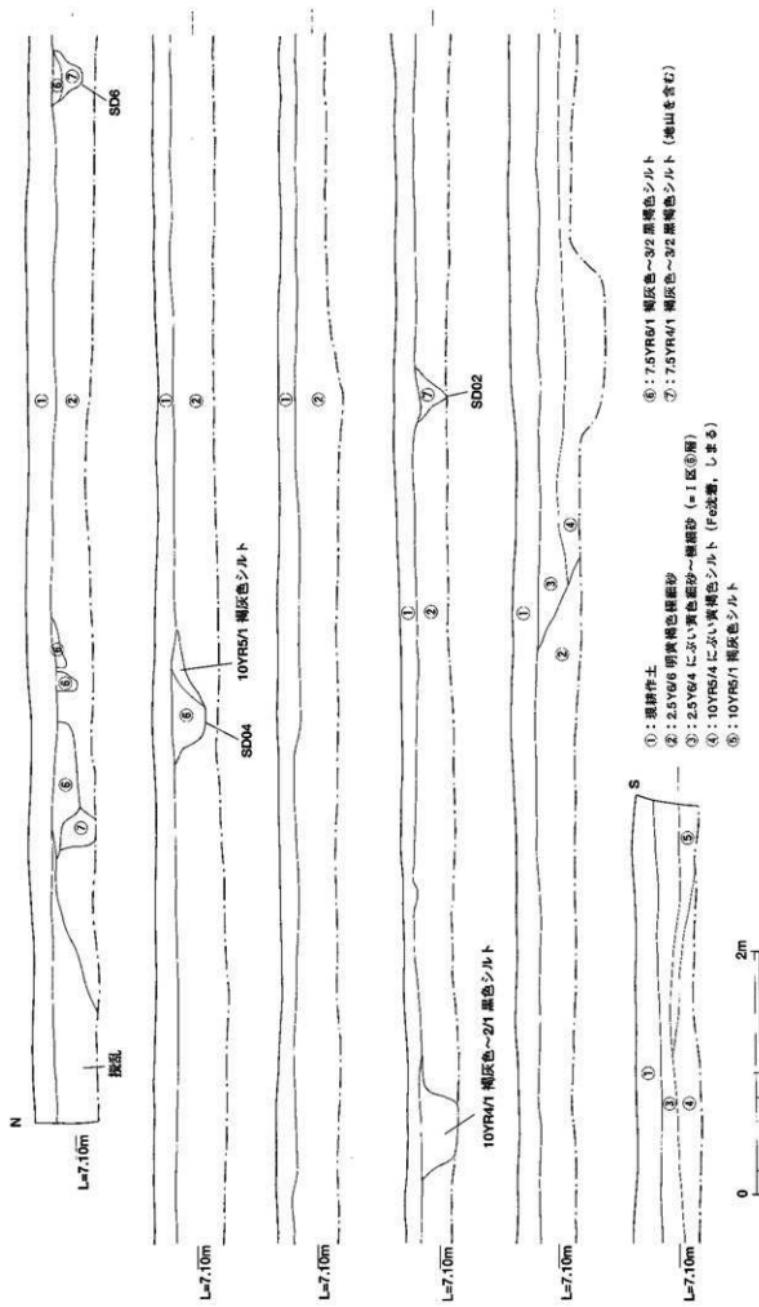
第46図 調査地東壁基本土層図② (縮尺 高さ 1/40・長さ 1/320)

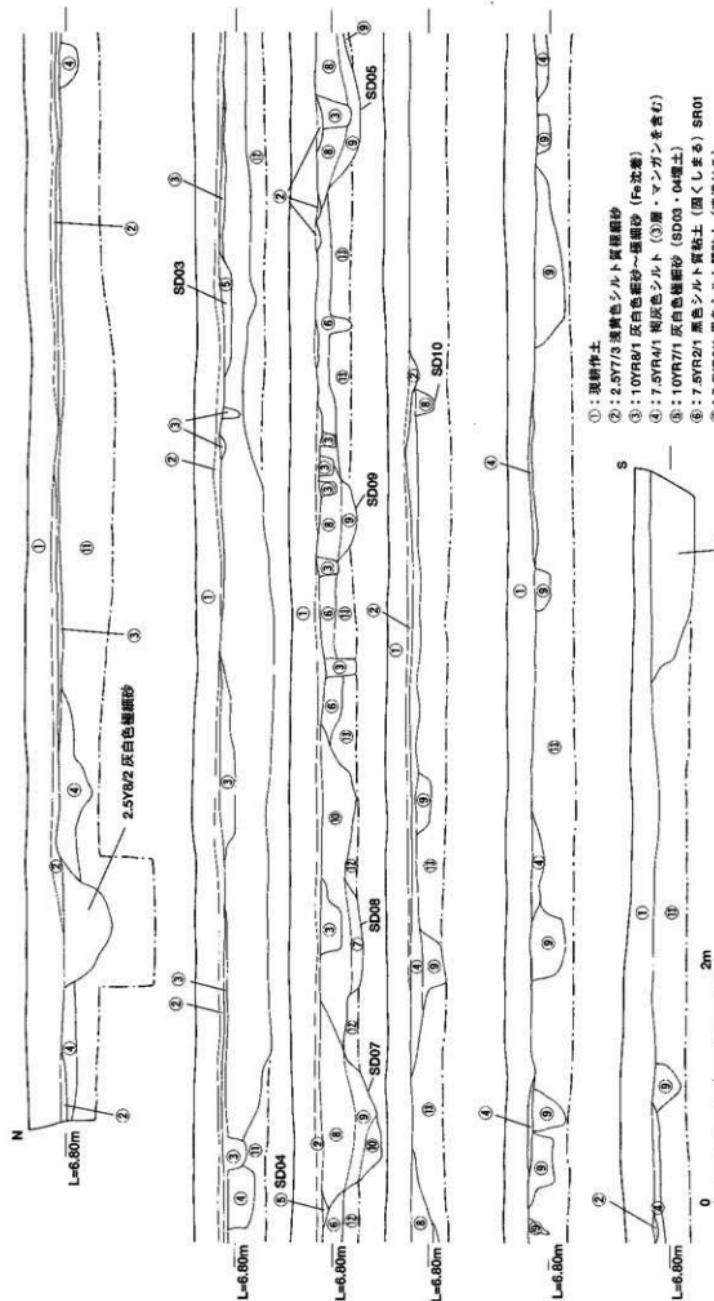




第47図 I区東壁土層図 (縮尺 1/40)

第46図 II区東壁土層図 (縮尺1/40)





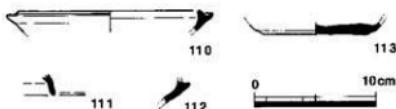
- ①: 現耕作土
- ②: 2.5Y7/3 黄褐色シルト質粗粒砂
- ③: 1.0YR8/1 白色板砂～粗粒砂 (Fe含む)
- ④: 1.0YR8/1 白色板砂 (SD03・04等)
- ⑤: 1.0YR7/1 白色板砂
- ⑥: 7.5YR2/1 黑色シルト質粘土 (固くまつる) SR01
- ⑦: 7.5YR2/1 黑色粘土 (軟弱じる)
- ⑧: 7.5YR3/1 黑褐色シルト (SD05等)
- ⑨: 7.5YR4/1 暗灰色～3.1黑褐色沙泥シルト質粘土
- ⑩: 7.5YR3/1 黑褐色シルト質粘土
- ⑪: 7.5YR7/1 明暗灰褐色細粒
- ⑫: 2.5Y6/6 明黄色細粒シルト
- ⑬: 3Y6/4 オーフ黄褐色細粒

第49図 III区東壁土層図 (縮尺1/40)

検出幅は最大で1.2mを測るが、調査地外に接するため規模は不明である。大畦畔の構成土は固く締まる黒色土だが盛上した様には見られず下層に相当する弥生土器の包含層（第54図）と同一であることから、むしろ耕作から取り残された部分と考えられる。小畦畔は地山⑥を含んだ締まった土が、土壌化層⑤層より数cm程度だが隆起したもので、検出幅は約15cmを測る。区画5・6間の畔は2つの小畦畔状に見られるが、中央部が足跡等により埋もるもので元来幅1m程の規模をもつと考えられる。また下層遺構に相当するSD01上面も大畦畔同様、固く締まって認められ、埋没後幅1m程の畦となつた可能性も考えられる。これらは小区画の水田と考えられるが、面積が推定できるものは区画6のみで約14m²を測る。水田面は地形に沿い緩やかに北東方向へ下がり、区画5の南西部に同方向を向く取水口SD02が付けられている。所轄時期は被覆する④層が薄いため詳細は不明だが、遺構面から古代以降で近世までのものと考えられる。

5層出土遺物（第50図）

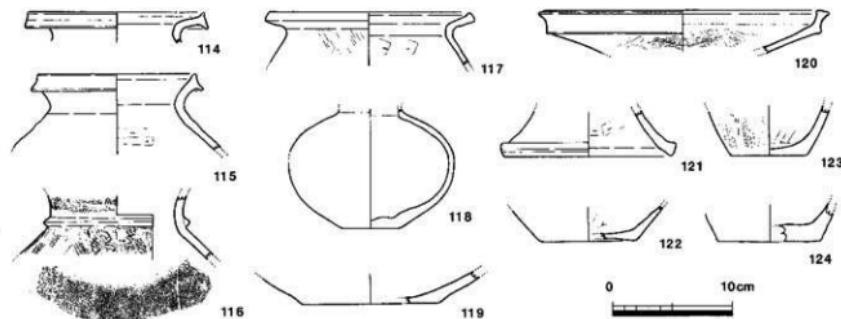
110～113は須恵器环身及び蓋である。110は口縁部の立ち上がりが短く、受け部の退化が著しい。113の底面は、平坦となっている。



第50図 I 区⑤層出土遺物実測図（縮尺1/4）

大畦畔出土遺物（第51図）

114～124は弥生土器で、概ね後期初頭の所産と考えられる。114・115は壺で、口縁端部を上下方向に拡張する。116は頸・体部片で壺と考えられる。体部との境に貼付けの突帯を巡らし、ハケ調整後体部上半部に櫛描き波状文を継ぎに施す。117は壺で、内面は体部上端までケズリ調整を行う。118は細頸壺体部。119は壺底部。120は高坏。口縁端部を内外方に拡張し、退化した凹線を施す。121は脚部で、端部がやや開き、丸みを帯びた端面に退化した凹線を施す。122～124は壺の底部である。



第51図 I 区大畦畔出土遺物実測図（縮尺1/4）

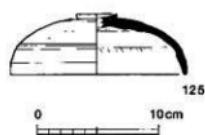
I区SD02（第53図）

I区大畦畔上に開削された溝である。検出した標高は7.40～7.45m前後を測り、底面は7.38～7.40mを測る。検出幅は0.2m前後である。断面は船底形で、堰上は灰白色砂層の単層である。区画5へと流れ込む砂粒の痕跡が残っていた。

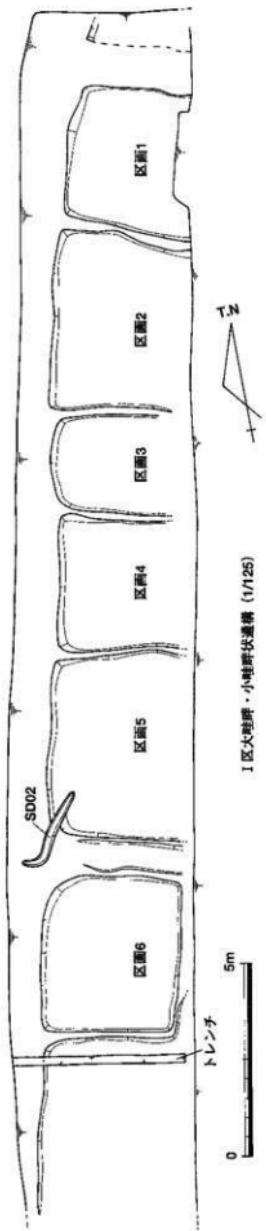
出土遺物（第52図）は、125の有蓋高坏蓋である。天井部に器高の1/2程回転ヘラケズリが認められる。

I区SD01（第47・53図）

I区北端部で確認した溝である。検出した標高は7.40m前後、底面は7.05～7.10m前後を測り、西方が深くなっている。N-102°-E前後の方位を示す。断面は船底形を呈し、堰土はやや砂質の褐灰色～黒褐色シルト單層である。遺物が比較的まとまって出土している。出土遺物より、古墳時代終末期の埋没時期が考えられる。



第52図 I 区 SD02
出土遺物実測図（縮尺1/4）

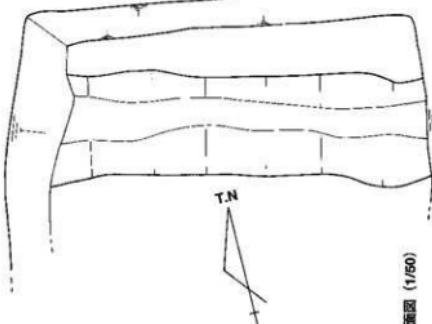


1区大里坪・小寺野状邊界 (1/125)



- ① : 2.5YB/1 白色細繊維
- ② : 7.5YR/1 棕灰色細繊維 (Fe沈澱)
- ③ : 7.5YR/1 棕灰色～3/1 黑褐色シルト質纖維
- ④ : 10YR/2/1 黑色細泥シルト (Fe沈殿、固くしまる、大持続)
- ⑤ : 2.5YR/4/4 にがい黄色細繊維 (無山)

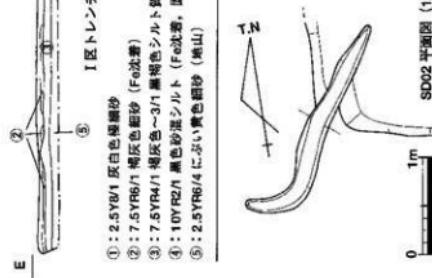
0 1m



SD001 断面図 (1/50)

① : 2.5YR/1 棕灰色細繊維

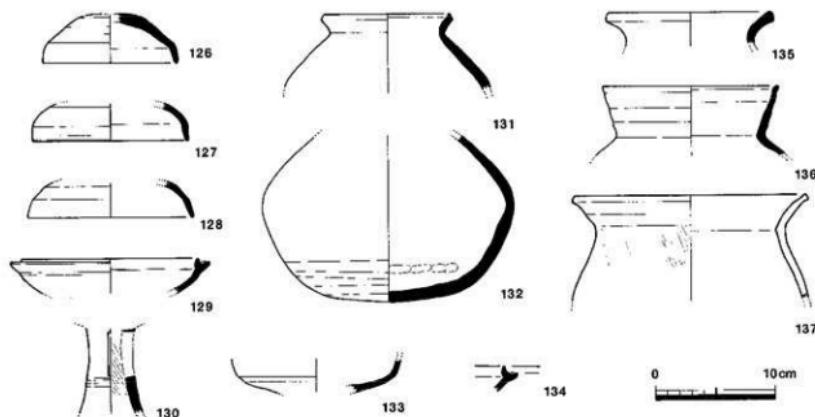
0 50cm



0 1m

第53図 1区東邊溝平・断面図

出土遺物（第54図）のうち、126～136は須恵器である。126～128は蓋である。126は小振りのもので、天井部が深く口縁部で屈曲する。天井部外周に器高の1/3程回転ヘラケズリが認められる。129は壊身で、口縁端部の立ち上がりは低い。130は高环脚部。中位に沈線を施し、その上方にスカシが認められる。131・132・135・136は壺。131は頸部で「く」に屈曲し、口縁端部を擒み上げる。132は体部の中位でやや丸みを帯び屈曲する。下半部に回転ヘラケズリが認められる。136は器壁の薄い直口壺で、強い回転ナデを行う。137は土師器甕である。薄い器壁で卵形の体部より、「く」に屈曲しやや長い口縁を有する。



第54図 I-SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

I-SK01（第56図）

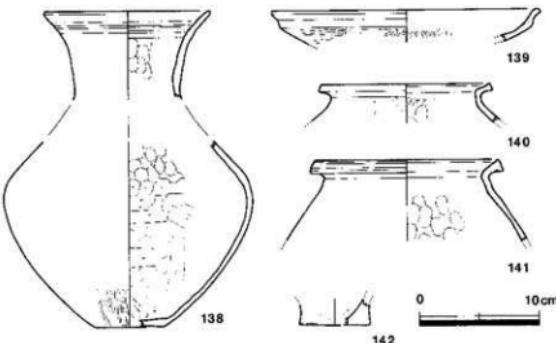
I区北端部、⑤層の下位で確認した遺構である。検出した標高は7.35m前後で、底面は7.2m前後を測る。長さは0.5～0.6mで、東西方向にやや長い梢円形を呈する。柱穴の可能性を考えたが、対応するものは確認できなかった。出土遺物はない。

I-SK02（第56図）

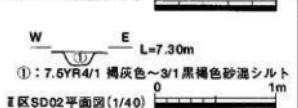
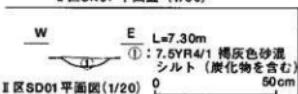
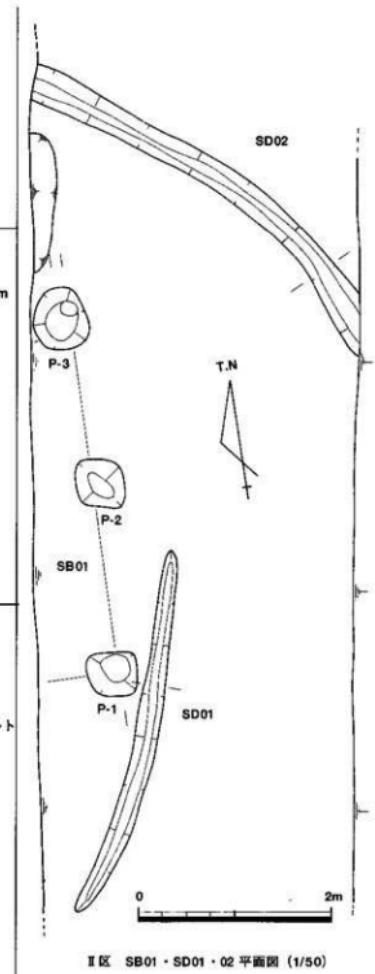
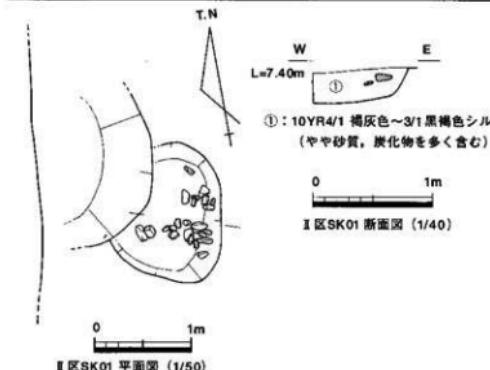
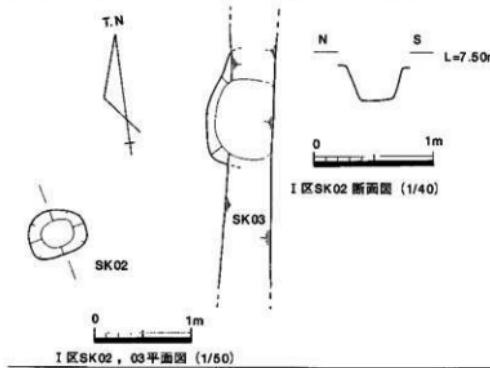
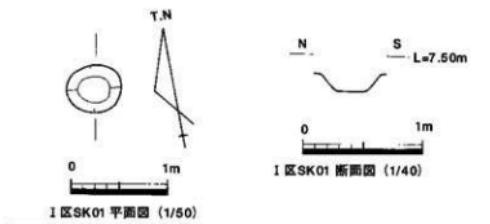
I区北端部、⑤層の下位で確認した遺構である。検出した標高は7.38m前後で、底面は7.1m前後を測る。長さは0.5～0.6mで、東西方向にやや長い梢円形を呈する。柱穴の可能性を考えたが、対応するものは確認できなかった。出土遺物はない。

I-SK03（第47・56図）

I区北端部、⑤層の下位で確認した遺構である。底面付近で礫層に達しており、湧水が認められたため井戸の可能性が考えられる。検出した標高は7.38m前後で、底面は6.93m前後を測る。検出長約1mを測り、隅丸方形状の平面形態と考えられるが、東半が調査地外であるため詳細は不明である。断面の形状は、上半部が開き下半はほぼ垂直に落ちる。埋土は褐灰～黒褐色土の単層であ



第55図 I-SK03 出土遺物実測図（縮尺1/4）



第56図 I・II区造構平・断面図

る。出土遺物から、弥生時代後期初頭のものと考えられる。

出土遺物（第55図）のうち、138は長頸壺である。口縁部が緩やかに開き、下端に退化した凹線を数条巡らす。体部は中位で最大径になるとみられ、なで肩で丸みを帯びた器形に復元できる。139は高坏環部である。坏部の内面より口縁部を接合し、端部を短く折り曲げる。140・141は壺で、端面の拡張は大きくなく、141には退化した凹線が認められる。142は甕底部である。

I 区人力掘削時出土遺物（第57図）

すべて表土直下から、⑤層上面までに出土した遺物である。143は弥生土器鉢口縁部である。II縁端部を外方向に突出させる。144は須恵器坏底部である。平坦な底面をもつ。145はサヌカイト製の打製石庖丁である。

II 区SB01（第56図）

II区南部で確認した掘立柱建物である。柱穴が直線的に並んでおり、柱穴の規模より調査地外となる西方に向展する建物と考えられる。柱間距離は約2.5mを測る。主軸はほぼ真北を示す。規模は不明だが確認状況からは、東西の側壁が2間であると考えられる。柱穴はP-1・2が約0.5mの隅丸方形であり、やや大きめ円形に検出したP-3の底面には、柱が据わっていたとみられる径20cm程の円形の窪みが認められている。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、小規模な溝状構造SD01・SD02との配置関係が、III区SB01と共に通してお同様の所属時期が考えられる。

II 区SD01（第56図）

II区南部で確認した溝である。検出した標高は7.24～7.26mを測り、底面は7.19m前後を測る。検出長は約4mで、若干湾曲し南北方向に伸びるが途中で途切れる。検出幅は0.2m前後である。断面は船底形で、埋上は褐灰色土の单層である。遺物は出土していない。

II 区SK02（第56図）

II区南部で確認した溝である。検出した標高は7.25m前後を測り、底面は7.13～7.16mを測る。若干湾曲しながら東西方向に伸びる。検出幅は0.3～0.4mを測る。断面はU字形で、埋上は褐灰色土の单層である。遺物は出土していない。

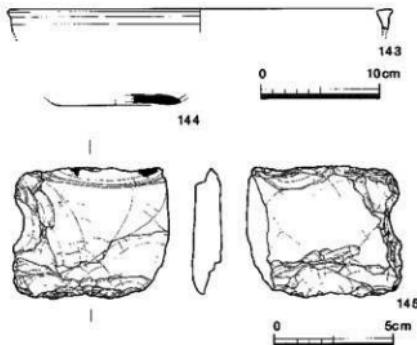
II 区SK01（第56図）

II区中央部で確認した土坑である。検出した標高は7.20～7.24mを測り、底面は6.95m前後を測る。長軸方向に約1.38mを測りやや不整形な長方形を呈するが、西側を近世の土坑に壊されている。断面は船底形で、埋土は炭化物を多く含む砂質上で拳大の石が中位～底面付近にかけて密集し認められた。出土遺物から弥生時代後期初頭のものと考えられる。

出土遺物（第58図）のうち、146は壺で、口縁端部を上方に拡張し凹線を施す。147は高坏脚部で、裾端部を跳ね上げ退化した凹線を施す。148は壺底部である。外面にヘラ磨き、内面にケズリ調整が認められる。

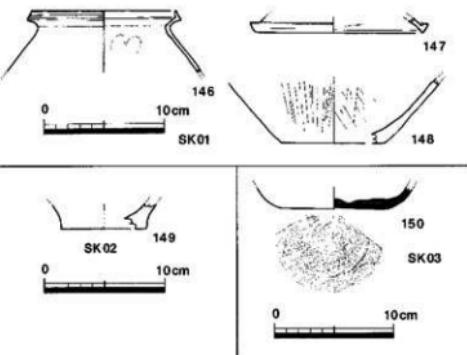
II 区SK02（第59図）

II区中央部で確認した土坑である。検出した標高は7.23m前後を測り、底面は6.80～6.90m前後を測る。長軸方向に約1.70m、短軸方向に

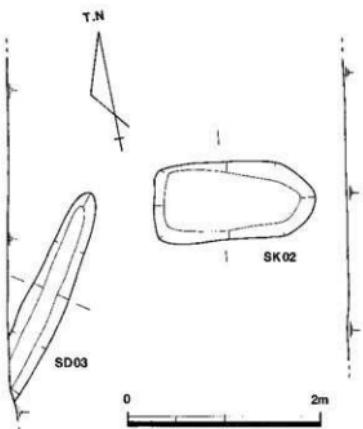


第57図 I 区人力掘削時出土遺物実測図

（縮尺：土器1/4, 石器1/2）



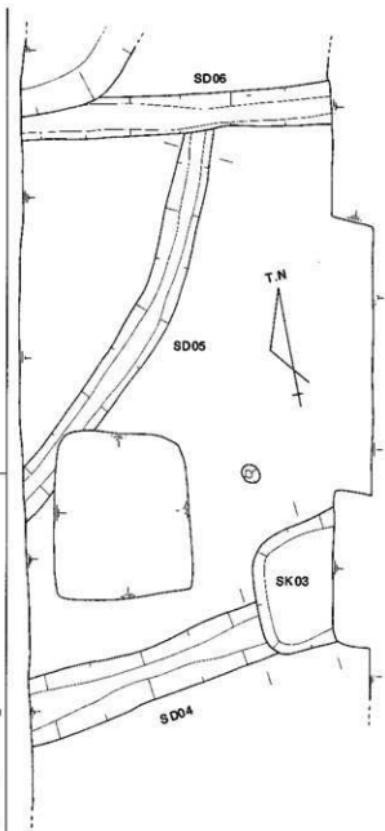
第58図 II 区 SK01・02・03出土遺物実測図（縮尺1/4）



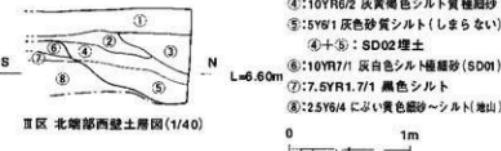
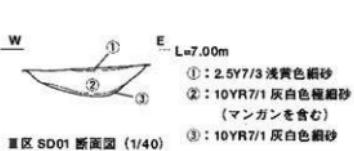
L=7.30m E W L=7.30m N S
 ①: 7.5YR4/1 暗灰色砂質シルト
 II区 SD03 断面図 (1/40)
 ①: 10YR4/1 暗灰色砂質シルト
 II区 SK02 断面図 (1/40)

N S L=7.30m N S L=7.30m
 ①: 7.5YR4/1 暗灰色～3/1黒褐色
 砂混シルト (地山を塊状に含む)
 II区 SD04 断面図 (1/40)
 ②: SD04埋土
 ①: 7.5YR4/1 暗灰色シルト (SK03)
 II区 SK03・SD04 断面図 (1/40)

W E L=7.30m 0 1m
 ①: 7.5YR4/1 暗灰色～3/1黒褐色
 砂混シルト (地山を塊状に含む)
 II区 SD06 断面図 (1/40)



- ①: 現耕作土
- ②: グライ化土
- ③: 花崗土+灰色シルト
- ④: 10YR6/2 暗黃褐色シルト質粗細砂
- ⑤: 5Y6/1 暗色砂質シルト (しまらない)
- ④+⑤: SD02埋土
- ⑥: 10YR7/1 灰白色シルト質粗砂 (SD01)
- ⑦: 7.5YR7/1 黑色シルト
- ⑧: 2.5Y6/4 にい黄白色砂～シルト (地山)



第59図 II・III区遺構平・断面図

約0.8mを測る。平面の形状は墓の可能性がある長方形のもので、東端は先細る。長軸の方位はN-100°-Eを示す。断面は箱形で、埋土は褐灰色の砂質土で充填される。出土遺物からは弥生時代前期の可能性が考えられる。

出土遺物（第58図）は1点のみである。149は弥生土器底部である。胎土中に砂粒を多量に含む。

II区SK03（第59図）

II区北部で確認した土坑である。検出した標高は7.23mを測り、底面は7.02m前後を測る。平面形状は約1.2mの方形と推定される。断面は船底形で、埋土は褐灰色土の単層である。出土遺物から古代ものと考えられる。

出土遺物（第58図）は1点のみである。150は須恵器底部である。底面が平坦になっている。

II区SD03（第59図）

II区中央部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り、底面は7.07~7.13mを測る。検出長は約2mで、西側の調査地外より北東へと伸びるが途中で途切れる。検出幅は約0.4mである。断面はU字形で、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

II区SD04（第59図）

II区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り、底面は約7.02mを測る。西側の調査地外より東へと伸びるが途中でSK03に接続される。検出幅は0.5~0.7m前後である。断面はU字形で、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

II区SD05（第59図）

II区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り、底面は7.09~7.12mを測る。西側の調査地外より北東へと伸び、SD06と接続する。検出幅は0.5~0.7m前後である。断面はU字形で、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

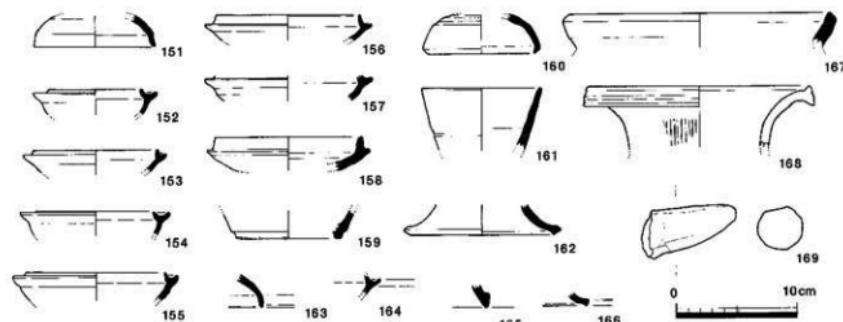
II区SD06（第48・59図）

II区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り、底面は7.00~7.04mを測る。N-98°-Eの方位を示し、西側の調査地外より東側の調査地外へと伸びる。検出幅は0.5~0.7m前後である。断面はU字形で、埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

III区SD01（第45・59図）

III区東端部、条里坪界線上に位置し確認した溝である。検出した標高は6.82~6.87mを測り、底面は6.50~6.65mで緩やかに北へ下がる。検出長は約40mで、N-10°-E前後の方位を示す。検出幅は最大で約0.9mである。断面は船底形で、埋土は灰白色極細砂及び最下層部に砂層が認められる。遺物は弥生~古墳時代のもので占められるが、遺構の切り合い関係及び検出面の状況より古代~近世のものと考えられる。

出土遺物（第60図）のうち、151~167は須恵器である。蓋（151・160・163）・壺身（152~157・164）・脚部（162・165・166）・甕（167）等がある。168は弥生土器縁口縫部である。169は土師器把手部である。



第60図 III区 SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

III区SD02 (第45・59図)

III区北端部で確認された東西方向の溝である。検出した標高は6.80m前後を測り、底面は6.31～6.63mで急激に西へ下がる。検出長は約2mで、検出幅は最大で約0.7mである。SD01にはほぼ直交し開削され、これに後出している。断面は船底形と考えられ、埋土は灰黄色土及び最下層部に砂層が認められる。所属時期は出土遺物より、近世頃と考えられる。

出土遺物（第60図）のうち、170は陶器小壺、171は青磁碗である。

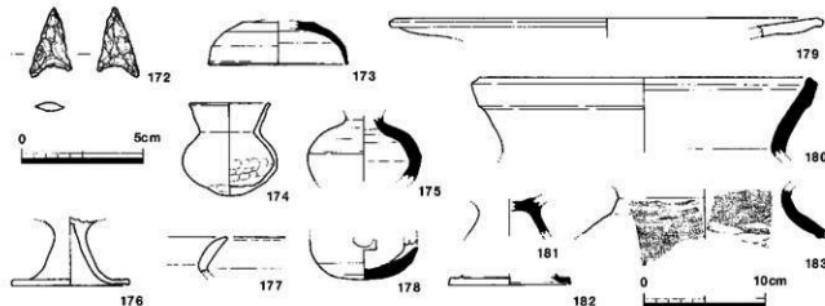
III区SD03・SD04 (第45・49図)

III区中央部東半で確認した東西方向の溝である。何れも検出した標高は6.88m前後で、深度は5cm程度である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが、確認面からは古代～近世と想定される。

III区SR01 (第45・49図)

III区中央部東半で確認した東西方向の流路である。埋土である黒色の粘質土が最深部で0.4m程度認められた。以北は砂質土となっており、本米の河川の規模は更に北方向まで広がるものと考えられる。埋土の特徴より緩慢な埋没であったとみられ、埋没の最終段階においてSD05～SD09が開削されたと考えられる。平面の検出では、これらの溝跡の上層部との判別が難しいことから、溝が明瞭になるまで当埋土を掘り下げ検出した。このため出土遺物には、本来溝の遺物も含まれる可能性がある。所属時期は周辺部の状況から弥生時代以前に遡るものと想定されるが、当出土遺物及び溝の出土遺物から、概ね古墳時代後期～終末期にかけて埋設した流路と考えられる。

出土遺物（第62図）のうち、172は凹基式の石鎚である。173は須恵器蓋で、小振りだが丸みを帯びた体部で、外面には自然釉が認められる。天井部に窓高の1/3軸回転ヘラケズリを行う。174は土師器蓋である。小形のもので、下彫れの体部で底部は厚く尖り気味である。口縁部は「ハ」の字に長く伸び、端部を短く外に摘み出す。確認調査時に完形で出土した。178は竈底部。外面に回転ヘラケズリを行う。円孔部が僅かに認められる。176は大形の土師器高杯で、脚の下端で大きく屈曲し、裾部は水平方向に開く。裾端部は僅かに下方に摘み、爪状となっている。179は土師器蓋で、水平方向に開く口縁部となる。180は須恵器蓋で、口縁下端に平坦面をもつ。上端部はやや内側に突出させ、内面に沈線状となる強いナデを施す。183は須恵器蓋の体部で、外面には格子目状の叩き成形後、カキ目を施す。内面には当て具痕を残している。

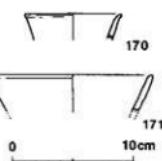


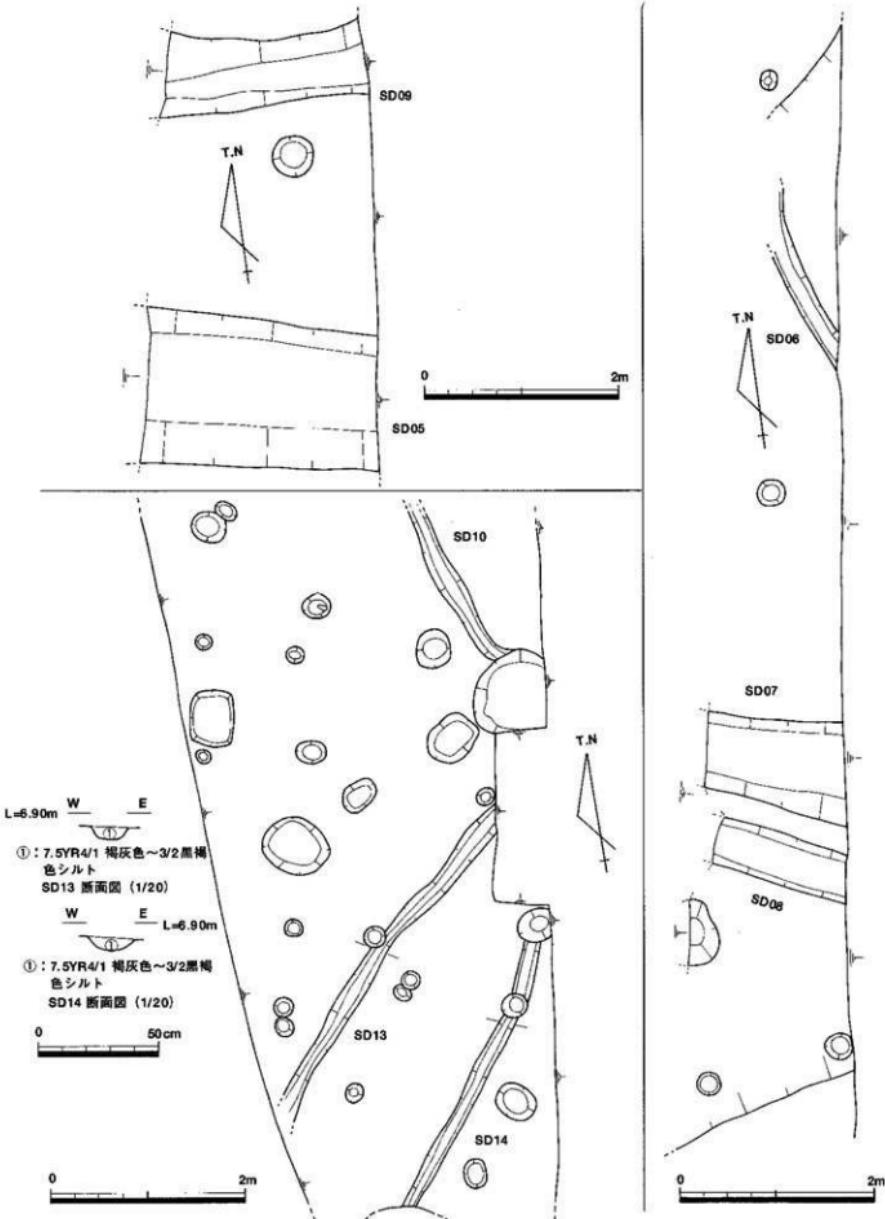
第61図 III区 SD02
出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

III区SD05 (第49・63図)

III区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に埋される。上述の様に断面観察ではSR01の上層部より認められたが、平面の検出ではほぼSR01の底面で検出している。検出した標高は6.80m前後を測り、底面は6.54～6.60mで西へ下がる。検出長は約2.6mで、N-100°～E前後の方位を示す。検出幅は約1.8mである。断面は船底形で、埋土は黒褐色土である。出土遺物はすべて下層のものである。所属時期は、SR01との関係及び出土遺物から古墳時代後期～終末期と考えられる。

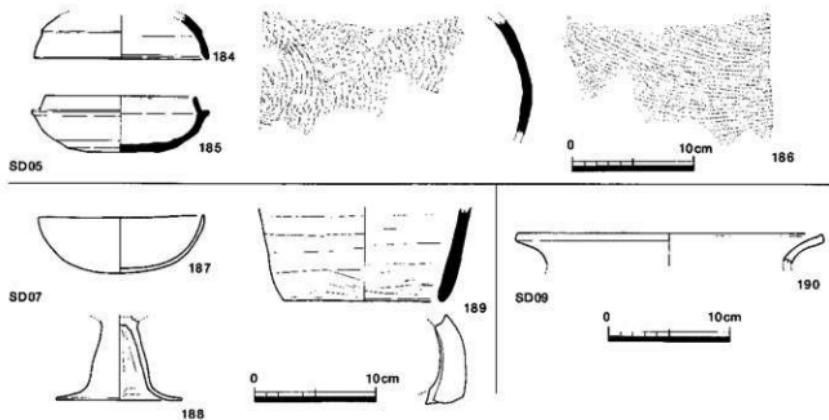
出土遺物（第64図）のうち、184・185は須恵器蓋、壺である。184は小片のため法量は明確ではないが、天井部との境の稜が明瞭で口縁端部の内面に段をもつ。185は口径14.6cmを測る。立ち上がりは内傾し、1.2





第63図 Ⅲ区造構平・断面図 (縮尺 1/50・1/20)

cmの高さをもつ。受け部は水平方向よりやや上を向く、体部下半に回転ヘラケズリが認められる。6世紀前葉のものと考えられる。86は須恵器の体部片で、外面に格子目状の叩き痕、内面に同心円状の当て具痕が認められる。



第64図 III区 SD05・07・09 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

III区SD06 (第63図)

III区北部で確認した溝である。SR01の底面で検出した。検出した標高は6.71m前後を測り、底面は6.54～6.50mで緩やかに北へ下がる。検出長は約1.5mで、検出幅は約0.2mである。SD10に類似し、やや湾曲し弧を描く様に検出された。遺物は出土していない。SR01との前後関係は不明だが、検出面より古墳時代後期～終末期と考えられる。

III区SD07 (第49・63図)

中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に埋される。上述の様に断面観察ではSR01の上部より認められたが、平面の検出ではほぼSR01の底面で検出している。検出した標高は6.72m前後を測り、底面は6.38m前後である。検出長は約1.5mで、検出幅は約1.0mである。断面は台形で、埋土は上層・下層部が褐色土で、中位はやや褐色で砂質土となっている。所属時期は、SR01との関係及び出土遺物から古墳時代後期～終末期と考えられる。

出土遺物 (第64図) のうち、187・188は上師器鉢・高壺である。最下層で出土した。189は須恵器底部である。底面に円孔をもつと考えられ、瓶とみられる。内外面の下位にヘラケズリを行う。

III区SD08 (第49・63図)

III区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に埋される。検出した標高は6.73m前後を測り、底面は6.52m前後である。検出長は約1.5mで、検出幅は約0.5mである。断面は船底形で、埋土は黒色の粘質土である。出土遺物はない。所属時期はSR01底面で認められることから、古墳時代後期と考えられる。

III区SD09 (第49・63図)

III区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に埋される。検出した標高は6.78m前後を測り、底面は6.54～6.59mで緩やかに東へ下る。検出長は約2.0mで、検出幅は約0.8mである。断面は船底形である。所属時期はSR01底面で認められることから、古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (第64図) は1点のみである。190は土師器壺の口縁部である。

III区SD13 (第63図)

III区南端部で確認した溝である。SB01を巡るSD10と同様相を呈し、ほぼ直交する位置関係で検出された。検出した標高は6.82m前後を測り、底面は6.72～6.78mで緩やかに北へ下る。検出長は約3.9mを測り、検出幅は約0.2mである。断面はU字形で、埋土は褐色～黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していないが、SD10との関連より古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SD14（第63図）

Ⅲ区南端部で確認した溝である。SD13と併走し、同様相を呈するSD10とほぼ直交する位置関係で検出された。検出した標高は6.82m前後を測り、底面は6.72~6.75mである。検出長は約2.9mを測り、検出幅は約0.2mである。断面はU字形で、埋土は褐灰色～黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していないが、SD10との関連より古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SD10（第66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。南部では北方向に伸びるが、SB01付近で東方に湾曲し検出された。検出した標高は6.82m前後を測り、底面は6.64~6.75mで緩やかに北へ下がる。検出幅は0.2~0.3mで、断面はU字なしし船底形である。埋土は褐灰色～黒褐色土である。所属時期は、出土遺物より古墳時代終末期と考えられる。

出土遺物（第65図）のうち、191は須恵器壺である。小振りで、口縁の立ち上がり低く受け部の退化が著しい。192・193は須恵器片である。192は蓋の可能性がある。194は鉄鋸に覆われているが、帆形の鐵鋸道具と考えられる。

Ⅲ区SD11（第66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。SD10に先行し、これに接続して検出された。検出した標高は6.75m前後を測り、底面は6.70mである。検出幅は0.3~0.4mで、断面はU字なしし船底形である。埋土は褐灰色の砂質土である。時期の判明する遺物は出土していないが、SD10との関連及び周囲の遺構から古墳時代後期～終末期と考えられる。

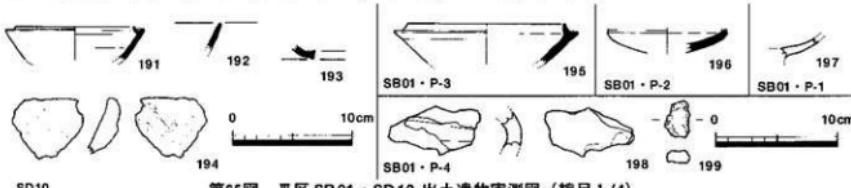
Ⅲ区SD12（第49・66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。SD10に直交して途切れる。検出した標高は6.81m前後を測り、底面は6.68~6.65mである。検出幅は0.3m前後を測る。N-92°-Eの方位を示す。断面はU字で、埋土は黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していないが、SD10との関連から古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SB01（第66図）

Ⅲ区南部で確認した掘立柱建物である。SD10に開まれた範囲には一定の規模を有する柱穴が多数確認され、またSD10・11との関連から少なくとも1度の建替が想定される。柱穴の配置状況からは、南北方向に2ないし3箇所で東西方向に2箇所以上の規模で復元でき、また南面には廻を伴う可能性が考えられる。柱間距離は東西方向では1.25mを測る。南北方向では2.7m及び1.8mを測るが、P-1・P-2の中間1.35mにSP31が並び、建物を構成する柱穴とも考えられる。主壁はN-11°-Eの方位を示している。また身舎の南面より0.9m外に廻の可能性があるSP22・P-6が並ぶが、SP22の埋土は他のものとは異なる灰色土であり規模も小さいため、当建物に伴わない可能性が高いと考えられる。廻の柱穴を欠くことから、身舎の屋根と独立した廻の可能性も推定される。各柱穴はいずれも褐灰色～黒褐色土を埋土とし断面で柱痕は認められなかつたが、底面において柱を据えていたと考えられる約0.2mの円形の窪みが検出された。出土遺物及びSD10との関係から、古墳時代後期～終末期のものと考えられる。

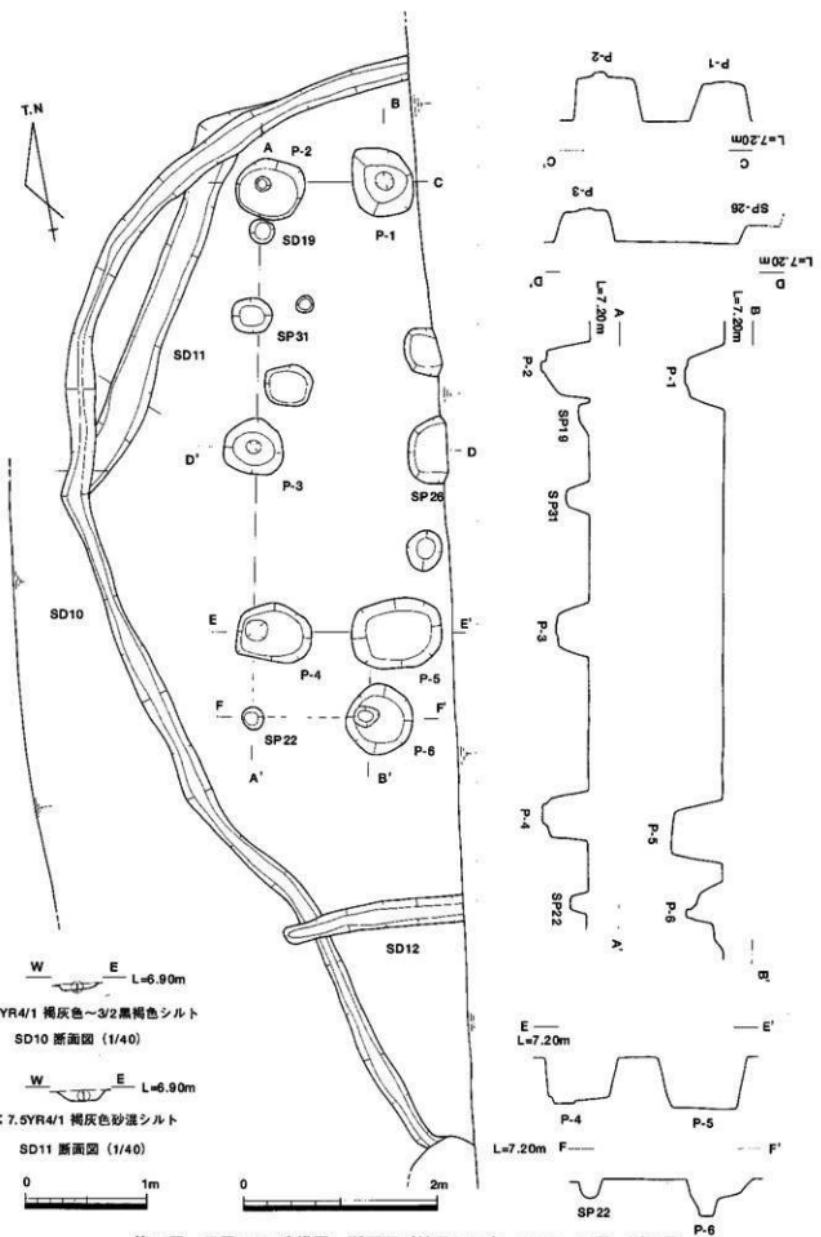
出土遺物（第65図）のうち、195は須恵器壺である。やや小振りで立ち上がりも高くないが、受け部の境はまだ明瞭である。196・197は高環壺部と考えられる須恵器及び土師器片である。198は高環脚の可能性もあるが、鉄滓の付着が認められ鷦の羽口部と考えられる。199は鉄滓片である。



第65図 Ⅲ区 SB01 · SD10 出土遺物実測図（縮尺1/4）

Ⅲ区SP02（第45図）

II区北部で確認したビットであるが、東半分を失う。検出した標高は6.8m前後を測り、底面は6.50m前後を測る。長軸方向に約0.5mを測り、平面の形状は円もししくは圓丸方形と推定される。調査範囲の制限のために明確さに欠けるが、SD06との配置関係からは同規模を有するSP01と合わせ、SB01と同様の遺構が存在する可能性も考えられる。出土遺物及び周囲の遺構との関連から、古墳時代後期～終末期のものと考えられる。



第66図 III区SB01造構平・断面図(縮尺1/50), SD10・11平・断面図

出土遺物（第67図）のうち、200は須恵器壺蓋である。201は土師器甕口縁部である。202は土師器鉢である。203は上師器片で、大形壺の頸部と考えられる。

Ⅲ区SK02（第45図）

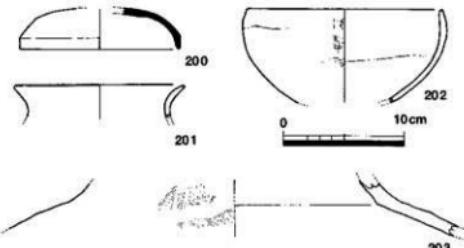
Ⅲ区中央部で確認した土坑である。検出した標高は6.82m前後を測る。平面の形状は0.1～0.2mの梢円形であり、深度は0.1～0.15mを測る。西半分をSD01に埋される。

出土遺物（第68図）は1点のみで、206は須恵器底部である。

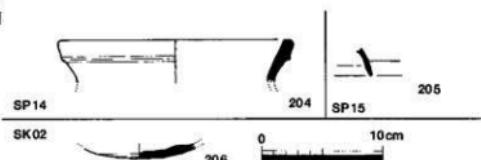
Ⅲ区SP14・SP15（第45図）

Ⅲ区中央部で確認したピットである。検出した標高は6.73m前後を測り、底面は6.5m前後である。

出土遺物（第68図）のうち、204は須恵器甕である。205は須恵器蓋である。



第67図 Ⅲ区 SP02 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)



第68図 Ⅲ区 SK02, SP14・15 出土遺物実測図
(縮尺 1/4)

c. まとめ

当調査地はⅡ・Ⅲ区間に現況の林町と木太町との境となるが、弥生時代から近世に至る遺構・遺物を確認し、林下所遺跡が調査地の北東部を中心に広がることが想定される。調査対象となった範囲は、遺構のごく一部であると考えられることから不明な点を残すが、現状で以下の様な変遷が考えられる。

【弥生時代前期】

微高地であったと考えられるⅡ区中央部で、墓の可能性があるSK02が確認された。遺構はこれのみだが、Ⅰ区の遺構外の出土遺物に当該期に推定されるものが認められる。南部で調査された林下所遺跡に当該期の遺構が散見され、当地まで遺構の散在する状況が想定される。

【弥生時代後期】

微高地であったと考えられるⅠ・Ⅱ区で、井戸状の遺構Ⅰ区SK03及び土坑Ⅱ区SK02の他、Ⅰ区の出土遺物（大畦畔）に当該期のものがまとまって認められ、集落が所在した可能性が考えられる。

【古墳時代後期～終末期】

当調査地の主要となる遺構群である。Ⅱ区及びⅢ区で確認した掘立柱建物を中心に、小規模な溝状遺構が認められる。また、東西方向に一定規模を有する溝が、Ⅰ区(SD01)及びⅢ区(SD05他)で認められる。この東西方向の溝（Ⅰ区SD01 SD06）及びⅢ区SB01は、現況の地割りとほぼ同様の方向性をもち、一方で建物を巡る小規模な溝の方向とは異なり特徴的にみられる。調査した範囲では、堅穴住居ではなく掘立柱建物が中心の集落である可能性が想定される。また、当集落の特徴として鍛冶を行っていた可能性が挙げられる。特にⅢ区では遺構面に多くの鉄分の沈着を認め、周辺部に鍛冶に伴う遺構の所在が推察される。出土遺物を概観すると7世紀前葉までのもので占められ、これ以降に想定されるものは調査地全体でも少量となることから、古墳時代終末期に廃絶した集落と考えられる。

【古代～近世期】

条里地制と合致するⅠ区大畦畔及びⅢ区SD01が認められる。両遺構は位置関係及びⅠ区SD02の存在から、並存する可能性も想定される。明確な所属時期を示す出土遺物はないが、前段階の遺構に後出すること及び近世の遺構・堆積層に先行することから当期となる。水田と考えられる小区画の畦畔については、立地条件がやや異なるが当地より南西約1kmに所在する浴・長池遺跡ではほぼ同規模のものが、古代～中世段階で確認されている。

No.16 林町65号線（平成15年度確認調査）

1 調査概要

- a. 場 所 林町
- b. 期 間 平成15年5月27日・28日
- c. 面 積 約73m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容（第69図）

当路線は林下所遺跡として平成11年度に調査を実地した同路線の南区間であり、同遺跡に近接するため確認調査を行った。南北の区間がほぼ新設となるもので、東西の区間にについては既存の道路を約2m拡幅するものである。

確認調査は、隣接する地権者の承諾を得られた箇所を中心に第1～5トレンチを設定した。第1トレンチでは、ほぼ表土直下で地山と考えられる黄色シルト質粘土層となり、近世の土坑を数基確認した他、須恵器が若干出土した。第1トレンチの南端部から第2・3トレンチで、砂質土及び砂層が厚く堆積し認められた。北東方向の埋没流路が存在するものと考えられるが、遺物が皆無であったため所属時期は不明である。第4トレンチでは再び微高地となり、表土の直下で地山が確認された。遺物が皆無であり、近世・近代と考えられる耕作跡が確認されたのみであった。第5トレンチでは地山上に黒褐色土が数十cm程認められ、湿地状の環境であったと推定される。遺構・遺物は皆無であった。

以上の結果から当路線区間については遺構・遺物が希薄な状況が考えられ、事前の保護措置は不要であると判断した。



写真5 第1トレンチ



写真6 第3トレンチ

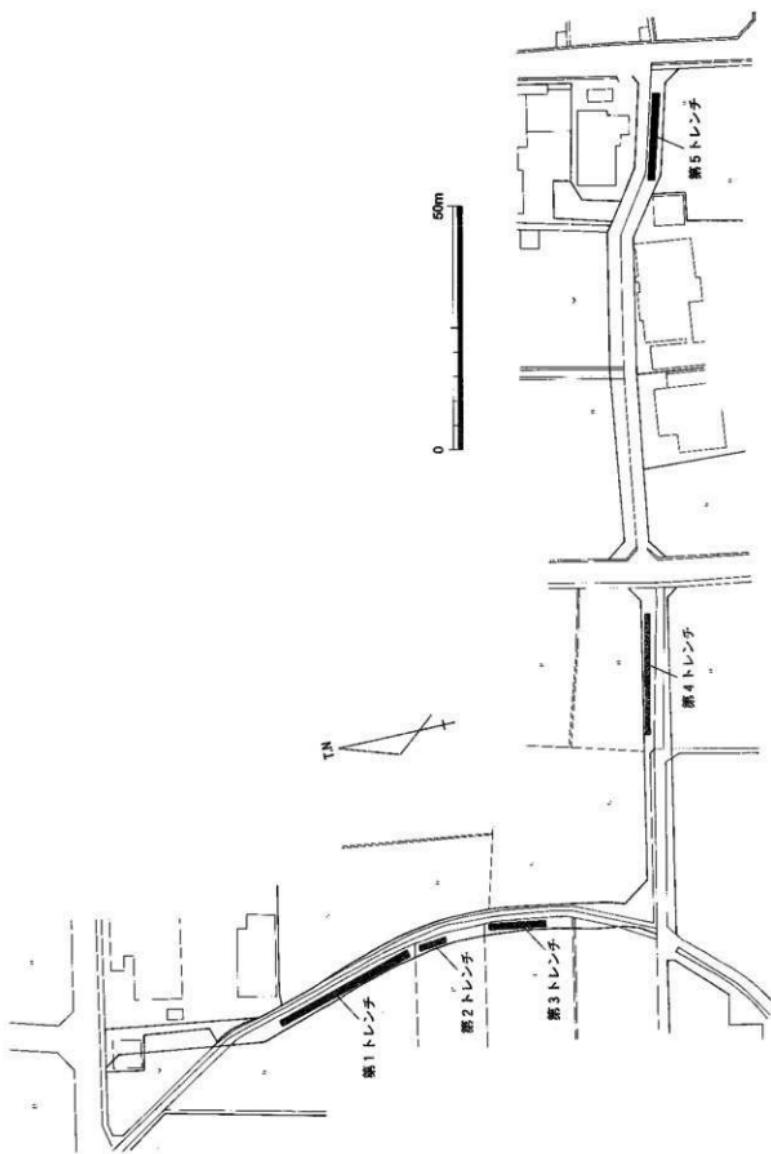


写真7 第4トレンチ



写真8 第5トレンチ

第69図 林町65号線平成15年度トレンチ配図図（縮尺 1/1000）



No.17 林下所・六条乾遺跡（林町70号線 平成14年度調査）

1 調査概要

- a. 場 所 林町・六条町
- b. 期 間 平成15年1月8日～22日
- c. 面 積 約80m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容

調査内容

a. 調査の経緯（第70図）

当路線は、既に埋蔵文化財包蔵地となっていた林下所遺跡に近接し、新規工事部分を含むことから確認調査を行った。路線工事は北区間が新規工事部分で、南区間が既存道路を2m拡幅するものであった。トレンチ調査の結果、北区間ににおいては遺構・遺物とも希薄であったが、拡幅工事部分となる南区間の南半部で平安時代の遺構・遺物を確認したことから、調査を実施することになった。

b. 遺構の概要（第71図）

調査地は、現有のコンクリート畦畔等により南（I区）・北（II区）に分割された。確認された遺構は南北方向の溝SD01で、幅2mとなる南北の調査区に亘って検出された。

c. 基本上層

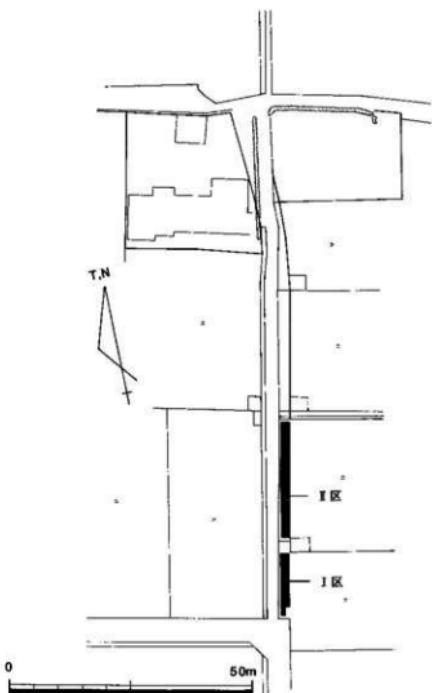
現況はI・II区を分割する畦畔を境に、地表面が0.3～0.4mの段差が付き、北側が低くなっている。北のII区では、現耕作土のほぼ直下で地山となる黄色粘質土が認められるが、南のII区では地山の上部に灰褐色土が0.2m程堆積する。I・II区とも遺構確認は、この黄色粘質土の上面で行っている。

d. 遺構・遺物

SD01（第71図）

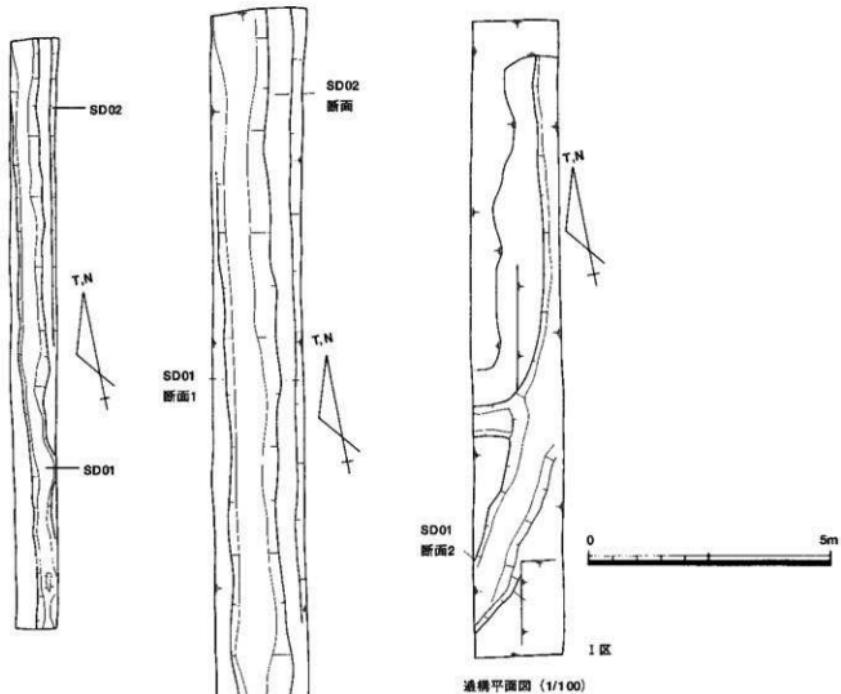
現有的道路に併走し、確認した南北方向の溝である。検出した標高はI区で7.17～7.4m、II区で7.10～7.19mを測り、底面は6.80～7.07mで緩やかに北へ下がる。検出距離は総延長で約37mを割り、検出幅は1.0～1.3mである。方位は現況の道路に平行するN=9°～E前後を示すが、I区南半部で西方向に大きく湾曲する。この湾曲部付近では溝の上位に砂層が広範囲で被覆している状況が認められ、また西方向に伸びる幅0.6m程の支流部が検出されている。断面の形状は、全区間に亘り内壁は急傾斜で、東壁は段を伴いながら緩やかに立ち上がる壁面となっている。底面では中央が陥没凹形だが、II区南部ではW形となる箇所が認められる。埋土は概ね上位に灰白色砂及び褐灰色シルトが堆積し、下位に褐灰色砂混りシルトが鉄分の沈着を伴い認められる。所属時期は出土遺物より平安時代後半と考えられる。

出土遺物（第72図）を報告するが、土器の形式・年代観については佐藤編年（佐藤 1995・2000）を参考とした。207は四基式石鏡である。208～213は土師器杯・皿である。208・209は体部の外傾度及び法量より皿B I型式に相当するものと考えられる。210は底部ヘラ切りである。211・212の杯は体部が大きく開き、口縁部も長く外反する。211は上底の平坦な底部で皿A型式に相当する。213は底底部。器壁がやや厚く、体部の開きがやや小さいことから皿Cに該当する可能性が考えられる。214は黒色土器柄で、ほぼ完形で出土した。両面黒色で、径高指數41、高台高0.7cm、同徑6.3cmを測り皿A II - 3型式に該当する。215は須恵器壺の口縁部である。「ハ」の字形に開き、端部はやや外方向に摘み出す。皿B I型式に相当する。216は

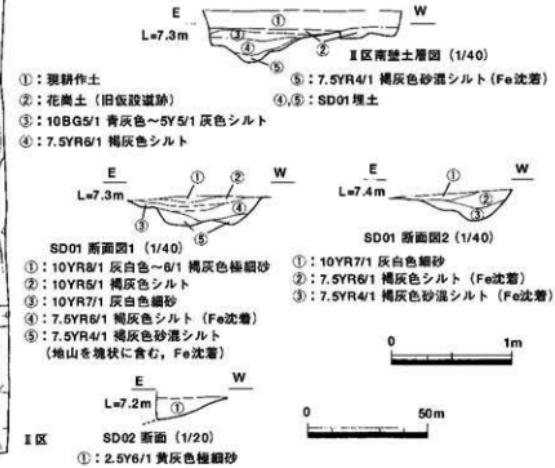
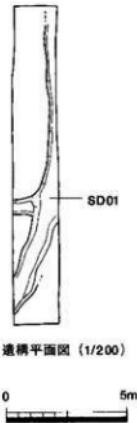


第70図 林下所・六条乾遺跡（林町70号線）

調査位置図（縮尺1/1000）

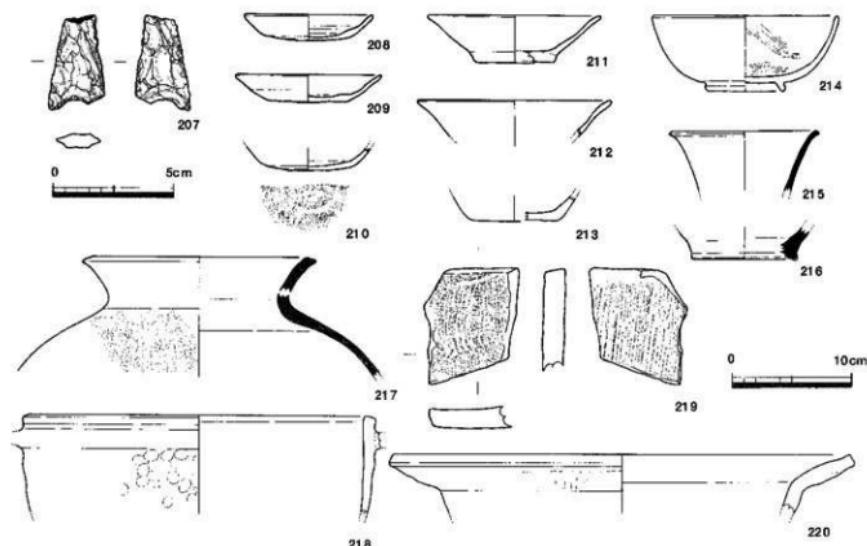


遺構平面図 (1/100)



第71図 遺構平・断面図

高台をもつ須恵器底部。217は須恵器壺である。体部に格子目状の叩き痕を有し、口縁端部を短く搔き出した凹面をもつ。壺C-2型式に相当する。218は土師器羽釜である。鉤が欠損するが口縁部の形態より羽釜C-I型式に該当する。219は平瓦。凹面に布目痕、凸面に繩叩き痕を残す。220は土師器壺ないし鍋である。口縁端部の特徴から壺E-II-1型式に相当すると考えられる。以上より、一部須恵器等に古相のものが存在するが概ねI-3期(12世紀前半)までの時期が考えられる。



第72図 SD01 出土遺物実測図 (縮尺1/4)

SD02(第71図)

II区北部、東端部で確認した溝状遺構である。大半が調査地外に存在するため、詳細は不明である。検出した標高は7.14mを測り、SD01とほぼ併走する方位で検出された。埋土には黄灰色土が認められている。遺物が出土せず、所属時期は不明である。

e. まとめ

当調査地は現況では六条・林町の町境にあたり、推定条里では山山郡12里での6・7条界線上に相当する。この境界がSD01の確認により、平安時代後半期には存在していたと考えられる。またSD01(或は枝部)は、南部で大きく屈曲し西に向かう様に認められ、なお且つ溝壁面が西側で急となる状況から、西部を中心とする該期の遺構が所在する可能性が想定される。

No.18 六条町36号線（平成10年度確認調査）

1 調査概要

- a. 場 所 六条町
- b. 期 間 平成10年10月20日～22日
- c. 面 積 約65m²
- d. 担当者 小川賢

2 調査内容

当路線は弥生時代～近世期に至る六条・上所遺跡に北接し、また、ほぼ新規の工事であることから確認調査を行った。

第1～3トレンチの3箇所を設定した。南部の第1トレンチでは、地山と考えられる黄褐色系粘質土の上部に黒褐色土の堆積が数十cm程認められた。地山は北方向に落ち込んでいき、第2・3トレンチでは砂層が厚く堆積して認められた。いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は皆無であった。

以上のような結果から、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



写真9 第2トレンチ土層堆積状況

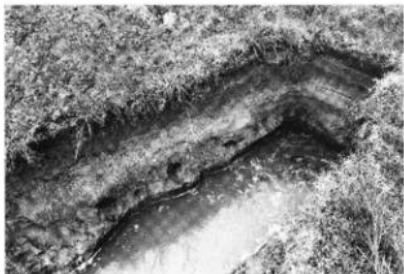
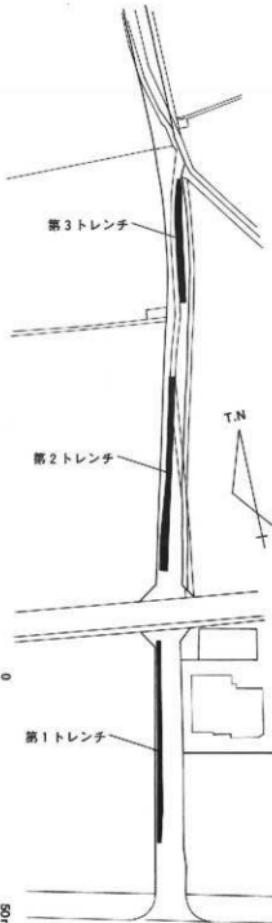


写真10 第3トレンチ土層堆積状況



第73図 六条町36号線トレンチ配置図
(縮尺1/1000)

No.19 六条上川西遺跡（六条町38号線 平成12年度調査）

1 調査概要

- a. 場 所 六条町
- b. 期 間 平成12年10月24日～31日
- c. 面 積 約158m²
- d. 担当者 小川賢・中西克也

2 調査内容（第74・75図）

当路線は弥生時代～近世に至る六条・上所遺跡に南接し、また工事の延長距離が長いことから確認調査を行った。路線南端部は既存の道路となっているが、その他は耕作地であり南北の用水路に沿って第1～5トレンチを設定した。

第1トレンチでは、地表の約60cm下で褐色砂質シルト層の堆積が40cm程度認められ、以下砂礫層となっていた。遺構検出はこの砂礫層上面で行い土坑状の遺構を1基確認した。遺物は出土せず時期は不明である。第2トレンチでは、地表の約80cm下で旧河道の堆積物とみられる黒褐色粘質土及び褐灰色砂質土層が認められた。下位の砂礫層まで合せて約50cmの堆積であったが、遺構・遺物は認められなかった。第3トレンチでは、黒褐色粘質土堆積が60cm程に増し旧河道の最深部付近と推定される。若干量の弥生土器・サヌカイト片等が認められた。第4トレンチは微高地と想定され、地表の約70cm下で安定した黄色シルト層上面で弥生時代を中心とした遺構・遺物が確認できた。第5トレンチでは、再度、黒褐色粘質土が認められるようになり、南部にも低地ないし旧河道の存在が想定される。遺構・遺物は認められなかった。

以上の結果から、第4トレンチで認められた遺構について工事範囲内で確認範囲を広げ調査を行い、当機会で記録保存を行い、他の範囲については事前の保護措置は不要と判断した。



写真11 第1トレンチ東壁土層堆積状況



写真12 第2トレンチ東壁土層堆積状況



写真13 第3トレンチ東壁土層堆積状況

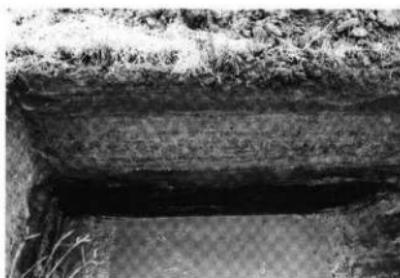
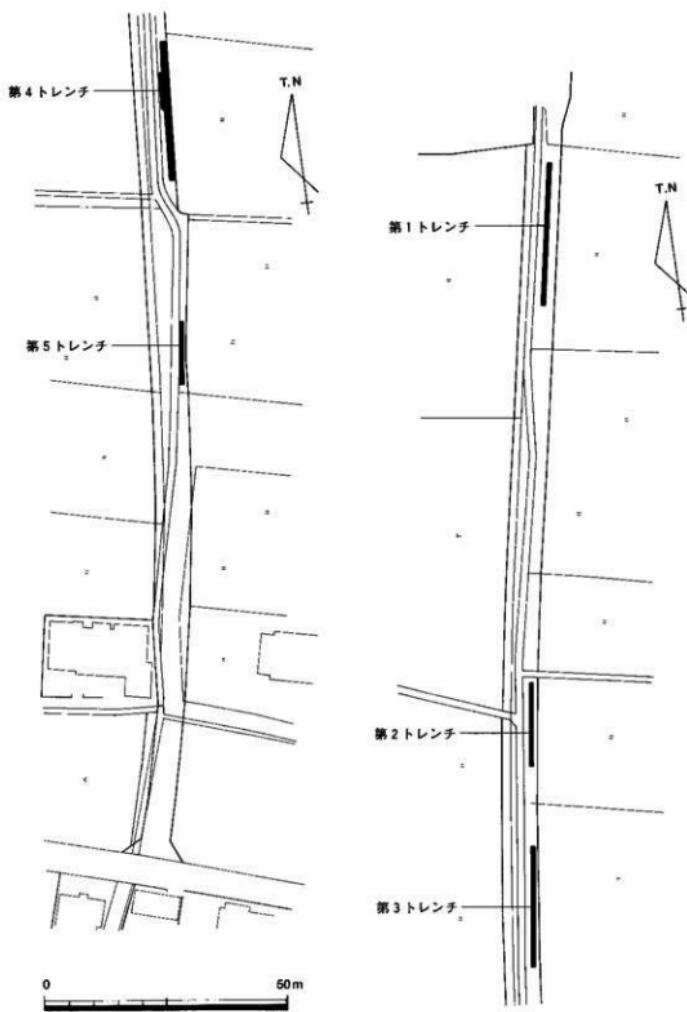
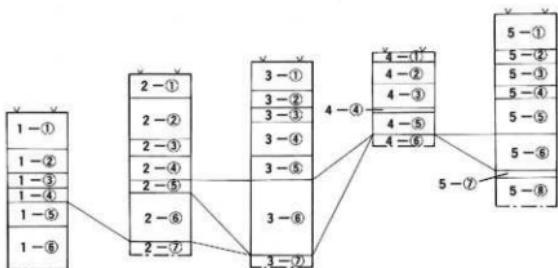


写真14 第5トレンチ東壁土層堆積状況

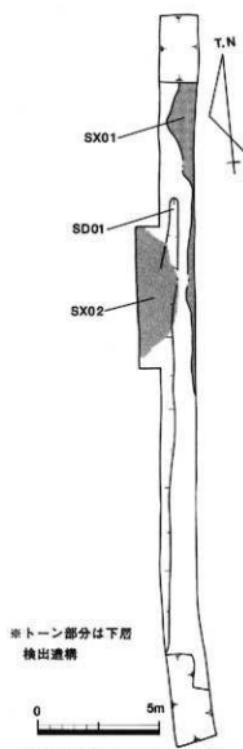


第74図 六条上川西遺跡（六条町36号線 平成12年度）トレンチ配置図（縮尺1/1000）



六条町38号線トレンチ東壁柱状土層図 (1/40)

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1-① : 現耕作土 | 4-① : 現耕作土 |
| 1-② : 黄灰色シルト質極細砂 | 4-② : 黄灰色シルト質極細砂 |
| 1-③ : 黒褐色粘土 | 4-③ : 灰褐色砂混シルト |
| 1-④ : 暗褐色砂質シルト | 4-④ : 黄褐色砂 |
| 1-⑤ : 砂礫 | 4-⑤ : 灰色砂 |
| 1-⑥ : 灰色砂 | 4-⑥ : 黄色シルト |
| 2-① : 現耕作土 | 5-① : 現耕作土 |
| 2-② : 黄灰色シルト質極細砂 | 5-② : にぼい黄灰色シルト質極細砂 |
| 2-③ : 灰褐色シルト | 5-③ : 暗灰黄褐色砂混シルト質極細砂 |
| 2-④ : 黄色シルト質粘土 | 5-④ : 灰黄色微砂 |
| 2-⑤ : 黑褐色シルト質粘土 | 5-⑤ : 灰色砂 |
| 2-⑥ : 黑褐色砂質シルト | 5-⑥ : 黑褐色粘土 |
| 2-⑦ : 灰色砂礫 | 5-⑦ : 灰黄色シルト |
| 3-① : 現耕作土 | 5-⑧ : 灰黄色砂礫 |
| 3-② : 灰綠色シルト質極細砂 | |
| 3-③ : 黄灰色シルト質極細砂 | |
| 3-④ : 黄褐色砂混シルト | |
| 3-⑤ : 暗褐色砂質シルト | |
| 3-⑥ : 黑褐色シルト質粘土 | |
| 3-⑦ : 灰色砂礫 | |



第4トレンチ構造配置図 (1/200)

第75図 六条町38号線トレンチ土層図・配置図

第4トレンチ構造・遺物

SD01 (第75図)

現有の水路に沿って確認した溝である。以北のトレンチにおいても部分的に認められていたが、当トレンチで溝として検出された。検出した標高は7.65m前後で、検出幅は約15cm、深度は5cm程度であった。坪界線上に位置する溝と考えられるが、現有水路と重複するため遺存状況は悪い。出土遺物より中世のものと考えられる。

出土遺物（第77図）のうち、233は備前大堺の口縁部である。玉縁状口縁で、端面に稜は見られない。14世紀後半～15世紀代の時期が考えられる。

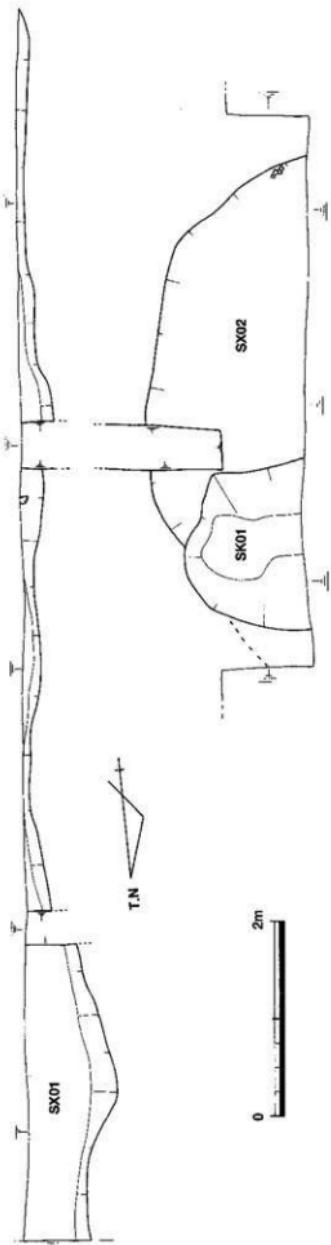
SX01 (第76図)

調査地の東壁に沿って確認した溝である。大半が調査地外に広がるものと考えられ、全容は不明である。検出した標高は7.53～7.65mを測り、底面は7.48m前後を測る。検出長は約12.5mで、検出幅は最大で約0.9mである。断面は船底形と考えられ、埋土は黒褐色土である。出土遺物より弥生時代のものと考えられる。

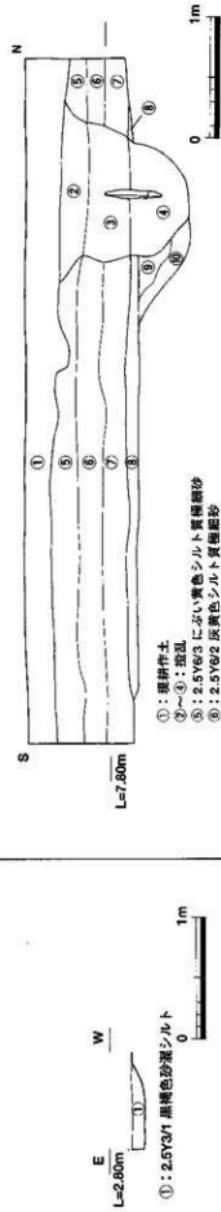
出土遺物（第77図）のうち、227は弥生上器壺底部である。胎土中に砂粒を多量に含み、弥生時代前期のものと考えられる。

SX02 (第76図)

調査地の西半で確認した溝である。径約5mの円形状に検出し、豊穴住居跡の可能性が想定されたため、



SX01・SX02 平面図 (1/50)



第4 トレンチ下層検出遺物・断面図 (1/40)

第76図 第4 トレンチ下層検出遺物・断面図

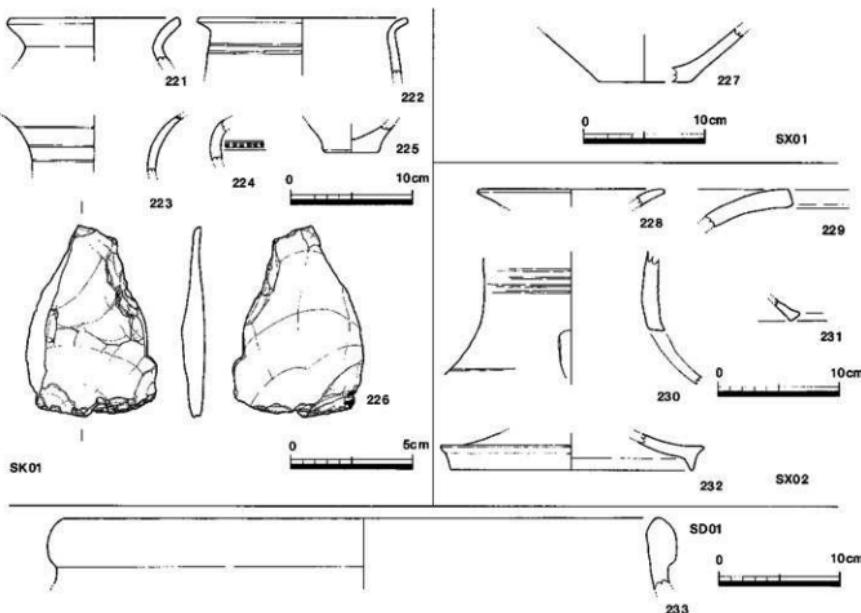
トレンチを工事範囲内で拡張し確認を行った。検出した標高は7.61～7.69mを測り、底面は7.53mで前後を測る。埋土は黒褐色粘質上層の單層である。西側は現有水路の擾乱のため遺存状態は悪く、また柱穴も認められないことから当遺構の性格は不明である。所属時期は出土遺物より、弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（第77図）のうち、228は短く「ハ」字形に開き壺口縁部である。229は大きく外反する広口壺の口縁部である。228・229は胎上に特徴からも前期のものと考えられ、SK01からの混入した可能性が考えられる。230は器台の筒部で、裾部へ「ハ」字形に開き方形のスカシ及び凹線が施される。231・232は脚部である。232は柄端部を上下に拡張する。

SK01 (第77図)

調査地の西半、SX02の底面で確認した土坑である。検出した標高は7.47～7.62mを測り、底面は7.15m前後を測る。検出長は東西に約1.25m、南北に約1.75mを測る。西側に広がるが擾乱の影響が大きく、やや不整形な方形状に検出された。所属時期は、出土遺物から概ね弥生時代前期と考えられる。

出土遺物（第77図）のうち、221は壺で、太い頸部より強く屈曲する。222の壺は、口縁部が如意状で、体部上半に2条の沈線文が施される。胎上には角閃石が認められる。223は壺の頸部である。3条の沈線文が認められる。224は壺頸部で、2条の沈線間に竹管文を施す。226はサヌカイト片である。



第77図 SK01・SX01・02・SD01 出土遺物実測図（縮尺：土器1/4, 石器：1/2）

e. まとめ

確認調査により、北部及び南部に旧河道と考えられる堆積が認められた。当地の東には古川・春日川が併走して流れおり、当河川に注ぐ埋没流路の存在が想定される。この流路に面し、第4トレンチの微高地では弥生時代を中心とした遺構・遺物が確認できた。微高地での調査範囲が狭小であったため詳細は不明だが、南西部を中心に微高地が広がるものと想定され、当該期の遺構が所在する可能性が考えられる。

No.20 六条町38号線（平成13年度確認調査）

1 調査概要

- a. 場所 六条町
- b. 期間 平成13年10月12日～15日
- c. 面積 約110m²
- d. 担当者 小川賛

2 調査内容

当路線は周辺部に林下所遺跡、六条・上所遺跡が所在し、また新規となる工事区間が長いため確認調査を行った。確認調査では、8箇所のトレンチを設定した。何れのトレンチでも表土直下で地山と考えられる黄色粘土層に達し、その上面で遺構の確認を行なった。その結果、第1・2・5トレンチで南北方向の溝を検出した。第5トレンチの溝は、一定の規模をもつが遺物は出土しなかった。東部では近・現代の擾乱が多く、遺構確認は困難であった。結果、溝が数箇所において認められたが、トレンチ全体でも遺物が皆無であり時期不明であった。全体に削平を受けた可能性が高く、工事範囲についても同様の結果が想定されたため、工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

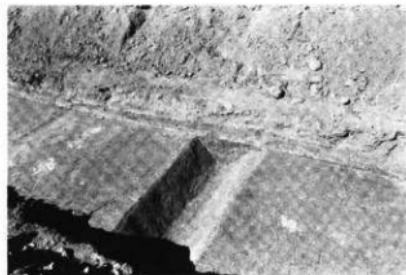
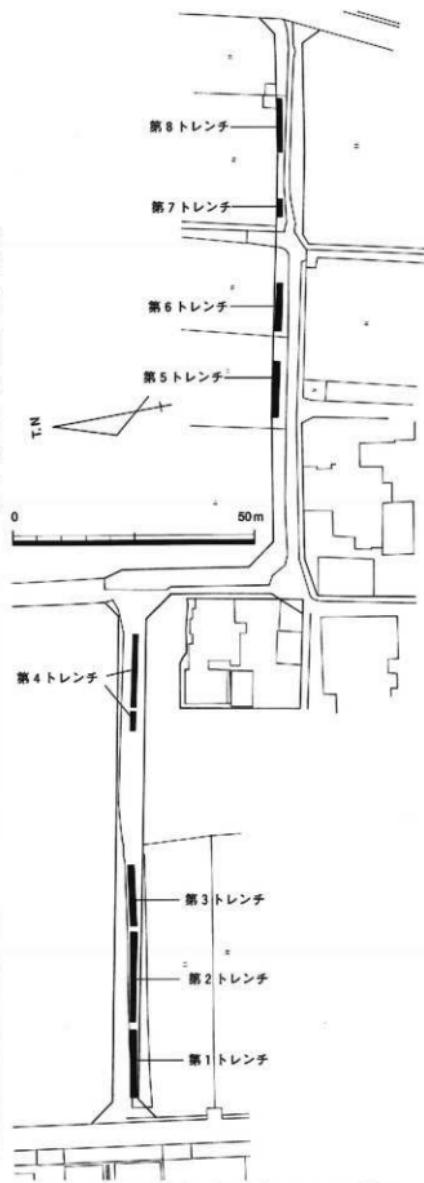


写真15 第2トレンチ溝跡



写真16 第5トレンチ溝跡



第78図 六条町36号線平成13年度トレンチ配置図
(縮尺1/1000)

No.21 六条西村遺跡（林町23号線 平成15年度調査）

1 調査概要

- a. 場所 六条町
- b. 期間 平成15年7月22日～31日
- c. 面積 約100m²
- d. 担当者 小川賢・末光甲正

2 調査内容

a. 調査の経緯（第79図）

当路線の周辺部には、林・坊城遺跡及び六条・上所遺跡が所在しており、路線の東西区間については、ほぼ新規の道路工事であることから遺構確認を行った。トレーナーは路線の西半分に第1トレーナー、東部に第2トレーナーを設定し調査を行った。第1トレーナーでは、近世の土坑及び溝を確認した他、トレーナーの東端部で埋没流路と考えられる砂層及び黒色土の厚い堆積層が認められた。当流路の堆積中から遺物は出土しなかった。当埋没流路の東部は、砾層・黃色粘質土が上昇し微高地となっていた。この微高地上となる第2トレーナーでは、一定規模を有する溝が多数認められた。

この結果から、近世の遺構・遺物のみ確認した第1トレーナーについては事前の保護措置を不要と判断し、遺構密度の高い第2トレーナーを調査の対象とした。なお当路線の工事予定地に接し、塚（猫塚）の伝承のあるマウンドが位置し、現状で約1mの範囲において僅かな高まりが認められた。地権者及び高速交通対策室との協議により、猫塚を現状で保存することとなった。

b. 遺構の概要（第80図）

南北方向の溝が20m足らずの範囲において、7条(SD01～07)確認している。黒褐色の埋土で、明瞭な掘り方をもつものが多い。東西方向では、現況の地割りとほぼ合致する溝(SD08)の他、柵列状遺構(SA01)が認められた。また現況の農道には接する調査地の南壁に沿い、近世の土坑及び小規模な溝が認められた。

c. 基本上層

現況の耕作土が20～30cm程度認められ、その下位に近世期の堆積層と考えられる淡黄色シルト質極細砂層が10cm程度堆積し、この直下で地山と想定される黄色系粘土層が認められた。遺構検出はこの上面で行った。

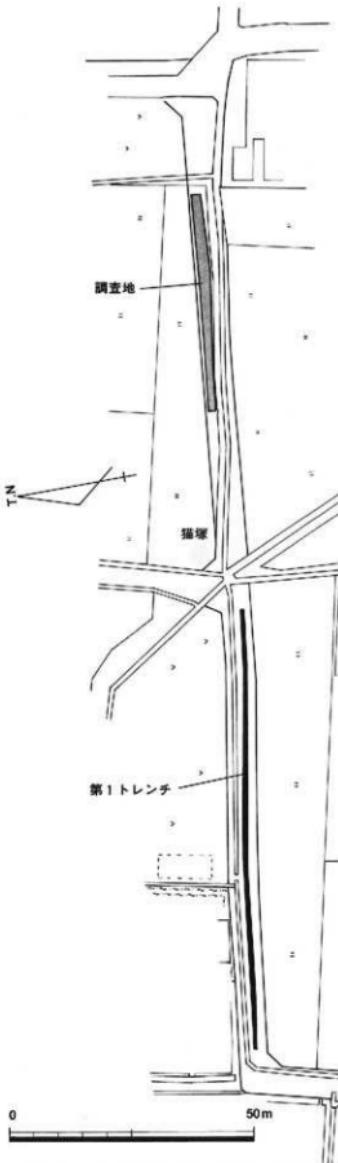
d. 遺構・遺物

SA01（第80・81図）

調査地南部で確認した柵列である。柱間距離は0.9mと1.2m前後のものに大別される。検出した標高は10.22～10.3mを測る。主軸はN-104°-E前後を示す。各柱穴は15cm前後の円形状に検出され、深度は10～30cmを測る。出土遺物がなく時期不明だが、現況の地割及びSD08に主軸が近似し、古代～近世と想定される。

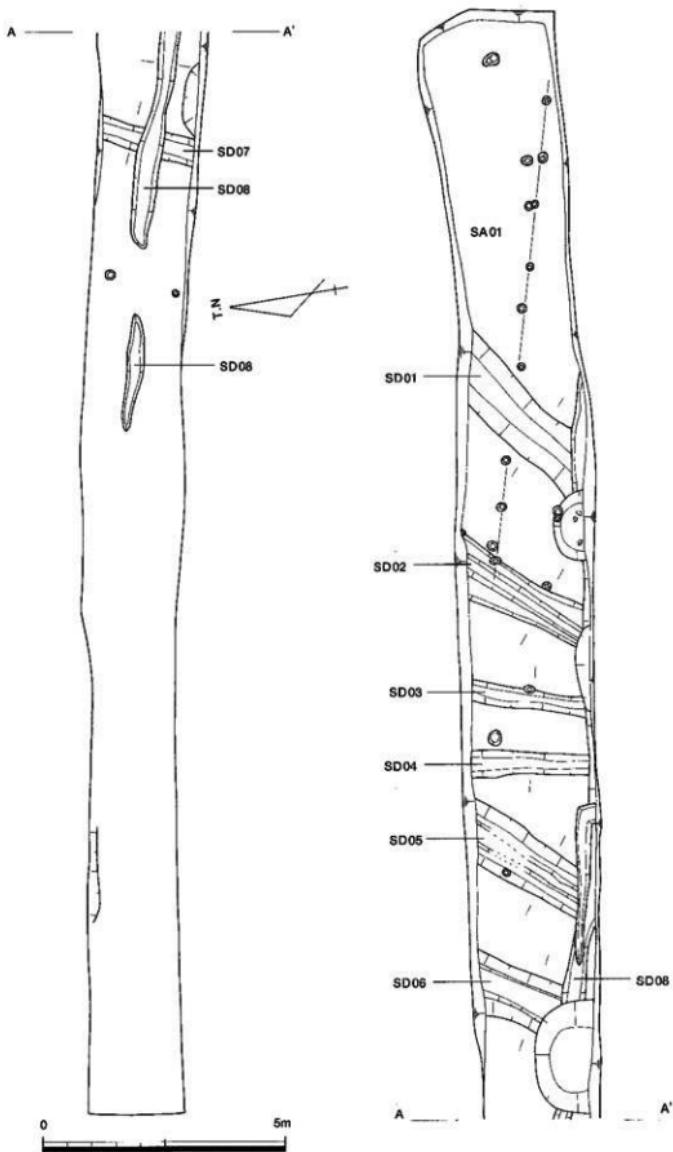
SD01（第80・81図）

調査地の東端部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後、底面は9.88m前後を測る。検出長は約2.8mで、検出幅約1.2mを測る。北東に伸び、N-50°-E前後の方方位を示す。南端部でSD08に切られる。断面の形状はU字形を重ねた形となっている。埋土は上層に灰黄褐色砂質シルト、中層に粘性のある黒

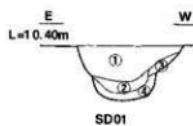


第79図 六条西村遺跡（林町23号線）

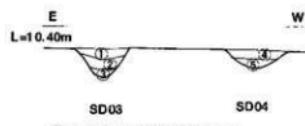
調査位置図（縮尺1/1000）



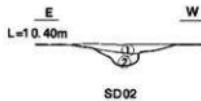
第80図 遺構平面図 (1/100)



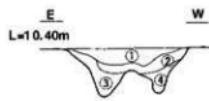
- SD01
- ① : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
 - ② : 10YR3/1 黑褐色砂質シルト（やや粘質）
 - ③ : 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
 - ④ : 10YR4/4 暗褐色シルト混砂
 - ⑤ : 2.5Y5/3 黄褐色シルト混細砂



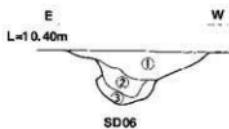
- SD03 SD04
- ① : 2.5Y6/2 灰黄褐色砂質シルト
 - ② : 2.5Y4/2 喀灰黄色砂質シルト（やや粗）
 - ③ : 2.5Y3/2 黑褐色砂質シルト（やや粘質）
 - ④ : 2.5Y5/2 喀灰黄色砂質シルト
 - ⑤ : 2.5Y5/3 黄褐色シルト混細砂



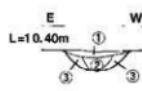
- SD02
- ① : 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
 - ② : 10YR4/2 灰黄褐色シルト混砂



- SD05
- ① : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
 - ② : 10YR3/2 黑褐色砂質シルト（やや密）
 - ③ : 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
 - ④ : 10YR4/4 暗褐色砂質シルト



- SD06
- ① : 10YR3/2 黑褐色砂質シルト（繊維じり）
 - ② : 10YR3/4 喀褐色砂質シルト（やや粗）
 - ③ : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（やや粗）



- SD07
- ① : 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
 - ② : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（やや密）
 - ③ : 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト



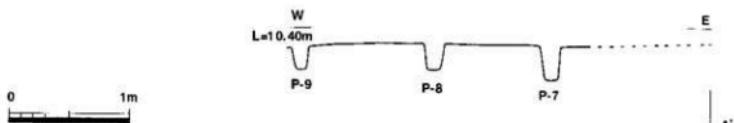
- SD08
- ① : 2.5Y6/2 灰黄褐色砂質シルト（やや密、円錐を含む）

0 1m



A'

A



A'

第81図 遺構断面図（縮尺1/40）

褐色砂質シルト、下層に砂質土が堆積している。所属時期を示す出土遺物はないが、SD08との前後関係及び埋土の特徴から弥生時代～古墳時代と推定される。

SD02 (第80・81図)

調査地の東部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後、底面は10.07～10.11mを測り緩やかに北東へ下がる。検出長は約2.8mで、検出幅0.8～1.2mを測る。N-42°-E前後の方位を示す。南端部でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状は壁面の中位に段が付き、上部は緩やかに立ち上がる。埋土は中位の段部を境に2層に分層された。明瞭な時期を示す遺物はないが、SD08との前後関係及び埋土の特徴から古墳時代を中心と推定される。

山上遺物（第82図）のうち、234は鉄製品である。鋸が著しく、器種は不明である。

SD03 (第80・81図)

調査地の東半部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後、底面は10.05m前後を測る。検出長は約2.3mで、検出幅0.4～0.5mを測る。N-18°-E前後の方位を示す。南端でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状はU字形で、埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが、SD08との前後関係及び埋土の特徴から古墳時代～古代と推定される。

SD04 (第80・81図)

調査地の東半部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後、底面は10.12m前後を測る。検出長は約2.4mで、検出幅0.5～0.6mを測る。N-8°-E前後の方位を示す。南端でSD08に切られる。断面の形状は船底形で、埋土は2層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが、SD08との前後関係及びこれにはば直交する位置関係より古代頃と推定される。

SD05 (第80・81図)

調査地中央で確認した溝である。検出した標高は10.27m前後、底面は9.87m前後を測る。検出長は約2.4mで、検出幅1.0～1.2mを測る。N-41°-E前後の方位を示す。南端部で近世期の溝状遺構に切られる。断面の形状はW形をし、埋土は上層に灰黄褐色砂質シルト、中層に黒褐色砂質シルト、下層に砂質土が堆積している。時期を示す出土遺物はないが、規模及び方向性等でSD01と共に、同時期頃のものと考えられる。

SD06 (第80・81図)

調査地中央部で確認した溝である。検出した標高は10.27m前後、底面は9.83m前後を測る。検出長は約1.6mで、検出幅約1.2mを測る。N-35°-E前後の方位を示す。南端部でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状は、中位に段が付き、西面の壁面が抉れる。埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが、規模及び方向性等でSD01と共に、同時期頃のものと考えられる。

SD07 (第80・81図)

調査地中央部で確認した溝である。検出した標高は10.31m前後、底面は10.15m前後を測る。検出長は約2.0mで、検出幅約0.5mを測る。N-23°-E前後の方位を示す。SD08に切られる。断面の形状は船底形で、埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが、規模及び方向性等でSD03・SD04に共通し、同時期頃のものと考えられる。

SD08 (第80・81図)

調査地東西に横断した形で、確認した溝である。検出した標高は10.25～10.32mで、底面は10.13～10.25mを測り東へ下がる。検出長は約20mだが、断続し西方向に伸びる。検出幅約0.4～0.5mを測る。やや蛇行気味だが、概ねN-102°-E前後の方位を示す。断面の形状は船底形で、埋土は灰青色土の単層である。出土遺物より古代のものと考えられる。

出土遺物（第80・81図）は1点のみであった。235は須恵器底部である。高台内及び高台脇に線刻が認められる。

e. まとめ

調査地の東半分で、南北方向の溝が多数確認された。出土遺物は希薄であったが、規模及び方向より各期に開削されているものと考えられる。北に近接する六条・上所遺跡では、弥生時代後期～古墳時代にかけて同方向を示す溝が多数確認されており、当地で確認された溝群はこの上流に相当する可能性が考えられる。

高速交通出土遺物観察表

参考景の()は既存を表す。

| 器種 番号 | 器種 名 | 目録 番号 | 基体 形状 | 形態 | 色調 | 胎土 | 参考景の()は既存を表す。 | |
|----------|------------|-------------|--------------|---------------------------------------|------------------------------------|----|--|-----|
| | | | | | | | 外表面 | 内表面 |
| 1 | 南西器 座 | 30.6 | (10.6) | 外側:立輪ナマ、ハゲタ 内側:指輪さき後凹むナマ | 外側:灰白SV8/1 内側:灰白SV5/~灰 | 灰 | 外表面:自然縫付裏 内表面:自然縫付裏 | |
| 2 | 不織 | (英3) 2.3 | (0.6) 0.3 | | | | 重さ:0.6g 白色墨化サスモード | |
| 3 | 南西器 座 | 12.8 | 6.8 | 外側:立輪ナマ、凹輪ナマ、底輪、凹輪へ斜切 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV8/1 内側:灰白SV5/~灰 | 灰 | | |
| 4 | 南西器 座 | 12.4 | 7.6 | 外側:立輪ナマ、凹輪ナマ、底輪、凹輪へ斜切 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV8/ 内側:灰白SV5/~灰 | 灰 | やや密 | |
| 5 | 南西器 杯 | 6.8 | (2.6) | 外側:立輪ナマ、底輪、板ナマ 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV8/1 内側:灰白SV8/1 | 灰 | | |
| 6 | 南西器 杯 | 12.6 | 6.8 | 外底:立輪へ本筋、凹輪ナマ、底輪、凹輪へ斜切 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV7/ 内側:灰白SV7/ | 灰 | | |
| 7 | 巴土器 座 | 6.6 | (1.3) | 外側:ナマ 内側:ナマ | 外側:灰白SV8/1 内側:灰白SV8/1 | 灰 | Temp以下の心灰・灰 外表面:自然縫付裏 内表面:自然縫付裏 | |
| 8 | 巴土器 座 | 25.0 | (16.0) | 外底:立輪ナマ、凹輪ナマ、底輪、平行タカキ 内側:立輪ナマ、凹輪ナマ | 外側:灰白SV8/ 内側:灰白SV8/ | 灰 | | |
| 9 | 土師器 座 | 22.4 | (4.0) | 外側:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV7/1 内側:灰白SV7/2 | 灰 | Lima以下の石英・灰 石墨を含む | |
| 10 | 土師器 座 | 26.0 | (4.3) | 外側:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV7/2 内側:灰白SV7/1 | 灰 | 2mm以下の石英・灰 石墨を含む | |
| 11 | 土師器 座 | 14.5 | (1.5) | 外側:立輪ナマ、開口部を 内側:立輪ナマ、開口部を | 外側:灰白SV7/1 内側:灰白SV7/1 | 灰 | 2mm以下の石英・灰 石墨を含む | |
| 12 | 灰白器 座 | 12.2 | (3.9) | 外側:立輪へラクズリ、凹輪ナマ 内側:立輪へラクズリ、凹輪ナマ | 外側:灰白SV8/ 内側:灰白SV8/ | 灰 | やや密 | |
| 13 | 須恵器 片舟 | | (3.2) | 外側:立輪ナマ、凹輪へラクズリ 内側:ナマ | 外側:灰白SV7/1 内側:灰白SV7/1 | 灰 | | |
| 14 | 須恵器 舟 | 9.0 | (2.1) | 外側:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 青灰SV8/1 内側:灰白SV7/1 | 灰 | | |
| 15 | 須恵器 舟 | 14.2 | (2.0) | 外側:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外側:灰白SV7/1 内側:灰白SV7/1 | 灰 | やや密 | |
| 16 | 須恵器 舟 | 9.1 | (1.6) | 外底:立輪・ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:灰白SV7/ | 灰 | | |
| 17 | 須恵器 舟 | 2.6 | (2.6) | 外底:立輪ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:灰白SV7/ | 灰 | | |
| 18 | 須恵器 舟 | 3.6 | (3.6) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:灰白SV7/ | 灰 | 外表面:自然縫付裏 | |
| 19 | 須恵器 舟 | 12.0 | (1.2) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:灰白SV7/ | 灰 | | |
| 20 | 須恵器 舟 | 14.0 | (17.0) | 外底:立輪へラクズリ 内側:立輪ナマ、開口部 | 外底:灰白SV8/1 内側:灰白SV8/1 | 灰 | 表面がふつててかけ自然縫付裏 裏:高麗に様な出 | |
| 21 | 須恵器 舟 | 29.6 | (5.8) | 外底:立輪へ立輪ナマ 内側:立輪ナマ、開口部 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 22 | 須恵器 舟 | 22.0 | (5.3) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 23 | 須恵器 舟 | | (7.7) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV8/1 内側:灰白SV8/1 | 灰 | | |
| 24 | 須恵器 舟 | 33.0 | (9.3) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 各面印彌跡:須恵器共通 底部:ハコ形体系による継ぎ足又 先端部化粧面 | |
| 25 | 土師器 座 | 15.2 | (6.9) | 外側:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/5YR6/3 内側:灰白SV7/5YR6/2 | 灰 | 1mm以下の石英・灰 内側:灰白SV7/5YR6/2 | |
| 26 | 土師器 座 | 14.8 | (2.6) | 外側:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 2mm以下の石英・灰 | |
| 27 | 土師器 座 | 18.4 | (1.5) | 外底:立輪ナマ、底輪へラクズリ 内側:厚壁のため小厚 | 外底:灰白SV7/5YR7/3 内側:灰白SV7/5YR7/2 | 灰 | 2mm以下の石英・灰 | |
| 28 | 黑色土器 舟 | 8.4 | (2.5) | 外底:ナマ 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:厚壁のため不規 | 灰 | 外底:灰白SV7/5YR6/2 | |
| 29 | 土師器 舟 | 13.2 | (3.4) | 外底:立輪・コヨミ 内側:立輪ナマ、底輪・ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 30 | 土師器 舟 | 18.0 | (4.3) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 2mm以下の石英・灰 | |
| 31 | 土師器 舟 | 25.0 | (3.0) | 外底:立輪ナマ、ヨコヨリ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/5YR7/4 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 | |
| 32 | 土師器 舟 | | (9.3) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/5YR7/4 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 33 | 土師器 舟 | 29.6 | (6.2) | 外底:ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 | |
| 34 | 土師器 舟 | 27.6 | (6.4) | 外底:立輪ナマ 内側:立輪ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 | |
| 35 | 土師器 舟 | 28.8 | (6.2) | 外底:ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | やや密 | |
| 36 | 土師器 舟 | 10.2 | (2.8) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/5YR7/3 内側:灰白SV7/5YR7/3 | 灰 | 1mm以下の石英・灰 内側:灰白SV7/5YR7/3 | |
| 37 | 土師器 舟 | 11.0 | (2.6) | 外底:ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | やや密 | |
| 38 | 土師器 舟 | 10.0 | (2.1) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 内側:立輪ナマ | |
| 39 | 土師器 舟 | 12.0 | (2.4) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 内側:立輪ナマ | |
| 40 | 土師器 舟 | 9.8 | (1.8) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | やや密 | |
| 41 | 土師器 舟 | 11.0 | (2.9) | 外底:ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | やや密 | |
| 42 | 土師器 舟 | 9.6 | (2.5) | 外底:ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 43 | 土師器 舟 | 11.0 | (2.5) | 外底:ナマ 内側:ナマ | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 | |
| 44 | 土師器 舟 | 10.4 | (1.7) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | | |
| 45 | 「新寶生」 舟 | 11.6 | (1.7) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 2mm以下の石英・灰 | |
| 46 | 土師器 舟 | 9.8 | (0.9) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 | |
| 47 | 土師器 舟 | 12.2 | (0.9) | 外底:厚壁のため小厚 内側:厚壁のため不規 | 外底:灰白SV7/ 内側:立輪ナマ | 灰 | 1mm以下の石英・灰 内側:立輪ナマ | |

| 報告 番号 | 種類 | 日付 | 供試 | 説明 | 調査 | | 色調 | 地土 | 備考 |
|----------|--------------------------|---------------|--------|-----------------------------------|--|------------------------------------|--------------------|------------------------|--------|
| | | | | | 外山 | 内山 | | | |
| 46 | 「耐震」 ¹ 砂 利 | 10.6 | (1.2) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不明 | 外面: 深赤 5YR 5/1 内面: 深白 12.5YR 1/1 | 赤 | 赤 | セメント | |
| 49 | 土師質上層 灰 | 13.0 | (1.5) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不明 | 外面: 深白 12.5YR 1/1 内面: 赤白 5YR 5/1 | 1mm以下の石英・長石 を含む | | | |
| 50 | 土師質上層 灰 | 9.8 | (1.8) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外面: 深白 12.5YR 1/1 内面: 深白 12.5YR 1/1 | 赤 | 赤 | | |
| 51 | 土師質上層 灰 | 14.2 | (2.0) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不明 | 外面: 深白 12.5YR 1/1 内面: 深白 12.5YR 1/1 | 赤 | 赤 | セメント | |
| 52 | 土師質上層 灰 | 5.2 | (1.3) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外面: 深白 10YR 8/2 内面: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 53 | 土師質上層 灰 | 13.0 | (2.9) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外面: 深黄褐色 5YR 6/3 内面: 深黄褐色 5YR 6/3 | 赤 | 赤 | | |
| 54 | 土師質上層 灰 | 5.6 | (2.0) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 55 | 土師質上層 灰 | 9.0 | (1.6) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深黄褐色 5YR 6/3 | 赤 | 赤 | | |
| 56 | 上層土質 灰 | 7.2 | (1.2) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不透明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 57 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 7.0 | (0.9) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 58 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 6.4 | (1.8) | 外山: 深白 12.5YR 1/2, ナゲ | 外山: 深黄褐色 5YR 6/3 内山: 深黄褐色 5YR 6/3 | 赤 | 赤 | セメント | |
| 59 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 20.6 | (1.0) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | 鉄筋打痕 | |
| 60 | 上層土質 灰 | 24.2 | (4.2) | 外山: 灰 内山: ハメ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 61 | 土師質上層 灰 | 22.2 | (4.4) | 外山: 深黄褐色 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 62 | 土師質上層 灰 | 30.8 | (2.3) | 外山: ナゲ 内山: ハメ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 63 | 上層土質 灰 | 5.0 | (1.0) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 64 | 土師質上層 灰 | 12.7 | (1.7) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 65 | 土師質上層 灰 | 1.7 | (1.7) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 66 | 土師質上層 灰 | 1.8 | (1.8) | 外山: 表面部分 内山: 深白 12.5YR 1/2, ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 67 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 8.8 | (1.1) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 68 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 6.6 | (0.1) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 69 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 1.7 | (0.5) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 70 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 4.9 | (4.9) | 外山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 71 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 7.8 | (1.0) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深黄褐色 5YR 6/3 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 72 | 重慶質上層 灰 | 11.8 | (2.6) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 73 | サヌキト片 (民5) | 5.0 | 3.7 | 9.7 | (6.0) (0.5) | | | | ±20.0g |
| 74 | 沙 | 7.3 | 4.4 | 3.0 | 外山: ナゲ 内山: ロゼンナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/1 | 緑灰岩 | | |
| 75 | 土師質上層 灰 | 6.2 | (2.3) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 赤 | 赤 | | |
| 76 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 8.4 | (1.5) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 77 | 土師質上層 灰 | 9.4 | (1.6) | 外山: 灰 内山: 回青・白タリ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 78 | 土師質上層 灰 | 8.2 | (1.7) | 外山: 灰 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 79 | 土師質上層 灰 | 9.6 | 5.0 | 1.8 | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 赤 | 赤 | |
| 80 | 土師質上層 灰 | 9.0 | 5.2 | 1.5 | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 81 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 9.5 | 5.4 | 1.7 | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 82 | 瓦 | (7.8) | (7.8) | (7.8) | 六面: ナゲ・タリタキ 山口: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 83 | 瓦 | (民5) (9.4) | (4.5) | (4.5) | 外山: 平打・タリタキ 山口: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 84 | 赤土 | 11.6 | (14.5) | (14.5) | 外山: 体積 内山: 体積 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | 山壁抹泥: 開み目又 は側面地・側面泥 | |
| 85 | 赤土 | 11.8 | (4.3) | (4.3) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不透明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 2mm以下の石英・長石 を含む | 外壁抹泥: 屋根 | |
| 86 | 赤土 | 11.8 | (3.3) | (3.3) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不透明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 3mm以下の石英・長石 を含む | 外壁抹泥: 屋根 | |
| 87 | 「耐震」 ¹ 灰 灰 | 12.0 | (1.3) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | | |
| 88 | 赤土 | 13.0 | (7.4) | (7.4) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 89 | 赤土 | 12.8 | (4.4) | (4.4) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不透明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 90 | 赤土 | 6.4 | (5.4) | (5.4) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 91 | 土師瓦 瓦 | (3.8) | (3.8) | (3.8) | 外山: 塗装のため不透明 内山: 塗装のため不透明 | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 92 | 土師瓦 瓦 | (2.2) | (2.2) | (2.2) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 93 | 土師瓦 瓦 | (2.7) | (2.7) | (2.7) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 94 | 既削系荷物 重 | 11.8 | (1.7) | (1.7) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |
| 95 | 既削系荷物 重 | 13.0 | (3.4) | (3.4) | 外山: ナゲ 内山: ナゲ | 外山: 深白 10YR 8/2 内山: 深白 10YR 8/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | セメント | |

| 番号 | 基準 | 口径 | 底径 | 距離 | 調整 | | 色調 | 断土 | 備考 |
|-----|---------------|--------------|--------------|-------|---|----|----------------------------------|---------------------------|-----------------------|
| | | | | | 外筒 | 内筒 | | | |
| 96 | 原基器 解説 | | | (1.8) | 外筒:内筒ナダ 内筒:外筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/ | 密 | |
| 97 | 黒土土器 瓶(内筒) | 5.4 | (1.4) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:にら・黄橙10YR7/3 内筒:灰N7/5YR4/1 | 1mm以下の石英・黄石 を含む | |
| 98 | 原基器 口部 | 13.0 | (0.7) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | |
| 99 | 原基器 瓶形 | (2.8) | | | 外筒:ヨコナダ 内筒:ニッナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 1mm以下の心材・長 石・黄丹を含む | |
| 100 | 刀器 (表) | (3.5) 5.1 | (0.5) 0.7 | | | | | | 重さ:18.6g |
| 101 | 土師器 壺 | 11.0 | (3.5) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:にら・樹脂SVR7/3 内筒:灰N7/3 | 1mm以下の石英・黄石 を含む | |
| 102 | 土師器 壺 | 20.6 | (4.5) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ・ハケメ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 1mm以下の石英・黄 石・黄丹を含む | |
| 103 | 原基器 口部 | 17.0 | (2.3) | | 外筒:内筒ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | |
| 104 | 原基器 水飴 | 4.4 | (1.0) | | 外筒:内筒・ハケメ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | |
| 105 | 原基器 盆 | 14.0 | (5.2) | | 外筒:内筒ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 3mm以下の石英・長石 を含む | 外筒部:四輪1条 |
| 106 | 原基器 盆 | 12.0 | (9.0) | | 外筒:内筒ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | セラ物 | 四輪:四輪2条 上下2箇のスカシ1対 |
| 107 | 原基器 白山形瓶 | (4.8) | | | 外筒:内筒ナダ 内筒:ヘラズリ・ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | |
| 108 | 原基器 壺 | 20.2 | (6.0) | | 外筒:白山形・内筒:ナダ 体部:タタキ後心材目 内筒:白山形・内筒ナダ 体部:当て心材 | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | |
| 109 | 原基器 壺 | 17.0 | (4.2) | | 外筒:内筒ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 密 | 内外面糊縫:有茎繊維付着 |
| 110 | 原基器 杯身 | 15.2 | (1.7) | | 外筒:白山形・内筒ナダ 内筒:白山形・内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 南 | |
| 111 | 原基器 杯身 | (1.7) | | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 南 | |
| 112 | 原基器 杯身 | (2.0) | | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 南 | |
| 113 | 原基器 杯身 | 8.4 | (1.0) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ・ハセ・ハケメ 内筒:白山形・ハセ・ハケメ | | 外筒:灰N7/3 内筒:灰N7/3 | 南 | 外表面:火漆 |
| 114 | 赤土土器 豆 | 14.6 | (2.5) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・黄丹を含む | |
| 115 | 赤土土器 豆 | 12.8 | (6.4) | | 外筒:白山形・ヨコナダ 体部:トボギ丸 内筒:ヘラズリ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石・黄丹を含む | |
| 116 | 赤土土器 壺 | (5.3) | | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石・黄丹を含む | 外筒部:上部に櫻吹き状文 |
| 117 | 赤土土器 壺 | 6.6 | (4.4) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ・ハセ・ハケメ 内筒:白山形・ハセ・ハケメ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 2mm以下の石英・長 石・角閃石・黄丹を含む | |
| 118 | 赤土土器 壺 | 4.6 | (9.9) | | 外筒:白山形・直筒のため小明 内筒:ナダ・持手付き | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 119 | 赤土土器 壺 | 11.2 | (2.5) | | 外筒:直筒・横縫のため不規 内筒:直筒 | | 外筒:にら・黄緑10YR7/3 内筒:白N7/3 | 3mm以下の石英・長石 を含む | |
| 120 | 赤土土器 壺 | 21.6 | (3.6) | | 外筒:白山形・ナダ 体部:ヘラズリ後ヘラミガニ 内筒:白山形・ナダ 体部:トボギ・ヘラミガニ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | 口縫端部:四輪2条 |
| 121 | 赤土土器 壺 | 13.8 | (3.8) | | 外筒:白山形・直筒のため小明 内筒:ナダ・持手付き | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 122 | 赤土土器 壺 | 8.0 | (3.8) | | 外筒:直筒・横縫のため小明 内筒:直筒・ナダ・ハセ・ハケメ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 123 | 赤土土器 壺 | 6.0 | (3.7) | | 外筒:直筒・ナダ・ハセ 内筒:直筒・ナダ・ハセ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 124 | 赤土土器 壺 | 8.6 | (3.2) | | 外筒:直筒・横縫のため小明 内筒:ナダ・持手付き | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 125 | 赤土土器 壺 | 14.6 | (4.5) | | 外筒:白山形・直筒のため小明 内筒:ナダ・持手 | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | セラ物 | 外筒:回輪1条 |
| 126 | 赤土土器 壺 | 11.2 | (4.1) | | 外筒:白山形・ナダ・内筒:ヘラズリ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 127 | 赤土土器 壺 | 13.0 | (3.1) | | 外筒:白山形ナダ・内筒:ヘラズリ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 128 | 赤土土器 壺 | 13.8 | (2.9) | | 外筒:白山形ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 129 | 赤土土器 身 | 14.8 | (2.6) | | 外筒:内筒ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 130 | 赤土土器 高脚瓶 | (7.1) | | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ・脚部 | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | セラ物 | 口縫端部:模様・刻のスカシ |
| 131 | 赤土土器 身 | 10.4 | (10.5) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | セラ物 | |
| 132 | 復原器 身 | 9.0 | (13.8) | | 外筒:直筒・内筒:ヘラズリ 体部:回転ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | セラ物 | |
| 133 | 復原器 身 | (2.8) | | | 外筒:回転ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | 外縁:回輪1条 |
| 134 | 復原器 身 | (2.1) | | | 外筒:回転ナダ 内筒:内筒ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 135 | 復原器 身 | 13.5 | (2.8) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 136 | 復原器 身 | 14.6 | (6.8) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |
| 137 | 土師器 身 | 19.4 | (6.0) | | 外筒:白山形・ナダ・ハセ・ハケメ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 138 | 赤土土器 身 | 13.6 | (5.4) | 26.0 | 外筒:白山形・ナダ 体部下半:ヘラミガニ 内筒:白山形・ナダ 体部下半:ヘラミガニ | | 外筒:にら・樹脂SVR5/4 内筒:にら・樹脂SVR5/4 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | 側面外縁:回輪2条 |
| 139 | 赤土土器 身 | 22.2 | (2.7) | | 外筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ 内筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | 側面内縁:回輪3条 |
| 140 | 赤土土器 身 | 14.0 | (3.2) | | 外筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ 内筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 141 | 赤土土器 身 | 13.2 | (6.0) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ・指揮文 | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | 口縫端部:回輪2条 |
| 142 | 赤土土器 身 | 1.8 | (2.2) | | 外筒:ヘラミガニ 内筒:白・ヘラミガニ | | 外筒:にら・樹脂SVR7/3 内筒:にら・樹脂SVR7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | |
| 143 | 赤土土器 身 | 32.0 | (1.9) | | 外筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ 内筒:白山形・ナダ 形狀:ヘラミガニ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む | 口縫端部:回輪3条 |
| 144 | 原基器 瓶 | 9.2 | (0.9) | | 外筒:ナダ 内筒:ナダ | | 外筒:灰N7/3 内筒:白N7/3 | 密 | |

| 種類 学名 | 基準 は根 (原木) | は根 (原木) 幅 | は根 (原木) 厚 | 高さ | | 色調 | 粒土 | 備考 |
|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|------------|---|---|-------------------------|-------------------|
| | | | | は根 (原木) | は根 (原木) | | | |
| 打葉木 右乳丁 黒 | 145 | 0.4 | 5.5 | 1.2 | | | | 重5:65.3g サクナイト |
| 赤牛木 黒 | 146 | 12.0 | | | (5.1) 外面:ナデ 内面:口輪部・ナゲ 外側:薄紅・淡青・淡灰・淡 | 外側:赤褐7.5VNN7/2 内面:にら・黄褐色10VNN7/2 外側:白10VNN7/2 内面:白10VNN7/2 | 1mm以下の中英・長石 5mm以下を含む | 外側体被:墨斑 |
| 赤牛木 黒 | 147 | 15.0 | | | (1.0) 外面:ナゲ 内面:口輪部・ナゲ 外側:薄紅・淡青・淡 | 外側:白10VNN7/2 内面:白10VNN7/2 外側:白10VNN7/2 内面:白10VNN7/2 | 1mm以下の中英・長石 5mm以下を含む | 外側:墨斑 |
| 赤牛木 黒 | 148 | 10.2 | | | (5.4) 外面:ヘラミガキ・ナデ 内面:ヘラミガキ | 外側:ビニル5.5VNN5/4 内面:ビニル5.5VNN5/4 | 2mm以下の中英・長石 を含む | |
| 赤牛木 黒 | 149 | 7.2 | | | (2.1) 外面:黄緑:薄緑のため不明 内面:口輪部・薄緑のため不明 | 外側:灰白VNN7/2 内面:VNN6/6 | 1~2mmの石英・長石 を含む | |
| 赤毛櫸 黒 | 150 | 8.5 | | | (1.0) 外面:全体が半・紅褐色ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:青灰10GNG7/1 内面:青灰10GNG7/1 | 青 | |
| 赤毛櫸 黒 | 151 | 9.8 | | | (2.6) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 黒 | 152 | 7.8 | | | (2.1) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 153 | 10.1 | | | (1.8) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白2.5V7/1 内面:灰白2.5V7/1 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 154 | 12.3 | | | (2.0) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白3.5V7/1 内面:灰白3.5V7/1 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 155 | 13.6 | | | (2.3) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白3.5V7/1 内面:灰白3.5V7/1 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 156 | 12.0 | | | (2.1) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 157 | 14.2 | | | (2.1) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 赤毛櫸 灰身 | 158 | 12.2 | | | (2.8) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 159 | 8.8 | | | (2.3) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 160 | 8.8 | | | (3.2) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 161 | 10.0 | | | (5.2) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 162 | 12.4 | | | (2.3) 外面:ナデ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:口輪ナゲ | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 163 | | | | (2.7) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 164 | | | | (1.6) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 165 | | | | (1.9) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 166 | | | | (1.0) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 167 | | | | (2.8) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白3.5V7/2 内面:灰白3.5V7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 168 | 18.2 | | | (5.1) 外面:口輪ナゲ・タマヘケ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白10VNN7/2 内面:灰白10VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | 口輪削削:頭輪2条 |
| 「」 赤毛櫸 灰身 | 169 | | | | 外側:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 赤毛櫸 灰身 | 170 | 8.0 | | | (2.2) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | 精良 |
| 赤毛櫸 灰身 | 171 | 13.0 | | | (3.1) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 石楠 灰 | 172 | 2.9 | 1.8 | 0.4 | | | | 基51.1g |
| 須毛櫸 灰身 | 173 | 11.2 | 5.6 | 3.3 | 外面:天・上:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ 口輪ナゲ:口輪ナゲ | 外側:灰白10VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | 外側上部:自然軸物看 |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 174 | 6.5 | | | 内面:瘤押さえ 外面:口輪ナゲ | 外側:2.5VNN5/8 内面:2.5VNN5/8 | 2mm以下の石英・長石 を含む | |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 175 | | | | 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 176 | 9.6 | | | 外側:瘤押さえのため不明 内面:瘤押さえのため不明 | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 177 | | | | (3.0) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 178 | | | | (3.4) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | 体型:現状凹孔1個 |
| 「」 須毛櫸 灰身 | 179 | 35.8 | | | (1.5) 外面:ココナツ・ハゲメ 内面:ココナツ | 外側:灰白10VNN8/1 内面:灰白10VNN8/1 | 1mm以下の心材・長心 | |
| 須毛櫸 灰身 | 180 | | | | 外側:ナデ 内面:ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の心材・長心 | |
| 須毛櫸 灰身 | 181 | | | | (3.0) 外面:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 182 | | | | 外側:ナデ 内面:ナデ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 183 | | | | (4.0) 外位:子タマタキ後伐木 内面:ナデ・当て丸痕 | 外側:灰白2.5V7/1 内面:灰白2.5V7/1 | やや老 | |
| 須毛櫸 灰身 | 184 | 14.2 | | | 外側:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 185 | 14.6 | | | (4.6) 外位:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 186 | | | | (9.4) 外面:瘤子ナゲ 内面:瘤子ナゲ | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 187 | 13.7 | | | 内面:瘤押さえのため不明 外側:瘤押さえのため不明 | 外側:2.5VNN5/8 内面:2.5VNN5/8 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 須毛櫸 灰身 | 188 | 10.4 | | | (5.9) 外側:瘤押さえのため不明 内面:瘤押さえのため不明 | 外側:灰白VNN7/2 内面:灰白VNN7/2 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 須毛櫸 灰身 | 189 | 13.2 | | | (7.7) 外面:ナゲ 内面:ナゲ | 外側:灰白2.5V7/1 内面:灰白2.5V7/1 | 青 | |
| 須毛櫸 灰身 | 190 | 25.0 | | | (2.6) 外面:ナデ 内面:ナゲ | 外側:灰白2.5VNN8/2 内面:灰白2.5VNN8/3 | 1mm以下の石英・長石 を含む | |
| 須毛櫸 灰身 | 191 | 9.8 | | | (2.0) 外面:口輪ナゲ 内面:口輪ナゲ | 外側:灰白VNN7/1 内面:灰白VNN7/1 | やや老 | |

| 番号 | 種類 | 寸法 | 断面 | 調査 | | 色 痘 | 地 士 | 備考 |
|-----|----------------|-------------|----------------|------------------------------------|-------|---------------------------------|------------------------------|-------------------------|
| | | | | 外側 | 内側 | | | |
| 192 | 頭部 外側 | | (1.0) | 外面:凹面ナダ 内面:凹面ナダ | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 白~青 | |
| 193 | 頭部 裏面 | | (1.1) | 外面:ナダ 内面:ナダ | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 194 | 政治錠 | (直径) 5.0 | (幅) 1.6 | 外面:凹面ナダ (内面:凹面ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | 重さ:5.9g |
| 195 | 頭部 底面 | 13.0 | | (0.3) (内面:凹面ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青~青 | |
| 196 | 頭部 底面 | | | 外面:凹面ナダ (内面:凹面ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | 外側部:沈殿1条 |
| 197 | 上端部 底面 | | | 外面:凹面のため不規 (内面:凹面のため不規) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/5 | 1mm以下の中黄・黄 石・青斑点を含む | |
| 198 | パイプ 羽口端 | | | 外面:複数10YR8/2 (内面:複数10YR8/2) | | 外面:複数10YR8/2 内面:複数10YR8/2 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 199 | 破片 | (長さ) 3.0 | (幅) 2.1 | | | | | 重さ:7.6g |
| 200 | 頭部 外側 | 13.0 | | (3.0) 外面:凹面のため不規 (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 白~青 | |
| 201 | 頭部 外側 | 14.0 | | (2.8) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 2mm以下の中黄・黄 石・青斑点を含む | |
| 202 | 上端部 外側 | 16.2 | | (0.7) 外面:ナダ・旋合部 (内面:ナダ・旋合部) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 203 | 赤土器 底面 | | | 外面:ナダ (内面:ナダ・旋合部のため不規) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 4mm以下の不規・黄 石・青斑点を含む | |
| 204 | 頭部 外側 | 19.0 | | (3.6) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 白 | 外側端:自然粘材付 |
| 205 | 頭部 外側 | | | (2.1) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 206 | 頭部 底面 | | | (1.2) 外面:凹面 (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 207 | 石器 | (長さ) 4.0 | (幅) 2.3 | | | | | 重さ:4.9g サクライ |
| 208 | 土師器 底 | 10.6 | 7.2 | 2.2 外曲体部:凹面ナダ 底面:凹面・へち形 | | 外面:複数7.5YR8/3 内面:複数7.5YR8/3 | 3mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 209 | 土師器 底 | 12.0 | 6.4 | 2.3 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/6 内面:複数7.5YR8/6 | 青 | |
| 210 | 土師器 底面 | | | (1.9) 外曲体部:凹面ナダ 底面:凹面・へち形 | | 外面:複数7.5YR8/5 内面:複数7.5YR8/6 | 1mm以下の不規・黄心 を含む | |
| 211 | 土師器 底 | 14.2 | 6.4 | 3.9 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/2 内面:複数7.5YR8/2 | 2mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 212 | 土師器 底 | 16.0 | | (3.0) 外面:ナダ (内面:凹面のため不規) | | 外面:複数7.5YR8/4 内面:複数7.5YR8/4 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 213 | 土師器 底 底面 | | | (6.6) (2.1) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/4 内面:複数7.5YR8/4 | 2mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 214 | 黑色土器 底 | 15.2 | 6.3 | 6.2 外面:へち形 (内面:へち形) | | 外面:複数2.5YR4/1 内面:複数2.5YR4/1 | 青 | |
| 215 | 氣泡器 | 12.0 | | (6.0) 外面:凹面ナダ (内面:凹面ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 216 | 泥質陶 器 | | | (8.7) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 217 | 泥質陶 器 | 17.6 | | (9.9) 外面:ナダ (内面:三重具足・上口ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/1 内面:複数7.5YR8/1 | 青 | |
| 218 | 土師器 底面 | 29.0 | | (6.0) 外面:ナダ (内面:凹面のため不規) | | 外面:複数10YR8/2 内面:複数2.5YR/2 | 3mm以下の中黄・黄 石・角紫石・藍斑点を含む | |
| 219 | 瓦 | (長さ) 9.6 | (幅) 7.0 | 凸面:瓦頭年款 内面:瓦頭年款 | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 青 | |
| 220 | 土器 | 38.2 | | (4.9) 外面:凹面ナダ・タヘハケ・接合部 内面:ナダ | | 外面:複数7.5YR8/3 内面:複数7.5YR8/3 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 221 | 赤土器 底面 | 14.0 | | (3.4) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/2 内面:複数10YR8/2 | 2mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 222 | 赤土器 底 | 17.0 | | (4.8) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | 外側部:沈殿2条 |
| 223 | 赤土器 底 | | | (4.0) 外面:コロナダ (内面:コロナダ) | | 外面:複数10YR8/2 内面:複数10YR8/2 | 1mm以下の中黄・黄石 を含む | 外側部:沈殿3条 |
| 224 | 赤土器 底 | | | (3.6) 外面:コロナダ (内面:コロナダ) | | 外面:複数10YR8/4 内面:複数2.5YR/3 | 1mm以下の中黄・黄 石・青斑点を含む | 外側部:褐色糊料付 |
| 225 | 赤土器 底 | 4.2 | (2.4) (2.4) | 外面:凹面のため不規 内面:凹面のため不規 | | 外面:複数2.5YR/2 内面:複数2.5YR/2 | 3mm以下の中黄・黄石 を含む | 外側:凸凹2条、竹管灰 石・青斑点を含む |
| 226 | 片手 | (長さ) 7.9 | (幅) 5.5 | 1.6 | | | | 重さ:40.2g |
| 227 | 男生土器 底面 | | | (4.5) 外面:凹面のため不規 内面:凹面のため不規 | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 2mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 228 | 男生土器 底面 | 15.2 | | (1.5) 外面:凹面のため不規 内面:凹面のため不規 | | 外面:複数7.5YR8/4 内面:複数10YR8/4 | 3mm以下の中黄・黄石 を含む | |
| 229 | 男生土器 底面 | | | (3.0) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | 外面:複数10YR8/1 内面:複数10YR8/1 | |
| 230 | 男生土器 底面 | | | (10.8) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/5 内面:複数7.5YR8/5 | 1~2mmの中黄・黄石 を含む | 外側:凹凸10条44 孔・青斑点を含む |
| 231 | 男生土器 底面 | | | (1.8) 外面:ナダ (内面:ナダ) | | 外面:複数7.5YR8/4 内面:複数7.5YR8/4 | 1~2mmの中黄・黄石 を含む | 外側:凹凸10条44 孔・青斑点を含む |
| 232 | 男生土器 底面 | 19.6 | (6.0) (5.9) | 外面:ナダ 内面:凹面ナダ | | 外面:複数7.5YR8/1 内面:玉總10件/3 | 2mm以下の中黄・黄石 を含む | 内山:黒底 青斑点を含む |
| 233 | 把手 大要 | 49.2 | | | | | | |
| 234 | 鉢底 | (長さ) 3.6 | (幅) 3.6 | 1.2 | | 外面:凹面・凹凸ナダ 内面:凹面・溝付 内面:ナダ | 外面:複数10YR8/1 内面:玉總10件/3 | 重さ:24.7g |
| 235 | 頭部 底部 | | | 11.6 | (0.8) | 外面:凹面・凹凸ナダ 内面:凹面・溝付 内面:ナダ | 外面:複数10YR8/1 内面:玉總10件/3 | |

第4章まとめ

四国横断自動車道開通特別用地対策事業は、高速道路建設により影響を受ける周辺地域の道路や水路等整備事業であるが、中でも大きな影響を受けるインターチェンジ（IC）周辺での事業量が多かったことから、これに伴い埋蔵文化財調査も高松中央IC付近となる高松市林町へ六条町、高松西IC付近となる高松市植紙町へ中間町周辺において行ってきた。平成8年度～15年度に亘る調査であったが、道路拡幅部分が大半を占め、細かいトレンチ（試掘溝）を上記地域の各所に掘った形となつた。このため、検出した遺構の意義付けが困難であった反面、遺跡の広がりを把握する点では有効な調査であった。また現有の道路・農道に沿つた範囲の調査が多く、これに合致した溝・畦の確認により、各地区での（条里型）地割りの施工状況がうかがわれるものが随所で認められた。高松中央IC及び高松西IC周辺部の調査は、さらに2小地区に細分でき、本草では地区ごとに遺跡の確認状況を概観し、まとめとしたい。

【植紙町へ中間町周辺】

（植紙町北部）：高松西ICの北側に位置する（注1）。四国横断自動車建設に先立ち、中森遺跡や八幡遺跡が香川県埋蔵文化財調査センターにより発掘されている。本報告で掲載している中森遺跡の南北方向の溝は、現況の地割に合致しており中世段階まで遡ることが判明した。溝内では石積み状の遺構が認められ、遺物もまとまって出土していることから、県調査により検出されている中世集落を構成する一つの要素となる可能性がある。

（中間へ御厩町・植紙町南部）：高松西ICから北東方向の地域である（注2）。香川県埋蔵文化財調査センターが調査した古代集落遺跡である正箱・栗王寺遺跡が知られており、この遺跡では条里地割に規制された集落構造が確認されている。一方、古川を挟んで対岸の縁辺部に位置する津内・東井坪遺跡（本報告書掲載）では、平安時代に属する条里地割とは一致しない溝が検出され、中・近世期になり条里地割に合致し甲界に相当するとみられる大蛇形が検出されている。このことから古川の西岸或は流域周辺においては、条里制施工が遅れることが考えられる。また当地で行われた確認調査及び工事立会では、近世のものを除くと遺構・遺物は希薄であることから、これら周辺部は近世になり開発が進んだ地区である可能性が考えられる。

【林町へ六条町周辺】

（林町周辺）：高松中央ICから北方向の地域である。中央ICの直下は、讃岐時代晩期～古代期にかけての林・坊城遺跡が所在する。現況の地割の乱れが示す様に、北方へ向く当該期の埋没河川の存在が考えられ、林下所遺跡はその両岸域に位置している。微高地では、当河川と併走する様に弥生時代前期の溝が、林下所墓地や林町8号線内で確認された。林町65号線及び林下所・木太今村上所遺跡では、当河川より発するとみられる北東方向の支流部を認め、古墳時代以降と想定される埋没までの間に各期の遺構・遺物が確認された。この地域はこれまで遺跡の空白地帯であったが、特に古墳時代後期～終末期にかけての掘立柱建物跡や溝といった集落を構成する遺構は、高松平野全体においても確認事例が少数であるため、重要である。今後、この時期の遺跡調査が進めば丘陵部に群集する古墳群との対比が可能であり、注目すべきものである。古代以降では、六条町・林町との境となる六条乾・林下所遺跡で界条線上の溝の他、林下所・木太今村上所遺跡でも現況の地割に合致する溝・畦が認められる。

（六条町）：高松中央ICから東方向の地域である。確認した遺構・遺物はやや希薄であったことから、各期において集落の縁辺であった可能性が考えられる。この地域も遺跡の所在については不明であったが、六条上川西遺跡及び六条西村遺跡の所在が判明した。六条上川西遺跡は東を流れる古川・春日川流域の西端に属し、中世以降に安定した地割となったことが想定される。これ以前は流路及び低地が大半部を占め、南部の微高地において弥生時代の遺構・遺物を確認し、南西部を中心に弥生集落が所在する可能性が考えられる。一方、六条西村遺跡では、西側に現況の地割り及びトレンチ調査により林・坊城遺跡に至る北西方向の流路が想定され、その東岸の微高地に六条・上所遺跡の上流部とみられる弥生時代～古代の水路が確認されている。

（注1、2）高松ICは、ハーフIC、2箇所の通称であり、植紙町在所のもの（注1）、中間町在所のもの（注2）がある。

引用文献・主要参考文献

- 北山龍一郎1995「高松道駆逐設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5回 六条・上所遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤麻葉1995「香川十輪山空庭群における奈良朝開拓」関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢
佐藤麻葉2000「空庭跡地軒轅車に伴う理政文化財発掘調査報告 第4回 空庭跡地遺跡IV」（財）香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤麻葉・野崎雄二「八幡遺跡」「中森遺跡」「古川橋所自働車道設置に伴う理政文化財発掘調査報告 正箱遺跡・栗王寺遺跡」香川県教育委員会ほか
高橋哲也1998「高松道駆逐設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2回 林・坊城遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センター
森下栄治1999「中森遺跡」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 平成11年度」香川県教育委員会ほか
山本英之・山元敏裕1998「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1回 沿・長池道路」高松市教育委員会ほか

報告書抄録

| | |
|--------|---|
| ふりがな | つないひがしへいせき、なまもりいせき、はやしさこいせき、はやしげしょいせき、はやしげしょ・きたいまらじようしょいせき、はやしげしょ・ろくじょういみゆせき、ろくじょうかみかすにいせき、ろくじょうにしむらいせき |
| 書名 | 津内・東井坪遺跡、中森遺跡、林浴遺跡、林下所遺跡、林下所・木太今村上所遺跡、林下所・六条乾遺跡、六条上川西遺跡、六条西村遺跡 |
| 副書名 | 四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ名 | 高松市埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第74集 |
| 編集者名 | 小川 賢 |
| 編集機関 | 高松市教育委員会 |
| 所在地 | 〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636 |
| 市町村コード | 37201 |
| 発行年月日 | 平成16年3月31日 |

| 所以遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|----------------------------|----|------|----------|--------------|--------------|
| 林浴遺跡 (林町 61 号線) | 集落 | 中世 | 坪界線上構 | 須恵質土器 | |
| 林下所遺跡 (林町 60 号線) | 集落 | 近世 | 溝状遺構 | 土師質土器皿 | |
| 林下所遺跡 (林下所盆地) | 集落 | 弥生時代 | 溝状遺構 | 弥生土器 | |
| 林下所遺跡 (林町 8 号線) | 集落 | 弥生時代 | 溝状遺構 | 弥生土器 | |
| 林下所遺跡 (林町 60 号線) | 集落 | 古墳時代 | 土坑 | 須恵器 | |
| 林下所遺跡 (林町 65 号線) | 集落 | 古墳時代 | 掘立柱建物 | 土師器・須恵器 | |
| 六条上川西遺跡 (六条町 38 号線) | 集落 | 弥生時代 | 七坑 | 弥生土器 | |
| 津内・東井坪遺跡 (櫛田町 55 号線) | 集落 | 平安時代 | 大魁跡・溝状遺構 | 土師器・須恵器 | 鐵件器出土 |
| 中森遺跡 (櫛田町 27 号線) | 集落 | 鎌倉時代 | 坪界線上構 | 土師質土器杯 | |
| 林下所・木太今村上所遺跡 (林町 78 号線) | 集落 | 占墳時代 | 掘立柱建物 | 土師器・須恵器・鍛冶器片 | 集落内で鍛冶関連遺物出土 |
| 林下所・六条乾遺跡 (林町 70 号線) | 集落 | 平安時代 | 坪界線上構 | 鉄鋤 | |
| 六条西村遺跡 (林町 23 号線) | 集落 | 古墳時代 | 溝状遺構 | 須恵器 | |

四国横断自動車道建設特別用地対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

津内・東井坪遺跡、中森遺跡、林浴遺跡、
林下所遺跡、林下所・木太今村上所遺跡、
林下所・六条乾遺跡、六条上川西遺跡、
六条西村遺跡

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行日 平成16年3月31日
印 刷 有限会社 中央ファイリング



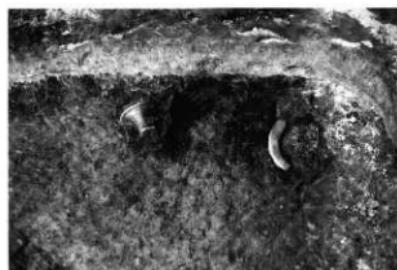
林谷遺跡（林町61号線）調査地全景



林谷遺跡 条里坪界線



林下所遺跡（林町60号線）
平成10年度 工事立会箇所全景



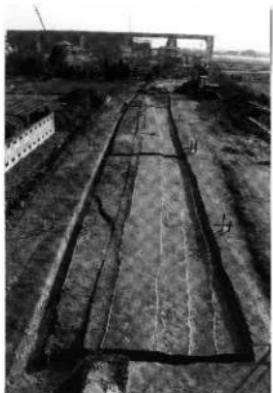
林下所遺跡（林町60号線）
平成10年度 工事立会時遺物出土状況



中森遺跡（檀紙町27号線東区間）
第1トレント SD01 集石部（西から）



中森遺跡（檀紙町27号線東区間）
第1トレント SD01（北から）



津内・東井坪遺跡 調査区全景(西から)



津内・東井坪遺跡 調査地東部



津内・東井坪遺跡 第4トレンチ東壁



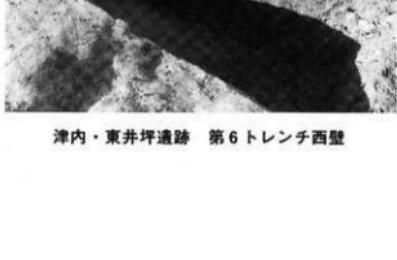
津内・東井坪遺跡 第1トレンチ西壁



津内・東井坪遺跡 第2トレンチ西壁



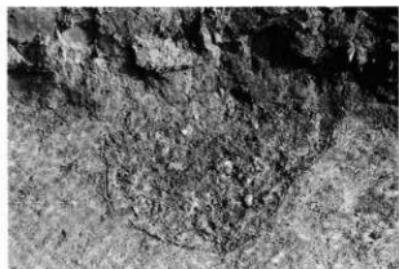
津内・東井坪遺跡 第3トレンチ西壁



津内・東井坪遺跡 第6トレンチ西壁



津内・東井坪遺跡 第5トレンチ西壁



林下所遺跡（林町60号線）No.1区礫堆積検出状況



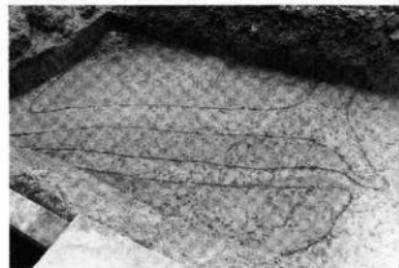
林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD04完掘状況



林下所遺跡（林町60号線）No.2-1区,SE01掘削状況



林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD05検出状況



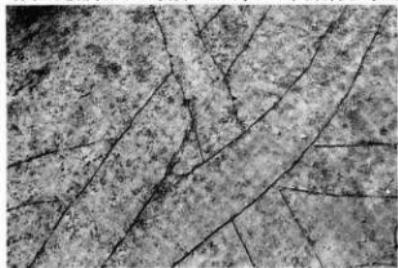
林下所遺跡（林町60号線）No.2-2区,畦畔状遺構検出状況



林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD03（坪境）検出状況



林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD04-SD07掘削状況

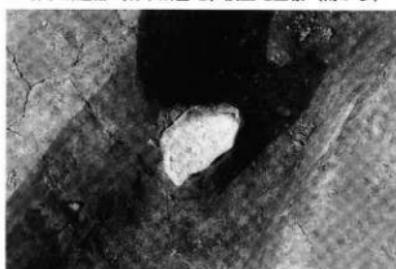


林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD-X検出状況



林下所遺跡（林下所基地）調査地全景（南から）

林下所遺跡
(林下所基地)
SD01 (南から)



林下所遺跡（林下所基地）SD02遺物出土状況

林下所遺跡
(林下所基地)
SD02 (東から)



林下所遺跡（林下所基地）SD02断面

林下所遺跡
(林下所基地)
SD03 (東から)



林下所遺跡（林下所基地）調査地東壁（南から）

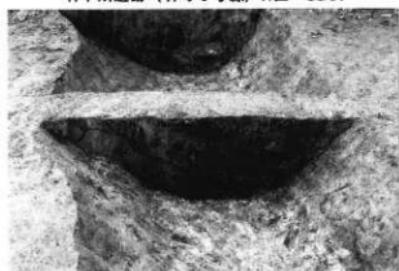




林下所遺跡（林町 8 号線）N 区 SD01



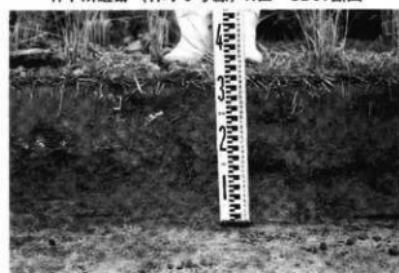
林下所遺跡（林町 8 号線）N 区 SK01（左）



林下所遺跡（林町 8 号線）N 区 SD01 断面



林下所遺跡（林町 8 号線）N 区 SK01 断面



林下所遺跡（林町 8 号線）東壁



林下所遺跡（林町 8 号線）N 区（北から）



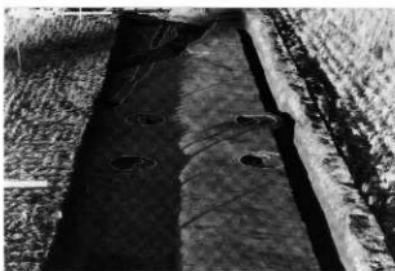
林下所遺跡（林町 8 号線）S 区（北から）



林下所遺跡（林町 8 号線）N 区（南から）



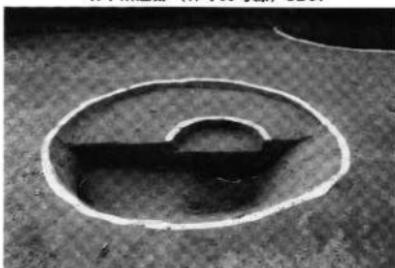
林下所遺跡
(林町65号線)
SB01検出状況



林下所遺跡(林町65号線) SB01



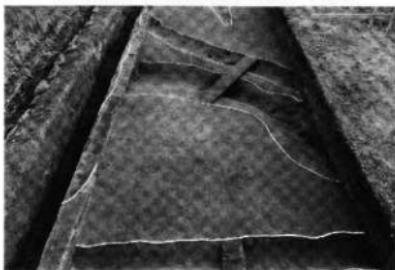
林下所遺跡
(林町65号線)
S区遺構検出
状況



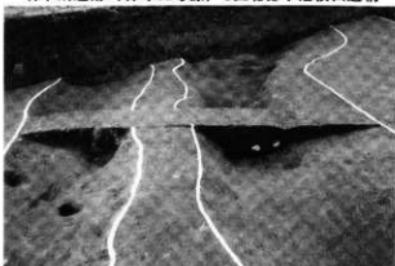
林下所遺跡(林町65号線) SB01 P-2断面



林下所遺跡
(林町65号線)
SD07検出状況



林下所遺跡(林町65号線) S区北部下層検出遺構



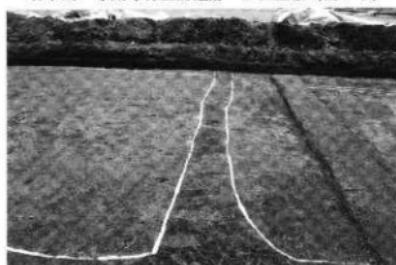
林下所遺跡(林町65号線) SD04・05断面



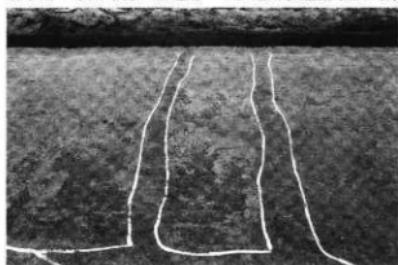
林下所・木太今村上所遺跡 I 区全景（南から）



林下所・木太今村上所遺跡 I 区竪状遺構（南から）



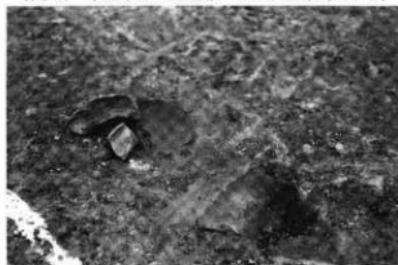
林下所・木太今村上所遺跡 I 区小竪状（西から）



林下所・木太今村上所遺跡 I 区小竪状（西から）



林下所・木太今村上所遺跡 I 区SD02（西から）



林下所・木太今村上所遺跡 I 区大竪状遺物検出状況



林下所・木太今村上所遺跡 I 区SD01（西から）



林下所・木太今村上所遺跡 I 区（北から）



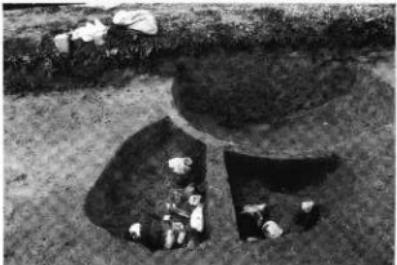
林下所・木太今村上所遺跡 II区全景（北から）



林下所・木太今村上所遺跡 II区SB01（南から）



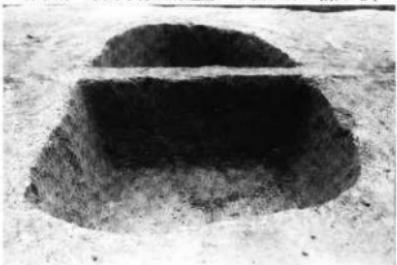
林下所・木太今村上所遺跡 II区SB01 P-2断面



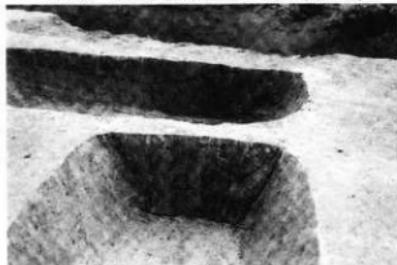
林下所・木太今村上所遺跡 II区SK01（東から）



林下所・木太今村上所遺跡 II区（南から）



林下所・木太今村上所遺跡 II区SK02断面



林下所・木太今村上所遺跡 II区SK03・SD04断面



林下所・木太今村上所遺跡 SD05断面



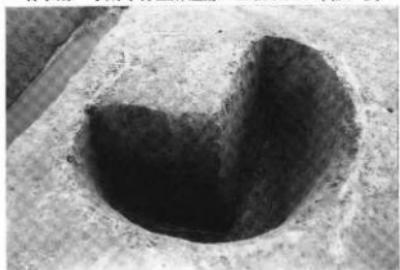
林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区全景（南から）



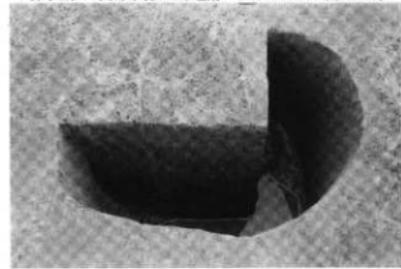
林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01（北から）



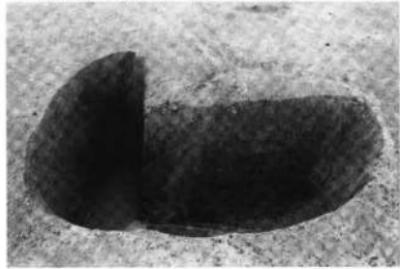
林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01（東から）



林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01 P-1



林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01 P-2



林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01 P-4



林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区SB01 P-6



林下所・木太今村上所遺跡 Ⅲ区南部